

平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報

1993

神戸市教育委員会

平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報 正誤表

頁	誤	正
258 fig. 344	鑄掛部分1の表面	表面の実体顕微鏡写真(×4.25)
258 fig. 345	同左X線透過像	同左植物の痕跡(×42)
260 fig. 348	鑄掛部分2のX線透過像	鑄掛部分2の実体顕微鏡写真(×8.5)
260 fig. 349	鑄掛部分2のX線透過像	鑄掛部分2の実体顕微鏡写真(×42)
260 fig. 350	鑄掛部分2のX線透過像	鑄掛部分3の実体顕微鏡写真(×8.5)
260 fig. 351	鑄掛部分3のX線透過像	鑄掛部分2の実体顕微鏡写真(×4.25)
260 fig. 352	全体のX線透過像	B面のX線透過像

平成2年度

神戸市埋蔵文化財年報

1993

神戸市教育委員会

序

神戸市教育委員会では、本年度も文化財の保護・啓発・調査事業を積極的に推進してまいりました。

埋蔵文化財関係では近年、都市再開発事業や、交通網の整備などの開発、民間の共同住宅建設の増加に伴う、緊急発掘調査の件数が年々急増し、それによる新たな遺跡の発見が相次いでいます。このような状況に対し、今年度は学芸員を1名増員し、教育委員会と財団法人神戸市スポーツ教育公社が調査を担当するという体制で調査を行っております。

また、西区糞台西神中央公園内の神戸市埋蔵文化財センターは、平成4年9月で開館1周年を迎え、この1年間で入館者は6万人を超えました。当センターは、市内出土の埋蔵文化財の整理・収蔵・展示・調査研究・啓発の拠点として一般公開しております。今後さらに、市民の皆様幅広く利用していただければ、幸いに存じます。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査の概要を記したもので、市内で発見された「祖先の遺産」の記録です。市内の遺跡や、その出土遺物を通じて、神戸の歴史を知っていただければ幸いです。

最後になりましたが、事業の実施にあたり、御協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝をいたします。

平成5年3月

神戸市教育長 福 尾 重 信

例 言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成2年度に実施した埋蔵文化財事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導を得て下記の調査組織によって行った。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

檀上 重光	神戸新聞社監査役	神戸市立博物館副館長
宮本長二郎	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	
和田 晴吾	立命館大学文学部教授	

教育委員会事務局

教 育 長	福尾 重信	
社会教育部長	佐藤 郁男	
文化財課長	西川 知佑	
埋蔵文化財係長	奥田 哲通	
文化財課主査	中村 善則・渡辺 伸行	
事務担当学芸員	西岡 誠司	
調査担当学芸員	丸山 潔	
〃	西岡 巧次	
〃	丹治 康明	
〃	千種 浩（保存処理担当）	
〃	黒田 恭正	
〃	山本 雅和	
〃	安田 滋	
〃	須藤 宏	
〃	佐伯 二郎	
〃	山口 英正	
〃	東 喜代秀	
〃	斎木 巖	
〃	松林 宏典	
〃	阿部 敬生	

（財）神戸市スポーツ教育公社

理 事 長	緒方 学	
副 理 事 長	福尾 重信	
専 務 理 事	垂井 主司	
常 務 理 事	飯塚日出雄	
総 務 部 長	藤井 浩	
総 務 課 長	石坪 正之	
文化財調査係長	中村 善則	
（文化財課主査兼務）		
調査担当学芸員	菅本 宏明	
〃	口野 博史	
〃	谷 正俊	
〃	前田 佳久	
〃	富山 直人	
〃	池田 毅	
〃	内藤 俊哉	
〃	橋詰 清孝	
〃	浅谷 誠吾	
〃	井尻 格	

2. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究会社会科研究部編集（神戸市スポーツ教育公社発行）の5万分の1神戸市全国を、また各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1地形図を使用した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆して作成し、谷 正俊が編集を行った。
4. 表紙写真は、篠原遺跡出土土織の集合写真（表表紙）、同遺跡出土の石棒（裏表紙）である。（撮影：楠華堂 楠本真紀子）

目 次

序	(1)
例 言	(2)
目 次	(3)
挿図目次	(4)
I. 平成2年度事業概要	1
平成2年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	5
平成2年度神戸市埋蔵文化財調査地位置図	12
II. 平成2年度の発掘調査	19
1. 神出遺跡	19
2. 鍋谷池遺跡	23
3. 栄遺跡	31
4. 養田遺跡	35
5. 大畑遺跡	41
6. 玉津田中遺跡(平野地区)	47
7. 新方遺跡(平松地点)	61
8. 狩口台遺跡	65
9. 垂水日向遺跡(第3次調査)	77
10. 垂水日向遺跡(第4次調査)	83
11. 戎町遺跡(第6次調査)	89
12. 戎町遺跡(第7次調査)	101
13. 兵庫津遺跡	105
14. 旧三宮駅構内遺跡	113
15. 篠原遺跡	125
16. 郡家遺跡(城ノ前地区)	137
17. 住古宮町遺跡	145
18. 森北町遺跡	155
19. 小部北ノ谷遺跡	161
20. 西脇山遺跡	177
21. 山田原野遺跡	183
22. 神田遺跡	187
23. 屏風遺跡	193
24. 附物遺跡	197
25. 宅原遺跡(豊浦地区)	205
26. 宅原遺跡(内垣地区)	217
27. 下小名田遺跡(第1～5次調査)	231
28. 下二郎遺跡(第3・4次調査)	247
III. 平成2年度の保存科学処理	253

挿 図 目 次

fig. 1	調査地位置図	19	fig. 39	V層弥生土器出土状況(北西から)	
fig. 2	調査地遠景(写真)	20	[写真]		45
fig. 3	遺構配置図	20	fig. 40	調査地位置図	47
fig. 4	2トレンチピット群平面図	21	fig. 41	2トレンチ南平部および3トレンチ東 端部平面図	48
fig. 5	2トレンチS X01平面図	21	fig. 42	4トレンチ遺構配置図	49
fig. 6	2トレンチピット群(西から)(写真)	22	fig. 43	4トレンチS B401・402全景(北から)	
fig. 7	2トレンチS X01検出状況(東から)	22	[写真]		50
fig. 8	2トレンチS X01完掘状況(東から)	22	fig. 44	S P420須恵器埴田土状況(南から)	
[写真]		22	[写真]		50
fig. 9	調査地位置図	23	fig. 45	同左(南から)	50
fig. 10	鍋谷池2号墳完掘状況(写真)	24	fig. 46	5トレンチS X508土器出土状況	
fig. 11	鍋谷池2号墳墳丘測量図	25	[写真]		51
fig. 12	調査区測量図	26	fig. 47	S X508完掘状況(南から)(写真)	52
fig. 13	鍋谷池2号墳埋葬施設平面・断面図	27	fig. 48	5トレンチ遺構配置図	52
fig. 14	鍋谷池2号墳埋葬施設(写真)	27	fig. 49	5トレンチS T501全景(北から)	
fig. 15	埋葬施設内鉄刀出土状況(写真)	27	[写真]		53
fig. 16	鍋谷池2号墳遺物出土地および接合関 係	28	fig. 50	水田遺構平面図	53
fig. 17	鍋谷池2号墳埋葬施設出土鉄製品	29	fig. 51	6トレンチS D601南側遺物出土状況 (北から)(写真)	54
fig. 18	鍋谷池2号墳出土土器	30	fig. 52	6トレンチS D601完掘状況(北から)	
fig. 19	調査地位置図	31	[写真]		54
fig. 20	1～3トレンチ平面図	32	fig. 53	6トレンチS D601木製品出土状況(北 から)(写真)	55
fig. 21	2トレンチ西側全景(写真)	33	fig. 54	6トレンチS D601土器群2全景(東か ら)(写真)	56
fig. 22	1トレンチS B101平面図	33	fig. 55	6トレンチS D601編目付土器出土状 況(南から)(写真)	57
fig. 23	2トレンチ上留遺構	33	fig. 56	S D601・603出土木製品	58
fig. 24	S B501出土遺物	34	fig. 57	S D601土器群2出土遺物	59
fig. 25	5トレンチS B501平面図	34	fig. 58	S D601・S X508出土遺物	60
fig. 26	調査地位置図	35	fig. 59	調査地位置図	61
fig. 27	調査地平面図	36	fig. 60	調査区位置図	62
fig. 28	S D03遺物出土状況(西から)(写真)	37	fig. 61	調査区平面・断面図	62
fig. 29	S D03遺物出土状況	38	fig. 62	遺構検出状況(南から)(写真)	63
fig. 30	糞田遺跡出土遺物(1)	39	fig. 63	トレンチ断面西壁(写真)	63
fig. 31	糞田遺跡出土遺物(2)	40	fig. 64	トレンチ全景(南から)(写真)	63
fig. 32	調査地位置図	41	fig. 65	新方遺跡出土土器	64
fig. 33	調査前の状況(写真)	42	fig. 66	調査地位置図	65
fig. 34	調査地平面図	42	fig. 67	調査区平面図	66
fig. 35	流路内堆積土の状況(写真)	43	fig. 68	S B01平面・断面図	67
fig. 36	流路断面図	44			
fig. 37	Ⅱ層鎌倉時代の土器出土状況図	45			
fig. 38	V層出土遺物	45			

fig. 69	S B02平面・断面図	68	fig. 105	第8遺構面平面図	99
fig. 70	S B03-04平面・断面図	69	fig. 106	調査区全景(南から)[写真]	100
fig. 71	調査区東側遺構全景(北から)[写真]	69	fig. 107	調査地位置図	101
fig. 72	調査区東側遺構全景(南から)[写真]	70	fig. 108	調査地平面図(第1遺構面)	102
fig. 73	S B05-08平面・断面図	71	fig. 109	調査地平面図(第2・3遺構面)	103
fig. 74	S B08-09全景(南から)[写真]	71	fig. 110	第1遺構面全景(西から)[写真]	104
fig. 75	S B09-14平面・断面図	72	fig. 111	第2遺構面全景(西から)[写真]	104
fig. 76	S B17-20平面・断面図	73	fig. 112	第3遺構面木製品出土状況(東から)	104
fig. 77	きつね塚古墳西側外堀と石室主軸線上の溝(西から)[写真]	74	fig. 113	戎町遺跡出土遺物	104
fig. 78	狩口台遺跡から浜路島を望む(北東から)[写真]	75	fig. 114	調査地位置図	105
fig. 79	きつね塚古墳全景(北西から)[写真]	76	fig. 115	I区第2遺構面(北から)[写真]	106
fig. 80	調査地位置図	77	fig. 116	調査区配置図	106
fig. 81	第1遺構面平面図	78	fig. 117	I区遺構平面図	107
fig. 82	S B01平面・断面図	78	fig. 118	II区遺構平面図	108
fig. 83	S B01全景(南から)[写真]	78	fig. 119	II区ピット11(南から)[写真]	109
fig. 84	灰色砂器内出土の縄文土器[写真]	79	fig. 120	II区ピット13出土遺物	110
fig. 85	第2遺構面平面図	80	fig. 121	I区S X02出土遺物	110
fig. 86	第2遺構面北半流木検出状況(北から)[写真]	80	fig. 122	I・II区出土瓦・フイゴ羽口	110
fig. 87	第1～2遺構面土層断面(南から)[写真]	80	fig. 123	I×S X01出土遺物	111
fig. 88	7区分割トレンチ土層断面(北西から)[写真]	81	fig. 124	I・II区近世遺構出土遺物	112
fig. 89	垂水日向遺跡(第3次調査)縄文時代後期の土器	82	fig. 125	調査地位置図	113
fig. 90	調査地位置図	83	fig. 126	調査地区分割図	114
fig. 91	調査地西半全景(南東から)[写真]	84	fig. 127	III区遺構配置図	115
fig. 92	調査地平面図	85	fig. 128	S X301中央上坑部平面・断面図	116
fig. 93	S B01-02・04出土遺物	86	fig. 129	S X301-A出土遺物	117
fig. 94	S B03出土遺物	87	fig. 130	S X301-B出土土師器	118
fig. 95	調査地位置図	89	fig. 131	S X301-B出土黒色土器	118
fig. 96	作業風景[写真]	90	fig. 132	S X301-B出土土錘	118
fig. 97	調査区地区分割図	91	fig. 133	S E201平面・断面図	119
fig. 98	S D101井戸枠状木製品出土状況(南から)[写真]	92	fig. 134	S E202平面・断面図	120
fig. 99	第1遺構面出土土器	93	fig. 135	S E201完棚状況(北から)[写真]	120
fig. 100	S K401土器出土状況[写真]	94	fig. 136	S E203平面・断面図	121
fig. 101	S K401出土土器	95	fig. 137	III区全景[写真]	121
fig. 102	第6遺構面平面図	97	fig. 138	S K201出土遺物	122
fig. 103	第7遺構面平面図	97	fig. 139	S E202出土遺物	122
fig. 104	S X704土器出土状況[写真]	98	fig. 140	S E201出土遺物	123
			fig. 141	S E203出土遺物	123
			fig. 142	調査地位置図	125
			fig. 143	昭和58年度調査地と今回の調査地との関係位置図	126
			fig. 144	基本土層柱状図(北壁)	127
			fig. 145	縄文・弥生時代遺構面	128
			fig. 146	北安田区S X02遺物出土状況図	129

fig. 147	SK159平面・立面図	130			
fig. 148	集石遺構平面図	130	fig. 183	S B02平面・断面図	151
fig. 149	土器棺墓1(北から)[写真]	131	fig. 184	北地区平面・断面図	152
fig. 150	土器棺墓1平面・立面図	131	fig. 185	S E01井戸枠検出状況(北西から)	
fig. 151	石椁出土状況(北から)[写真]	132		[写真]	153
fig. 152	石椁	132	fig. 186	南地区第2遺構面全景(東から)[写真]	
fig. 153	石鏃と磨製石剣	132			153
fig. 154	縄文時代S X02・土器棺1出土遺物	133	fig. 187	住吉宮町遺跡出土遺物	154
fig. 155	S B04平面・断面図	134	fig. 188	調査地位置図	155
fig. 156	S X08出土遺物	135	fig. 189	第1遺構面平面図	156
fig. 157	4区(東区)全景(東から)[写真]	136	fig. 190	第2遺構面石列(南西から)[写真]	157
fig. 158	調査地位置図	137	fig. 191	第2遺構面平面図	157
fig. 159	第1遺構面S P06平面・断面図	138	fig. 192	第3遺構面平面図	158
fig. 160	第1遺構面平面図	138	fig. 193	黄褐色砂遺物出土状況[写真]	159
fig. 161	第2遺構面平面図	139	fig. 194	同上上の皿をはずした状況[写真]	159
fig. 162	第2遺構面流路断面図	140	fig. 195	森北町遺跡出土遺物(1)	159
fig. 163	第2遺構面調査区中央部遺構検出状況(東から)[写真]	140	fig. 196	森北町遺跡出土遺物(2)	160
			fig. 197	調査地位置図	161
fig. 164	第3遺構面平面図	141	fig. 198	中世遺構面全景(南から)[写真]	162
fig. 165	第3遺構面S K301土器出土状況(西から)[写真]	142	fig. 199	第1次調査出土遺物	162
fig. 166	第3遺構面S K301平面・断面図	142	fig. 200	第1次調査出土銅銭	163
fig. 167	第2遺構面流路内曝出土状況(北から)[写真]	142	fig. 201	調査区全体図(中・近世遺構面)	164
			fig. 202	S D402遺物出土状況(南から)[写真]	
fig. 168	第3遺構面調査区中央部遺構検出状況(北から)[写真]	142			165
fig. 169	第2遺構面流路内土器出土状況(北から)[写真]	143	fig. 203	S D402遺物出土状況図	165
fig. 170	郡家遺跡(城ノ前地区)出土遺物	144	fig. 204	第4トレンチ配石遺構面・断面図	166
fig. 171	調査地位置図	145	fig. 205	第4トレンチ縄文時代遺構面平面図	166
fig. 172	調査範囲図	146	fig. 206	第4トレンチ出土遺物	167
fig. 173	S B03平面・断面図	146	fig. 207	第4・5トレンチ出土縄文土器・磨石	167
fig. 174	第2遺構面平面図	147	fig. 208	第5トレンチ縄文時代遺物出土状況(北西から)[写真]	168
fig. 175	S B04平面・断面図	148			
fig. 176	第2遺構面南地区北北部(北から)[写真]	148	fig. 209	第5トレンチ縄文時代遺構面平面図	169
			fig. 210	第4・5トレンチ出土石器	169
fig. 177	S E01-02・03平面・断面図	149	fig. 211	第8トレンチ中世・近世遺構面平面図	170
fig. 178	S E01平面・立面図	149			
fig. 179	S E01-02・03検出状況(北から)[写真]		fig. 212	第8トレンチ中世遺構面全景(北西から)[写真]	171
		150			
fig. 180	S E01全景(北から)[写真]	150	fig. 213	S K819遺物出土状況図	172
fig. 181	S B01平面・断面図	151	fig. 214	S K819遺物出土状況(第1面・北東から)[写真]	172
fig. 182	第2遺構面南地区西西部(北から)		fig. 215	S K819遺物出土状況(第3面・北東から)[写真]	172
			fig. 216	S K819出土遺物	173

fig. 217	S X 804遺物出土状況図	174	fig. 257	S B 01-02(南西から)[写真]	200
fig. 218	S X 804出土遺物	174	fig. 258	近世土坑平面・断面図	201
fig. 219	S P 854遺物出土状況(北から)[写真]	175	fig. 259	近世土坑群全景(北東から)[写真]	202
		175	fig. 260	S X 01完掘状況(北東から)[写真]	202
fig. 220	S P 854遺物出土状況図	175	fig. 261	S K 02竪山出土状況(南東から)[写真]	202
fig. 221	第 8 トレンチ遺構出土遺物	175	fig. 262	調査地遠景[写真]	203
fig. 222	調査地位置図	177	fig. 263	調査前状況[写真]	203
fig. 223	第 I 地区平面図	178	fig. 264	附物遺跡出土遺物	204
fig. 224	調査区位置図	178	fig. 265	調査地位置図	205
fig. 225	第 I 地区全景(南から)[写真]	179	fig. 266	A トレンチ北部全景(北から)[写真]	206
fig. 226	第 I 地区 S X 01平面・断面図	179	fig. 267	トレンチ配置図	206
fig. 227	第 I 地区遺構平面図	179	fig. 268	B トレンチ竪穴住居址(西から)[写真]	207
fig. 228	第 I 地区 S T 01平面図	180			
fig. 229	S T 01出土燧骨器	180	fig. 269	B トレンチ獨立柱建物址(西から) [写真]	208
fig. 230	S T 01遺物・燧骨検出状況	180			
fig. 231	第 II 地区平面図	181	fig. 270	B トレンチ溝平面・断面図	208
fig. 232	第 II 地区全景(西から)[写真]	182	fig. 271	D トレンチ全景(北東より)[写真]	209
fig. 233	西脇山遺跡出土遺物	182	fig. 272	D トレンチ獨立柱建物址 1・2 平面・断面図	210
fig. 234	調査地位置図	183			
fig. 235	調査地遠景(西から)[写真]	184	fig. 273	D トレンチ獨立柱建物址群(西より) [写真]	211
fig. 236	トレンチ地区別図	185			
fig. 237	C・D 区および拡張部第 7 水田面平面 図	185	fig. 274	E トレンチ獨立柱建物址	212
		185	fig. 275	E トレンチ獨立柱建物址(西から) [写真]	213
fig. 238	D・E・F 区第 7 水田層下層平面図	185			
fig. 239	山田原野遺跡出土遺物	186	fig. 276	E トレンチ溝 1 検出状況(南から) [写真]	213
fig. 240	調査地位置図	187			
fig. 241	A 区第 1 遺構面検出状況(東から) [写真]	188	fig. 277	E トレンチ下層ビット群(西から) [写真]	214
		188			
fig. 242	A・B 区平面・断面図	189	fig. 278	E トレンチ下層ビット群	214
fig. 243	A 区第 2 遺構面全景(東から)[写真]	190	fig. 279	宅原遺跡(豊浦地区)出土土器(1)	214
fig. 244	神田遺跡出土遺物	191	fig. 280	宅原遺跡(豊浦地区)出土土器(2)	215
fig. 245	調査区全景(南西から)[写真]	192	fig. 281	調査地位置図	217
fig. 246	B 区全景[写真]	192	fig. 282	調査区全景(北から)[写真]	218
fig. 247	調査地位置図	193	fig. 283	弥生時代後期遺構面平面図	219
fig. 248	調査区平面図	194	fig. 284	井塚出土状況(西から)[写真]	220
fig. 249	獨立柱建物址平面図	195	fig. 285	河道 3 井堰平面・立面図	221
fig. 250	木棺墓址平面・断面図	195	fig. 286	河道 3 護岸平面図	222
fig. 251	調査区全景(東から)[写真]	196	fig. 287	建築構造物(間仕切り壁)平面図	222
fig. 252	調査地位置図	197	fig. 288	河道 3 建築構造物出土状況(北から) [写真]	223
fig. 253	調査区平面図	198			
fig. 254	S B 01-03平面・断面図	199	fig. 289	河道 4 木材出土状況(東から)[写真]	223
fig. 255	S B 02平面・断面図	200	fig. 290	河道平面図	224
fig. 256	調査区全景(東から)[写真]	200	fig. 291	河道出土土器	225

fig. 292	河道出土木器	226	[写真]	246	
fig. 293	縄文時代北調査区第1遺構面(南から) [写真]	227	fig. 321	調査地位置図	247
fig. 294	縄文時代第1遺構面平面図	228	fig. 322	下二郎遺跡第3次調査地点出土遺物	248
fig. 295	縄文時代第2遺構面平面図	229	fig. 323	第3次調査地点平面図	248
fig. 296	調査区全景(西から)[写真]	230	fig. 324	第3次調査地点調査前の状況(北から) [写真]	249
fig. 297	調査地位置図	231	fig. 325	第3次調査区全景(南から)[写真]	249
fig. 298	トレンチ配置図(1)	232	fig. 326	第4次調査地点地区割図	250
fig. 299	第1次調査2・3トレンチ平面図	233	fig. 327	I区遺構平面図	250
fig. 300	第1次調査3トレンチ遺構検出状況 (南から)[写真]	233	fig. 328	V区遺構向全景(北から)[写真]	251
fig. 301	第2次調査地区平面・断面図	234	fig. 329	下二郎遺跡(第4次調査)出土遺物	252
fig. 302	第3次調査4トレンチ全景(南から) [写真]	235	fig. 330	V区遺構平面図	252
fig. 303	第3次調査4トレンチ掘立柱建物址検 出状況(南から)[写真]	236	fig. 331	鉄刀の周囲を掘り下げる[写真]	254
fig. 304	第3次調査4トレンチ平面図・掘立柱 建物址平面図	236	fig. 332	アルミホイールで鉄刀を保護する[写真]	254
fig. 305	トレンチ配置図(2)	237	fig. 333	発泡ウレタンで梱包し取り上げる [写真]	254
fig. 306	第4次調査南地区遺構平面図	238	fig. 334	裏側の土を慎重に取り除く[写真]	254
fig. 307	第4次調査南地区第1遺構面全景(南 から)[写真]	239	fig. 335	人物の手前が発泡ウレタン[写真]	255
fig. 308	第4次調査南地区第2遺構面全景(北 から)[写真]	239	fig. 336	2本のジャッキで板を挿入する[写真]	255
fig. 309	第4次調査南地区第3遺構面全景(北 から)[写真]	239	fig. 337	挿入後周囲を掘り下げる[写真]	255
fig. 310	下小名田遺跡第4次調査出土遺物(1)	240	fig. 338	上面を発泡ウレタンで梱包しさらに板 と固定する[写真]	255
fig. 311	下小名田遺跡第4次調査出土遺物(2)	241	fig. 339	PEG含浸後表面を洗浄しウエスで拭 き取る[写真]	256
fig. 312	下小名田遺跡第4次調査出土遺物(3)	242	fig. 340	処理前に金網で曲面を固定する[写真]	256
fig. 313	第4次調査S B01平面・立面図	242	fig. 341	処理前の木札[写真]	257
fig. 314	トレンチ配置図(3)	243	fig. 342	処理後の木札[写真]	257
fig. 315	第5次調査1トレンチ調査前の状況 (西から)[写真]	244	fig. 343	石棺材の樹膠含浸作業[写真]	258
fig. 316	第5次調査1トレンチ平面図	244	fig. 344	鉤掛部分1の表面[写真]	258
fig. 317	第5次調査2トレンチ湿地地形発生 土器出土状況(北から)[写真]	245	fig. 345	同左X線透過像[写真]	258
fig. 318	第5次調査2トレンチ調査前の状況 (南から)[写真]	245	fig. 346	本山遺跡出土銅鐸X線写真(A面) [写真]	259
fig. 319	第5次調査2トレンチ平面図	246	fig. 347	同上(B面)[写真]	259
fig. 320	第5次調査2トレンチ全景(南東から)		fig. 348	鉤掛部分2のX線透過像[写真]	260
			fig. 349	鉤掛部分2のX線透過像[写真]	260
			fig. 350	鉤掛部分2のX線透過像[写真]	260
			fig. 351	鉤掛部分3のX線透過像[写真]	260
			fig. 352	全体のX線透過像[写真]	260
			表 1	掘立柱建物址規模一覧表	70
			表 2	兵庫津遺跡出土遺物の遺構名一覧	109

I. 平成2年度事業概要

1. 普及啓発 事業

文化財保護強調月間の催し

(1)大蔵山遺跡公園（垂水区西舞子4丁目）では、11月1日から11月7日まで、復元竪穴住居の内部の公開とともに、古代人の生活の一部を実際
に体験できるよう、火おこし、脱穀等を行った。

(2)「地下に眠る神戸の遺跡展Ⅷ—速報展—」

例年、11月1日から30日までは、五色塚古墳展示室において最近の発掘
資料を広く市民の方々に知っていただくために、特別展示「地下に眠る神
戸の歴史展」を行っている。8回目の展示会となった今回の展示では、速
報展として、市内で新たに出土した土器や石器を縄文時代から古墳時代ま
での年代順にならべ身近にある遺跡に対する理解を深めていただくように
展示した。

玉津環境センター内「吉田南遺跡出土資料展示室」開設

西区森友所在の玉津環境センター内で発見された吉田南遺跡は、弥生時
代から中世にかけての大規模な遺跡であり、「明石郡衙」の有力な候補地
のひとつである。このたび、神戸市下水道局の協力により、施設の一面に
展示室を設け、当遺跡から出土した遺物の一部を公開した。

また、下水道局が行った遺跡の一部の復元・整備作業（保存された奈良
時代の掘立柱建物址群について、その建物の平面的な規模が判るような復
元・整備を行った）に協力し、公園として市民の方々に開放した。

地域活動への参加

市内各地の公民館、学校では、様々な地域・文化活動が行われているが、
各地域の歴史を地元の方々に知っていただくことを目的に、周辺の遺跡の
出土遺物や写真パネルの展示会を開催している。今年度は以下の場所で文
化財展を行った。

(1)西区玉津南公民館「吉田南遺跡・大畑遺跡展」

近年発掘された吉田南遺跡・大畑遺跡の弥生時代～奈良時代の遺物を展
示し、その調査成果を紹介した。

(2)北区長尾町公民館「長尾町埋蔵文化財展」

昭和61年より例年、北区の長尾町公民館で、長尾町内で発見された埋蔵
文化財の展示を行っているが、平成2年度は、宅原遺跡（内垣地区）から
出土した縄文時代～古墳時代の遺物、木の葉等を速報展として公開した。

刊行物

平成2年度の埋蔵文化財関係の刊行物は以下の3点である。

- | | | |
|---------------------|----|-------|
| 1. 押部遺跡第2次発掘調査概報 | 額価 | 1000円 |
| 2. 本山遺跡第12次調査の概要 | 額価 | 500円 |
| 3. 地下に眠る神戸の歴史展 VIII | 額価 | 50円 |

2. 文化財 調査事業

当市における埋蔵文化財の発掘調査件数は年々増加の傾向にあるが、今年度は72件となり、前年度比で17件増加である。しかし、平成元年度の緊急発掘調査に要した経費と調査面積は、7億5千4百万円、49,385㎡であるのに対し、2年度は、7億4千9百万円、54,899㎡と調査費は減少したにもかかわらず、面積は増加している。これは、遺構の分布密度が低い調査箇所が多かったため、調査に要した経費が少なくて済んだ結果といえる。

民間調査団の調査件数は30件と前年度より2件増加しているが、調査面積は、40,559㎡と著しく増加している。これは、民間開発の増加とともに、規模の大きい公共事業の民間調査団への調査委託が増えたことがその要因である。

また、開発計画の際に提出される遺跡分布調査依頼件数は297件（開発行為の事前審査、ゴルフ場開発、土地利用目的審査を含む）と前年度より6件減、それに基づく試掘調査件数は180件（前年度比40件減）と減少傾向にあり、バブル景気と称された土地に対する投資・投機的な関心は、ピークを越え、やや鈍化した傾向が窺える。

これらを地域別に見ると、旧市街地での試掘調査がほぼ全体の半数を占め、開発が進んでいる西区での調査件数も多い。

また、緊急発掘調査は、西・北神地区が圧倒的に多いことが判る。

平成2年度埋蔵文化財試掘調査および緊急発掘調査状況

	試掘調査件数	緊急発掘調査件数	緊急発掘調査面積
東灘区	29	6	1,568㎡
灘区	13	2	2,962㎡
中央区	18	7	5,923㎡
兵庫区	12	2	307㎡
長田区	12	2	432㎡
須磨区	11	3	1,153㎡
垂水区	8	5	3,195㎡
西区	53	22	13,503㎡
北区	24	23	25,856㎡
合計	180件	72件	54,899㎡

発掘調査原因の事業別件数は民間事業22件、公共事業50件で、公共事業が約6割を占める。公共事業のうち、圃場整備事業・道路建設事業等の原因が多くを占めている。民間事業の場合は、市街地における共同住宅建設工事が主な調査原因となっている。

また、保存科学処理業務によって、遺物の保存処理および遺構の切り取り等の作業をさらに押し進め、従来は、現地に保存が不可能であった遺構や、木製品、金属製品等の科学処理の必要なものの保存処理を行った。

3. 市内遺跡 発掘調査 の概要

縄文時代

神戸市内では、埋蔵文化財発掘調査の件数が増加するにしたがって、従来よく判らなかった各時代の遺構、遺物が発見されてきた。

垂水区垂水日向遺跡では、約6300年前に降下したといわれる鬼界アカホヤ火山灰の純降下層が確認された。6300年前頃は、縄文海進と呼ばれる現在よりも海水準が高かった時期にあっており、純降下層が確認された高さは、瀬戸内海における当時の海面の高さを示す一資料として注目される。

また、火山灰層の上層からは、洪水で流された大量の流木とともに、市内では、あまり確認されていなかった縄文時代中期～後期の土器が多数発見され、当該時期の土器の様相が明らかになった。

北区小部北ノ谷遺跡では、縄文時代中期頃の配石遺構、土坑、溝状遺構等を検出している。配石遺構の近くには、サヌカイト、チャート、黒曜石製の石器や剥片が大量に散布しており、付近からは、縄文時代中期頃の土器が出土している。遺跡の立地条件からみて、一時的なキャンプ地であった可能性が高いと考えられる。

灘区篠原遺跡では、調査区の東半分で、縄文時代晩期の甕棺墓や土坑墓が確認された。西半分では、ピット群が広がり、居住域であったと思われる。

また、大量の石炭やチップ、台石等が出土しており、石器製作址であった可能性が強い。

弥生時代

西区新方遺跡（平松地点）では、溝状遺構から弥生時代前期初頭の土器が出土した。当遺跡は、弥生時代中期初頭～古墳時代を中心とした神戸でも有数の大規模な遺跡であるが、今回の調査によって、遺跡の起源が弥生時代前期初頭まで遡ることが明らかになった。

西区玉津田中遺跡（平野地区）では、弥生時代後期の流路から市内で2例目の鳥形木製品が発見された。この流路からは、浮き、木包丁、男根状木製品等が出土している。また、調査区の中で、弥生時代後期後半～古墳時代初頭（庄内式併行期）の土器が東西17m、南北9mの範囲で大量に出

土（28ℓコンテナ60箱）し、その直下からは柱穴が確認されている。どのような性格の遺構であるかは不明である。

北区宅原遺跡では、弥生時代後期の流路内から井堰と護岸が各1ヵ所検出された。井堰は、全長約6.5m、現存高約60cmを測る。縦杭は約20本、横木3本で構成され、建築材の転用されたものも混じっている。

護岸は、全長約11m、高さ1.1mの規模を持ち、縦杭は106本、横木6本が確認されている。杭間には、隙間を埋めるため小枝類やアジ類の植物茎を束にして被覆しており、一部では、建物の壁材の一部と考えられる建築構造物が転用されている。弥生時代の壁材の出土は市内で初めてである。

古墳時代

西区鍋谷池遺跡では、明石川を望む丘陵の頂きに古墳時代後期の木棺直葬墳が確認された。墳丘は流失し平坦になっていたが、木棺内からは、鉄刀1振、鉄鍔2点、刀子1振等が出土した。周溝内からは、須恵器の壺、提瓶、甕、長頸壺、杯等が出土している。これらは墳丘が完成した後から、棺を埋葬するまでに、墓上の祭祀に使用され、墳丘裾、周溝の近くに置かれたものであり、注目される。

西区養田遺跡では、古墳時代後期の中から須恵器の甕、壺、横瓶、杯身等がほぼ完形品で出土した。また、別の溝からは須恵器の有蓋高杯が、ほぼ完全な形で出土している。これらの遺物は、出土状態からみて、通常の生活に用いられた状態を示しているとは考えにくく、なんらかのまつりに用いられたものであると推定される。

奈良・平安時代

東灘区住吉町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物址2棟の他、井戸址3基が検出されているが、その井戸から、建築部材（「扉」材）を転用した井戸枠が出土した。「扉」材の発見は市内で初めてであり、当時の建築様式を知る上での貴重な発見といえる。

中・近世

北区小部北ノ谷遺跡では、土坑から土師器の小皿が27枚重ねて置かれた状態で出土し、また、土師器の鍋の内面に墨書で、梵字ウーンと漢字「叶」を書くという地鎮めのまつりの遺構が確認された。

東灘区森北町遺跡では、洪水砂の中から、瓦器羽釜の中に土師器皿2枚の口縁部どうしを合わせて入れたものが出土している。これらは、当時のまつり、まじないの一例を示す発見である。

兵庫区兵庫津遺跡では、小規模な発掘調査ながら、中世～近世のかけての豊富な遺構、遺物が出土した。当遺跡の存在は古文書等によって明らかであったが、ほとんど調査が行われていなかったため、詳細は判っておらず、今回の調査によって、遺跡の様相が断片的ながらも明らかになった。

平成2年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(事業別)

番号	事業名	発掘地	所在地	調査主体	調査期間	調査期間	内容	調査担当者
1	西神ニュータウン西沢	水塚遺跡	西区神宮町	神戸学教育委員会	2800㎡	H2.4.3～H2.7.17	時期不明 土坑群	丸山 誠 東真代秀
2	西神ニュータウン南沢	水塚遺跡	西区神宮町	神戸学教育委員会	116㎡	H2.11.5～H2.11.9 H2.12.14～H2.3.19	弥生遺構 縄文文化層など	東真代秀
3	西神ニュータウン西沢	飯田遺跡	西区神宮町	神戸学教育委員会	133㎡	H2.12.6～H2.12.13	鎌倉時代 土坑・溝	丸山 誠
4	北神ニュータウン西沢南	北神ニュータウン西沢南	北区長尾町	(財)神戸学スポーツ教育公社	270㎡	H2.4.10～H2.4.20 H2.6.14～H2.7.6	縄文時代 弥生文化層など	梅田 誠
5	濃州公園南端(文化財発掘)	北神ニュータウン西沢南 敷地2・3地区	北区長尾町	神戸学教育委員会	160㎡	H2.3.1～H2.3.31	企業警備のための中規模 掘削確認調査	安田 誠
6	菅原川沿岸施設	北神ニュータウン西沢南 敷地4地区	北区長尾町	神戸学教育委員会	361㎡	H2.12.20～H2.1.9	弥生時代中期 土坑群	丸山 誠
7	神戸長尾山丘陵跡跡事	東川崎町遺跡	中央区東川崎町	(財)神戸学スポーツ教育公社	204㎡	H2.7.10～H2.7.26	近世の人間の掘削	谷 正俊
8	神戸市立中野小学校跡跡事	山田宮前遺跡	中央区北長狭町	(財)神戸学スポーツ教育公社	4437㎡	H2.4.10～H2.1.31	縄文時代 土坑 弥生時代 土坑・土壇	菅本英代 眞山哲人
9	八木小・中学校教育事業	阿部遺跡	北区八木町	(財)神戸学スポーツ教育公社	340㎡	H2.6.16～H2.4.3	中世 掘削発掘物 土坑・土壇	梅田 誠
10	明石川埋蔵施設	川合遺跡	西区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	2200㎡	H2.3.11～H2.3.21 H2.6.14～H2.7.6	前期・中期 後期掘削作業	谷 正俊
11	神戸市立南灘跡	熊井遺跡	中央区船場	神戸学教育委員会	4980㎡	H2.3.19～H2.3.5	弥生時代中期～中期 土坑・溝・土壇	谷田 誠
12	墨江4号跡発掘工事	山田野跡跡	北区山田町	(財)神戸学スポーツ教育公社	180㎡ 1215㎡	H2.10.31～H2.11.1 H2.1.8～H2.2.27	弥生時代 中世 土壇 木田遺跡 中世～古墳 木田遺跡	安田 誠 梅田 誠
13	石塚原埋蔵施設跡跡事	小堀北ノ宮遺跡 (第1・2次調査)	北区山田町	神戸学教育委員会	0.250㎡ 0.2750㎡	H2.4.2～H2.4.14 H2.4.6～H2.5.3	1000年～1500年以前 弥生時代 土壇・溝 鎌倉時代 土坑・土壇 土坑 穴掘遺構	安田 誠 丸山二郎 梅田 誠
14	北神中央線建設事業	下小島遺跡 (第1～4次調査)	北区八木町	(財)神戸学スポーツ教育公社	1,028㎡ 1,175㎡ 1,215㎡ 1,430㎡	H2.4.3～H2.4.26 H2.4.10～H2.4.18 H2.4.19～H2.5.18 H2.8.6～H2.10.11	古墳時代～鎌倉時代 中世時代 土壇・溝 平安時代～室町時代 掘削発掘物	山野史史 内藤成広 谷 正俊 梅田 誠
15	北神中央線建設	滝原遺跡(内地区)	北区長尾町	(財)神戸学スポーツ教育公社	9010㎡	H2.4.24～H2.1.16	縄文時代 土坑 弥生時代後期 土壇	前田 誠 丸山二郎 内藤成広 梅田 誠
16	岡山土壇発掘跡跡事	新方遺跡(丁の跡地点)	西区玉津町	神戸学教育委員会	100㎡	H2.12.15～H2.1.31	古墳時代～平安時代 土壇	山本謙治
17	西神22号跡自主発掘	藤田遺跡	西区神宮町	(財)神戸学スポーツ教育公社	160㎡	H2.11.3～H2.12.17	古墳時代 土壇・土坑 平安時代後期時代 溝	松林 真史
18	西神22号跡自主発掘跡	下二馬遺跡	西区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	160㎡	H2.10.9～H2.11.1	縄文時代～中世 土坑	谷 正俊
19	神戸三田線自主発掘跡	下二馬遺跡 (第4次調査)	北区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	230㎡	H2.12.17～H2.1.14	弥生時代土壇	松林 真史
20	神戸三田線自主発掘跡	上二馬遺跡	北区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	430㎡	H2.4.3～H2.4.9 H2.5.28～H2.6.13	時期不明 土坑・溝 (土坑)	梅田 誠
21	北神1号跡自主発掘跡	上上原遺跡	北区長尾町	(財)神戸学スポーツ教育公社	190㎡	H2.5.21～H2.6.14	平安時代～中世 遺物発掘調査	内藤成広
22	赤坂線建設事業	新方遺跡(丁の跡地点)	西区玉津町	神戸学教育委員会	9㎡	H2.4.19～H2.4.28	古墳時代 土壇 土坑 遺物発掘調査	内藤成広
23	山下部汚水処理	下二馬遺跡 (第2次調査)	北区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	84㎡	H2.7.30～H2.7.9	古墳時代～前期時代 土坑	谷 正俊
24	上神井1地区配水用埋蔵施設工事	下小島遺跡 (第5次調査)	北区八木町	(財)神戸学スポーツ教育公社	90㎡	H2.3.5～H2.3.5	古墳時代～中世 溝 後期掘削(土坑)	菅本英代 谷 正俊 梅田 誠
25	阪神バス遺跡発掘跡事	成町遺跡(第4次調査)	南区区下山町	(財)神戸学スポーツ教育公社	1000㎡	H2.5.7～H2.11.9 H2.11.28～H2.12.21	縄文時代～前期時代 土坑・溝・ピット	山野史史 井村 悠
26	区画整理事業	水谷遺跡	西区玉津町	(財)神戸学スポーツ教育公社	26㎡	H2.11.19～H2.11.25	縄文時代 中世	山野史史
27	区画整理事業	二ノ馬遺跡	西区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	44㎡	H2.11.21～H2.11.22	縄文時代 中世 遺物発掘調査	山野史史
28	区画整理事業	八木中遺跡	北区八木町	(財)神戸学スポーツ教育公社	60㎡	H2.11.19～H2.11.16	縄文時代 古墳時代～中世 遺物発掘調査	山野史史
29	高島地区民衆集居	高島日向遺跡 (第3次調査)	東北区高島	神戸学教育委員会	203㎡	H2.10.1～H2.12.7	縄文時代 土坑土壇・ 古墳時代 土坑土壇	山本謙治 梅田 誠
30	在宅西長尾跡跡事	野門台遺跡	東北区長尾	神戸学教育委員会	1500㎡	H2.5.2～H2.11.7	弥生時代中期～後期 土坑・土壇 土坑・土壇	丸山 誠 東真代秀 梅田 誠
31	百軒南岡遺跡跡事	藤江台遺跡	西区平野町	(財)神戸学スポーツ教育公社	1600㎡	H2.8.6～H2.12.13	古墳時代 木塚遺跡 中世時代 土坑	眞山哲人 梅田 誠

平成2年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(事業別)

番号	事業名	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積	調査期間	内 容	調査担当者
32	五色塚古墳群発掘調査	五色塚古墳	堺市五色山	神戸市教育委員会	369㎡	H2.3.1～H2.3.31	古墳時代 土坑	丹波清樹
33	法蓮池埋蔵文化財発掘調査	法蓮池遺跡	西川南東	(財)神戸市スポーツ観光公社	135㎡	H2.3.8～H2.3.25	平安時代～鎌倉時代 新石室	谷 正徳
34	メナツ小池遺跡発掘調査	御成遺跡	長田区御成	神戸市教育委員会	309㎡	H2.5.7～H2.5.29	平安時代前期、中世 遺物包含層	丹波清樹
35	池田町中環状線建設事業	東川町遺跡	中央区東川町	(財)神戸市スポーツ観光公社	180㎡	H2.3.12～H2.3.28	近世 土坑、耕作痕	佐伯二郎
36	たこぎわ市民会館建設事業	磯、定通町遺跡(第6次調査)	中央区磯通	(財)神戸市スポーツ観光公社	640㎡	H2.8.20～H2.10.3	古墳時代 土坑、ピット	岸 正徳
37	市営住宅建設	三香町遺跡	長田区五香町	神戸市教育委員会	129㎡	H2.7.14～H2.8.1	遺物14確認済み	山田 憲 栗原代等
38	園崎整備事業	水見遺跡	西区神宮町	神戸市教育委員会	49㎡	H2.4.18	試掘調査 遺物包含層なし	濱田凡人
39	園崎整備事業	赤土遺跡 土塚遺跡	西区神宮町	(財)神戸市スポーツ観光公社 神戸市教育委員会	189㎡ 500㎡	H2.4.9～H2.4.12 H2.5.6～H2.7.6	試掘調査 遺物包含層なし 古墳時代 墓穴内遺物 埋没不明 土坑、溝、ピット	青木宏樹 山田憲正 佐伯二郎
40	園崎整備事業	新田遺跡	西区神宮町	(財)神戸市スポーツ観光公社 神戸市教育委員会 (財)神戸市スポーツ観光公社	188㎡ 50㎡	H2.4.3～H2.4.6 H2.11.6～H2.11.26	試掘調査 遺物包含層なし 古墳時代 遺物包含層 埋没不明 土坑、溝、ピット	青木宏樹 内藤忠生 栗原代等
41	園崎整備事業	甲川遺跡	西区神宮町	神戸市教育委員会	258㎡	H2.5.7～H2.5.17	試掘調査 遺物包含層なし	佐伯二郎
					78㎡	H2.5.21～H2.5.25	中世 溝、ピット、溝式 土坑	佐伯二郎
42	園崎整備事業	印旛遺跡	西区平野町	(財)神戸市スポーツ観光公社 神戸市教育委員会	330㎡ 167㎡	H2.4.1～H2.4.12 H2.5.29～H2.6.8	試掘調査 古墳時代～中世 遺物包含層 試掘調査 古墳時代～中世 遺物包含層	高山直人 佐伯二郎
					77㎡	H2.5.29 H2.6.11～H2.6.20	試掘調査 古墳時代～中世 遺物包含層	佐伯二郎
43	船越池埋蔵文化財発掘調査	土津川中環状線(平野地区)	西区平野町	神戸市教育委員会	2440㎡	H2.4.20～H2.4.28 H2.7.6～H2.1.30	古墳時代～古墳時代 平安時代 埋蔵石	西沢 隆 山口憲正 長尾信典 阿部敬志 井茂 昌
44	園崎整備事業	船木遺跡	西区船場町	神戸市教育委員会	85㎡	H2.12.17～H2.12.29	遺物14確認済み	栗原代等
					309㎡	H2.12.20～H2.12.23	試掘調査 古墳時代、中世 遺物	栗原代等
45	園崎整備事業	浜川中環状線	北区浜川町	神戸市教育委員会	108㎡	H2.11.13～H2.11.15	試掘調査 中世 ピット	栗原代等
46	園崎整備事業	神田遺跡	北区浜川町	神戸市教育委員会 神戸市教育委員会 (財)神戸市スポーツ観光公社	444㎡ 619㎡ 18㎡	H2.4.3～H2.4.20 H2.11.19～H2.1.16 H2.3.28	試掘調査 中世 遺物包含層 古墳時代 古墳時代～古墳時代 古墳時代 試掘調査 中世 遺物包含層	西沢巧次 栗原代等 内藤忠生 丹波清樹
47	園崎整備事業	行宮遺跡 荻原遺跡	北区浜川町	神戸市教育委員会	544㎡	H2.11.1～H2.11.14	試掘調査 中世 遺物包含層	佐伯二郎
					1262㎡	H2.11.15～H2.12.16	試掘調査 中世 遺物包含層	佐伯二郎
48	園崎整備事業	河原遺跡	北区八多町	神戸市教育委員会	600㎡	H2.4.25～H2.12.27	中世～近世古墳 遺物、土坑 平塚痕、柱状	西沢巧次
						H2.3.1～H2.3.16	試掘調査 遺物包含層	西沢巧次
49	園崎整備事業	元荒瀬跡(豊原地区)	北区荒瀬町	神戸市教育委員会	4500㎡	H2.3.10～H2.11.15	古墳時代 墓穴内遺物 平安時代 埋蔵石	西沢巧次 阿部敬志
50	園崎整備事業	上津遺跡	北区北地町	神戸市教育委員会	492㎡	H2.11.1～H2.11.29	試掘調査 中世 遺物包含層	西沢巧次
51	共同住宅建設	大岡遺跡	長田区大岡通	神戸市教育委員会	154㎡	H2.7.16～H2.7.30	中世、近世 土坑	高山直生
52	共同住宅建設	兵庫津遺跡	兵庫区西神町	神戸市教育委員会	153㎡	H2.10.19～H2.11.29	古墳時代～平安時代 古墳時代 土坑、ピット	濱田正生
53	共同住宅建設	磯、荒川町遺跡	中央区磯町	神戸市教育委員会	200㎡	H2.4.3～H2.4.18	埋蔵不明 土坑	丹波清樹

平成2年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（事業別）

番号	事業名	遺跡名	所在地	調査主体	調査期間	調査期間	内容	調査担当者
54	山岡住宅建設	沼田町池原	中央区沼田町	神戸市教育委員会	2100	H2.7.18～H2.7.30	弥生時代～奈良時代遺物を含む	橋本 望
55	浜岡住宅建設	港ノ鼻遺跡	東灘区高平町ノ鼻	神戸市教育委員会	2100	H2.4.1～H2.4.17 H2.11.9～H2.3.31	縄文・弥生・古墳時代 奈良時代 弥生中層位 古墳時代	長岡正三 橋本 望 吉本 繁
56	貴知小池建設 （文化庁補助）	伊豆宮町遺跡 （第14次調査）	東灘区在野宮町	神戸市教育委員会	500	H2.6.5～H2.7.20	古墳時代前期 奈良時代 弥生中層位 古墳時代 弥生中層位 古墳時代	乃由博樹 山崎博樹 山崎博樹 佐藤 均 山崎博樹
57	浜岡住宅建設	森北町遺跡 （第9次調査）	東灘区森北町	神戸市教育委員会	568	H2.8.1～H2.10.15	古墳 弥生時代、丹波 土坑・土溝	黒田浩正 藤原 謙
58	山岡住宅建設	森北町遺跡 （第10次調査）	東灘区森北町	神戸市教育委員会	300	H2.9.20～H2.10.24	中世～近世 土坑、溝 土坑	山岡 望 山崎博樹
59	ビル建設	沼田遺跡（第5次調査）	中央区沼田町	神戸市教育委員会	1300	H2.3.13～H2.4.11 （前半継続調査）	弥生時代～古墳時代 土坑、土溝	山崎博樹 西島敏夫
60	ビル建設 （神戸市個人住宅） （文化庁補助）	黒木・日高遺跡 （第4次調査）	中央区黒木ノ町	神戸市教育委員会	235	H2.11.12～H2.10.23	平安時代 土坑、溝 土坑、溝	吉岡 高
61	事務所・倉庫建設	新島遺跡（東方地区）	西区工浜町	神戸市教育委員会	1800	H2.1.11～H2.2.24	古墳時代前期 土坑、溝、土溝	佐伯二郎
62	倉庫建設	新島遺跡（平石地区）	西区平石町	神戸市教育委員会	500	H2.7.19～H2.7.21	古墳時代前期 溝、土坑	末廣代秀
63	倉庫建設	沼田遺跡	中央区沼田町	神戸市教育委員会	600	H2.2.23～H2.3.31	平安時代前期～奈良時代 土坑、土溝	乃由博樹
64	フューニクス ショップ建設	篠原遺跡	東灘区篠原中町	神戸市教育委員会	862	H2.5.9～H2.8.30	縄文時代前期 土坑、土溝、土器 弥生時代～平安時代 遺物を含む	山岡 望 山崎博樹 山崎博樹
65	町営雑草刈取	高塚山古墳群	東灘区高塚町	神戸市教育委員会	400	H2.3.4～H2.3.31	古墳時代前期	橋本望子
66	町営雑草刈取	芝山古墳群	北区長尾町	神戸市教育委員会	270	H2.9.9～H2.9.14	古墳群（横穴式石室）	乃由博樹
67	ゴルフ場	沼田遺跡	中央区沼田町	神戸市教育委員会	1500	H2.7.24～H2.8.29	時期不明 土器・土器 土坑、土溝	乃由博樹 山崎博樹
68	池田公園	西脇山遺跡	北区山崎町	神戸市教育委員会	800	H2.4.23～H2.7.6	中世 土坑、土坑 土坑、溝	山岡 望 山崎博樹
69	住宅建設	本町遺跡	東灘区本山町	神戸市教育委員会	100	H2.5.1	時期不明 土器 土坑	山崎博樹
70	店舗新築工事 （文化庁補助）	沼田遺跡（第7次調査）	中央区沼田町	神戸市教育委員会	230	H2.3.12～H2.3.28	弥生時代前期 土坑、溝	橋本 望
71	住宅建設 （文化庁補助）	南野山手遺跡	東灘区南野山手	神戸市教育委員会	240	H2.2.1～H2.3.31	平安時代 土坑、溝 土坑、溝	乃由博樹
72	御成町 （文化庁補助）	高塚遺跡（城ノ前地区）	東灘区高塚町	神戸市教育委員会	150	H2.11.27～H2.12.13	古墳時代前期 土坑、溝 古墳時代前期 土坑、溝	末廣代秀
73	池田公園整備	大塚遺跡	兵庫区大塚通	（財）神戸市スポーツ教育公社	---	H2.4.4～H2.3.31	古墳時代前期出土遺物 古墳時代前期 土坑、溝	山岡 望 山崎博樹
74	1丁通整備	在野宮町遺跡 （第13次調査）	東灘区在野宮町	（財）神戸市スポーツ教育公社	---	H2.11.1～H2.3.31	弥生時代前期出土遺物 古墳時代前期 土坑、溝	橋本望子
75	土地区画整理	森北町遺跡 （第8次調査）	東灘区森北町	神戸市教育委員会	---	H2.4.1～H2.2.31	古墳時代前期～古墳時代 古墳時代 土坑、溝	乃由博樹 山崎博樹
76	富原駅前上車	本陣町遺跡 （南大田地区）	西区工浜町	兵庫県教育委員会	640	H2.4.19～H2.5.11	平安時代中期 土器 土坑、溝	中川 勝 多賀良夫
77	新築住宅建設	沼田遺跡	中央区沼田町	兵庫県教育委員会	240	H2.4.13	古墳時代前期 土坑、溝	村上賢治
78	土地区画整理事業	工浜山遺跡	西区工浜町	兵庫県教育委員会	1200	H2.7.9～H2.3.8	古墳時代前期 土坑、溝	山下、中川、佐野 多賀良夫、鈴木、山上
79	富原駅前整備	沼田遺跡	西区平石町	兵庫県教育委員会	1227	H2.4.6～H2.11.30	平安時代中期 土器 古墳時代前期 土坑、溝	大塚信子 多賀良夫 橋本 望
80	土地区画整理事業	五甲中遺跡	西区五甲町	兵庫県教育委員会	154	H2.5.15～H2.5.24	平安時代中期 土器 古墳時代前期 土坑、溝	山下、中川、佐野 多賀良夫 橋本 望
81	阪神池田北門前建設	---	北区山崎町	兵庫県教育委員会	100	H2.5.9	古墳時代前期 土坑、溝	村上 賢
82	森岡住宅建設	---	東灘区森岡	兵庫県教育委員会	150	H2.5.30	古墳時代前期 土坑、溝	村上賢治
83	六甲山原緑地事業	山崎山遺跡	中央区 沼田地区	兵庫県教育委員会	3.5	H2.5.7	古墳時代前期 土坑、溝	山上賢治
84	（民営） 独立行政法人建設	芝山遺跡	西区工浜町	兵庫県教育委員会	2700	H2.10.29～H2.3.30	古墳時代前期 土坑、溝	末廣代秀 西口金介
85	---	沼田遺跡	中央区沼田町	兵庫県教育委員会	830	H2.11.26～H2.12.6	古墳時代前期 土坑、溝	山岡 望

平成2年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（事業別）

No.	事業名	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積	調査期間	内容	調査担当者
86	山陽自動車建設	NO. 18地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	10㎡	H3.2.25	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
87	山陽自動車建設	NO. 65地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	40㎡	H3.2.6～H3.3.14	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
88	山陽自動車建設	NO. 66地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	13㎡	H3.2.6	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
89	山陽自動車建設	NO. 70地点 (宮ノ原址)	北区須賀町	兵庫県教育委員会	67㎡	H3.3.12～H3.3.13	弥生前期 土器・焼土・焼石 山城	平田博幸 伊藤昭光
90	山陽自動車建設	NO. 72地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	19㎡	H3.2.12	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
91	山陽自動車建設	NO. 76地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	13㎡	H3.2.18	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
92	山陽自動車建設	NO. 83地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	7㎡	H3.3.7	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
93	山陽自動車建設	NO. 85地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	34㎡	H3.3.5～6	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
94	山陽自動車建設	NO. 86地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	14㎡	H3.3.12	弥生前期 遺物1種出土	平田博幸 伊藤昭光
95	山陽自動車建設	NO. 88地点	北区八多町	兵庫県教育委員会	27㎡	H3.2.8～H3.2.11	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
96	山陽自動車建設	NO. 89地点	北区八多町	兵庫県教育委員会	129㎡	H3.2.7～H3.2.8	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
97	山陽自動車建設	NO. 90地点	北区八多町	兵庫県教育委員会	24㎡	H3.2.9～H3.2.9	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
98	山陽自動車建設	NO. 92地点	北区大沢町	兵庫県教育委員会	129㎡	H3.2.4～H3.2.4	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
99	山陽自動車建設	NO. 93地点	北区大沢町	兵庫県教育委員会	16㎡	H3.1.22	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
100	山陽自動車建設	NO. 94地点 (マノノ原址)	北区八多町	兵庫県教育委員会	200㎡	H3.1.18～H3.1.20	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
101	山陽自動車建設	NO. 95地点	北区八多町	兵庫県教育委員会	113㎡	H3.1.30～H3.1.31	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
102	山陽自動車建設	NO. 99地点	北区八多町	兵庫県教育委員会	56㎡	H3.1.30～H3.2.6	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
103	山陽自動車建設	NO. 107地点 (小名所原址)	北区八多町	兵庫県教育委員会	31㎡	H3.3.12～H3.2.13	弥生前期 土器・焼土・焼石 備前	山上雅弘 大平 茂
104	山陽自動車建設	NO. 108地点	北区有野町	兵庫県教育委員会	114㎡	H3.12.25～H3.12.26	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
105	山陽自動車建設	NO. 109地点	北区有野町	兵庫県教育委員会	353㎡	H3.1.7～H3.1.16	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
106	山陽自動車建設	NO. 204地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	29㎡	H3.5.6～H3.5.11	弥生前期 遺物1種出土	山上雅弘 大平 茂
107	山陽自動車建設	NO. 205地点	北区須賀町	兵庫県教育委員会	38㎡	H3.2.13, 14, 3.5	鎌倉時代 築港跡	平山博幸 伊藤昭光
108	本宮通称遺跡	無子遺跡	赤松区安原寺町	兵庫県教育委員会	9㎡	H3.1.17	弥生前期 遺物1種出土	長谷川 典
109	山丁聖徳内 遺跡	那家遺跡	東郷区御影町	那家遺跡調査会	360㎡	H2.4.25～H2.7.31	中世末 石籠跡	高山正久
110	藤木沙汰寺 遺跡	新川遺跡	高砂区藤井町	高山歴史学研究所	570㎡	H2.9.7～H2.10.31	鎌倉時代 土坑 溝	高山正久
111	高田宮口跡 跡地掘削工事	小沢北ノ谷遺跡	北区小川町	高山歴史学研究所	600㎡	H3.2.1～H3.3.30 次年復旧工事	中世 溝・土坑	高山正久
112	山手聖徳内 遺跡	那家遺跡	東郷区御影町	高山歴史学研究所	600㎡	H2.11.1～H3.1.31	中世末 石籠跡 築港跡	高山正久
113	北神中央緑地	下小名原遺跡	北区八多町	北山歴史学調査会	600㎡	H2.2.18～H3.3.30 次年復旧工事	縄文時代 溝 土坑	神崎 勝
114	北神中央緑地	下小名原遺跡	北区八多町	下小名原遺跡調査会	1470㎡	H3.2.12～H3.1.31 次年復旧工事	縄文時代 溝 土坑	村尾英人
115	住宅街区整備事業	丹川台遺跡	豊中區丹川台		7300㎡	H1.9～H2.3 H2.9～H2.10	縄文時代早期 土器 土坑・土坑跡 土器 土坑・土坑跡 土器 土坑・土坑跡	渡野 彰
116	市街地再開発事業	豊永日向遺跡	豊永区下ノ町	豊永区歴史調査会	1000㎡	H2.6.1～H3.3.31 H2.11.6～H3.2.17 次年復旧工事	古墳時代 墓 土坑	神崎 勝
117	ニュータウン造成	西神ニュータウン内 No.1地区遺跡	西区新野台	神戸女子大学遺跡調査会	5000㎡	H2.11.9～H3.5.12 次年復旧工事	縄文時代 土器 土坑	藤井利幸
118	西神中央緑地 No.1地区掘削工事	大田町遺跡	東灘区大田町	関西文化財調査会	235㎡	H3.1.22～H3.3.22	中世時代 土器 土坑	古川直樹

平成 2 年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（事業別）

番号	事業名	発掘地	所在地	調査主体	調査面積	調査期間	内 容	調査担当者
119	国庫整備事業	芝原遺跡 下上原遺跡	中央区尾町	妙見山麓遺跡調査会	980㎡	H2. 6. 10～H2. 7. 31 H2. 7. 1～H2. 3. 25	古墳時代 遺 中世 掘立瓦葺地蔵、 土坑	神崎浩二
120	国庫整備事業	汲沢中川遺跡	北区浜内町	中川遺跡調査会	800㎡ 1636㎡	H2. 6. 15～H2. 6. 11 H2. 10. 29～H2. 12. 21	中世 竪穴、土坑 遺跡遺構	村尾政人
121	国庫整備事業	下藤山中遺跡	西区平野町	下藤山中遺跡調査会	1640㎡ 309㎡	H2. 10. 29～H2. 3. 5 H2. 3. 9～H2. 3. 20	古墳時代遺跡、 中世時代 溝溝址	阿部直樹
122	国庫整備事業	萩原遺跡	中央区尾町	萩原遺跡調査会	427㎡	H2. 1. 7～H2. 2. 9	中世時代～鎌倉時代 掘立瓦葺地蔵（1区）、 土坑・溝	村尾政人
123	国庫整備事業	松木遺跡	西区尾町	神戸女子大学遺跡調査会	1300㎡	H2. 4. 15～H2. 7. 31	時期不明の柱穴、自然露 跡	藤井利香
124	国庫整備事業	長井遺跡	西区尾町	神戸女子大学遺跡調査会	—	H2. 4. 1～H2. 4. 30	—	藤井利香
125	共同住宅建設	藤沼古川遺跡	南区藤原町	神戸女子大学遺跡調査会	1100㎡	H2. 8. 1～H2. 11. 4	古墳時代 自然露跡	藤井利香
126	共同住宅建設	早野町遺跡	東区早野町	早野町遺跡調査会	490㎡	H2. 9. 20～H2. 10. 26	古代末～中世 水田址	河部剛由
127	共同住宅建設	西・荒山町遺跡	中央区尾町	妙見山麓遺跡調査会	346㎡	H2. 6. 1～H2. 7. 20	中世 掘立 弥生時代 溝、竪穴、 土坑	神崎 悠
128	共同住宅建設	文町遺跡	中央区尾町	文町遺跡調査会	380㎡	H2. 6. 10～H2. 9. 16	鎌倉時代 土坑、竪穴 土坑、溝	村尾政人
129	共同住宅建設	西岡川遺跡	東灘区西岡本	六甲山麓遺跡調査会	2000㎡	H1. 12. 19～H2. 12. 13	縄文群居 住居址 弥生群居 住居址 古墳時代 土坑・竪穴	橋本 久 (内訳)
130	共同住宅建設	下山手遺跡	中央区下山手通	神戸女子大学 史学研究会	600㎡	H2. 5. 15～H2. 5. 31	古墳時代遺跡 竪穴、 土坑 中世 水田址	藤井利香
131	住宅建設	八幡町遺跡	南区八幡町	妙見山麓遺跡調査会	540㎡	H2. 4. 1～H2. 6. 13	古墳時代 竪穴住居址 平安時代 溝、土坑、 土坑、掘立瓦葺地蔵 室町時代 土坑	神崎 悠
132	C/A建設	福原遺跡	兵庫区福原町	福原遺跡調査会	523㎡	H2. 9. 13～H2. 10. 20	中世 竪穴、土坑 古墳 土坑、土坑	村尾政人
133	C/A建設	高津橋町遺跡	西区平野町	関西文化財調査会	674㎡	H2. 9. 21～H2. 11. 24	古墳時代後期 平安時代 掘立瓦葺地 蔵、土坑	吉川義郎
134	宅地開発	丸塚遺跡	西区尾町	関西文化財調査会	600㎡	H2. 7. 20～H2. 9. 5	中世？ 竪穴	吉川義郎
135	ホテル建設	堀内遺跡	中央区旗本通	六甲山麓遺跡調査会	576㎡	H2. 11. 3～H2. 3. 16	古墳後期 掘立瓦葺地	浅野俊夫
136	ホテル建設	生田遺跡	中央区中山手通	生田遺跡調査会	894㎡	H2. 4. 4～H2. 9. 25	中世 大溝、自然露跡	阿部剛由

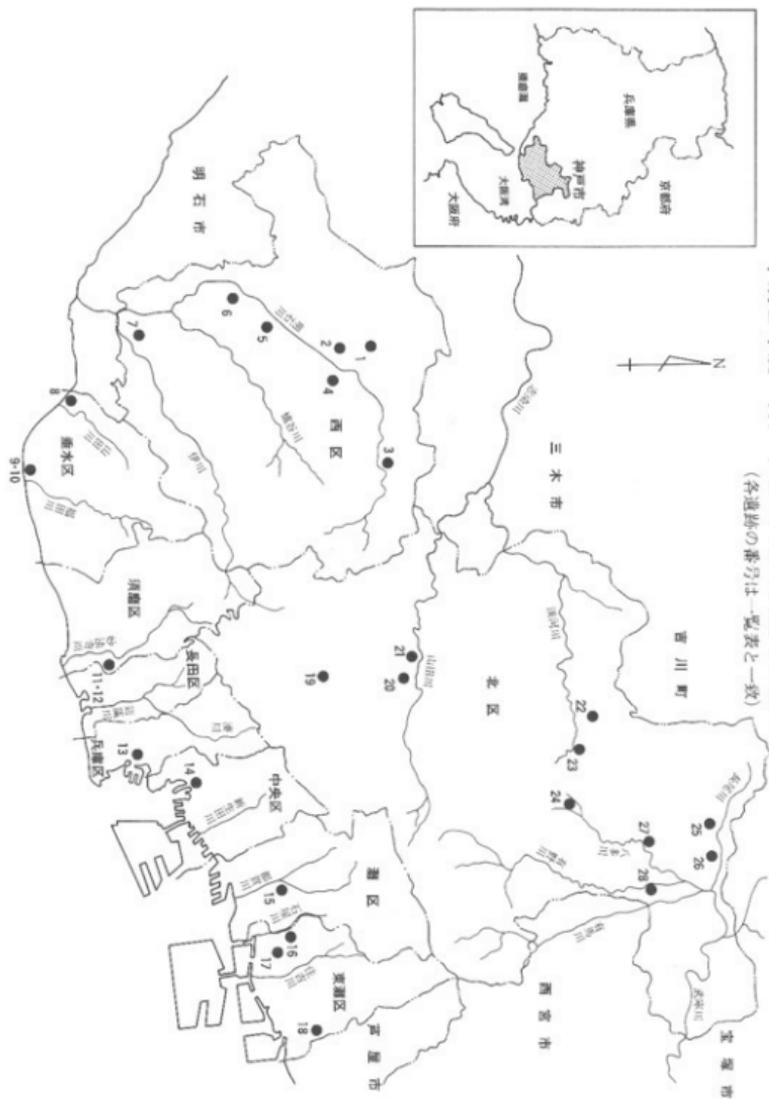
平成2年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（本書掲載分）

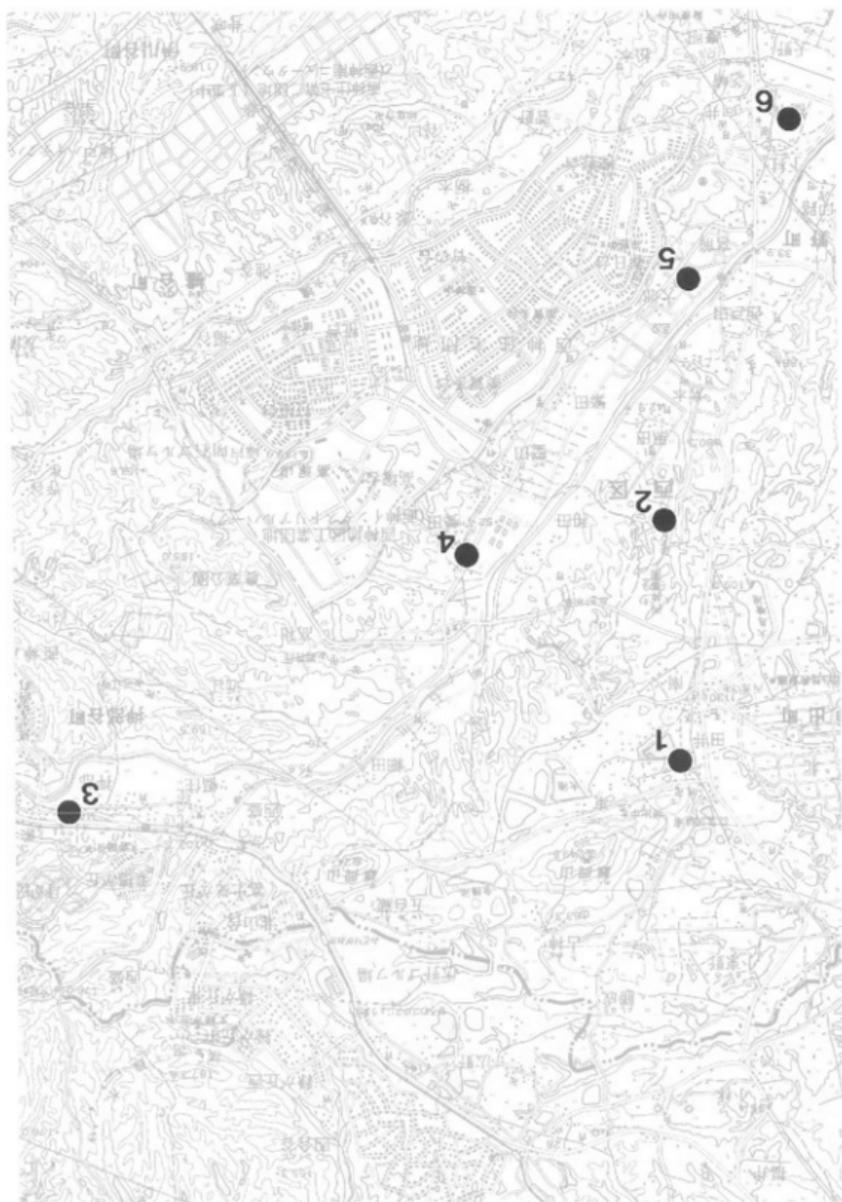
番付	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積
1	神出遺跡	西区神出町東	神戸市教育委員会	78㎡
2	鍋谷池遺跡	西区平野町鍋田	(財) 神戸市スポーツ教育公社	1600㎡
3	朱道跡	西区神部谷町東	神戸市教育委員会	230㎡
4	美田遺跡	西区神部谷町東田	(財) 神戸市スポーツ教育公社	109㎡
5	大加遺跡	西区平野町大加	(財) 神戸市スポーツ教育公社	100㎡
6	玉津田中遺跡（平野地区）	西区平野町福中	神戸市教育委員会	2440㎡
7	新方遺跡（平塚地点）	西区伊川谷町豊和	神戸市教育委員会	50㎡
8	狩川台遺跡	垂水区狩川台7丁目	神戸市教育委員会	1800㎡
9	垂水日向遺跡（第3次調査）	垂水区日向1丁目	神戸市教育委員会	200㎡
10	垂水日向遺跡（第4次調査）	垂水区陸ノ町1丁目	神戸市教育委員会	235㎡
11	沢町遺跡（第6次調査）	須磨区平田町3丁目	(財) 神戸市スポーツ教育公社	1900㎡
12	沢町遺跡（第7次調査）	須磨区大田町2丁目	神戸市教育委員会	23㎡
13	兵庫津遺跡	兵庫区西神町1丁目	神戸市教育委員会	153㎡
14	旧三宮駅構内遺跡	中央区北長狭通4丁目	(財) 神戸市スポーツ教育公社	4457㎡
15	板原遺跡	灘区板原中町2丁目	神戸市教育委員会	862㎡
16	郡家遺跡（城ノ前地区）	東灘区御影町御影	神戸市教育委員会	150㎡
17	住吉河町遺跡	東灘区住吉河町6丁目	神戸市教育委員会	500㎡
18	森北町遺跡	東灘区森北町1丁目	神戸市教育委員会	300㎡
19	小部北ノ谷遺跡（第1・2次調査）	北区山田町小部字北ノ谷	神戸市教育委員会	(1) 350㎡ (2) 755㎡
20	西船山遺跡	北区山田町原野字西船山	神戸市教育委員会	800㎡
21	山田原野遺跡	北区山田町原野	(財) 神戸市スポーツ教育公社	1210㎡
22	神田遺跡	北区長河町神田	神戸市教育委員会 (財) 神戸市スポーツ教育公社	610㎡
23	野風遺跡	北区入多町野風	神戸市教育委員会	530㎡
24	阿物遺跡	北区入多町阿物	(財) 神戸市スポーツ教育公社	369㎡
25	宅原遺跡（豊洲地区）	北区長尾町宅原	神戸市教育委員会	4500㎡
26	宅原遺跡（内口地区）	北区長尾町宅原	(財) 神戸市スポーツ教育公社	9010㎡
27	下小名田遺跡 （第1～5次調査）	北区入多町下小名田	(財) 神戸市スポーツ教育公社	(1) 328㎡ (2) 156㎡ (3) 263㎡ (4) 330㎡ (5) 90㎡
28	下小名田遺跡 （第3・4次調査）	北区有野町二郎	(財) 神戸市スポーツ教育公社	(1) 84㎡ (4) 230㎡

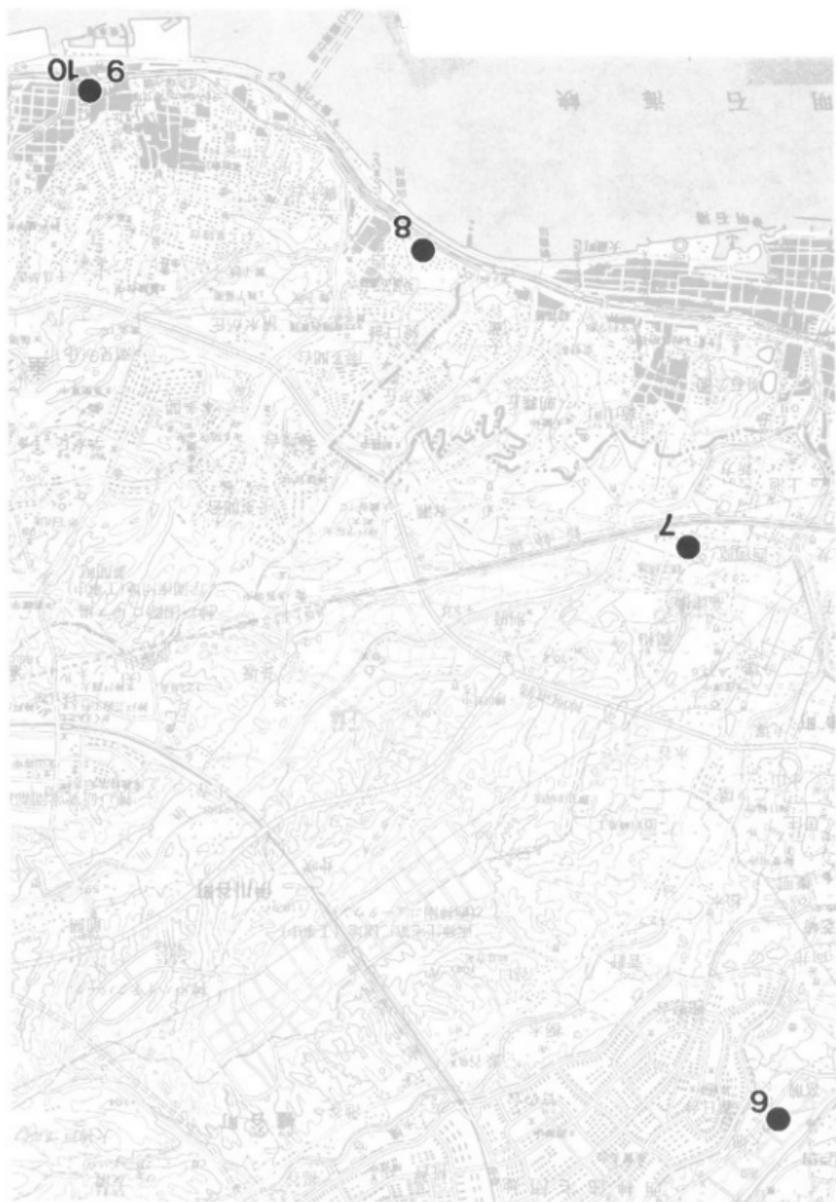
調査期間	調査担当	調査内容
H2.5.21~H2.5.25	飯田 二郎	中世 ビット、溝、畿内土坑
H2.8.6~H2.12.3	高山 直人 藤田 謙	古墳時代後期 木棺直葬墳 平安時代 土坑
H2.5.6~H2.5.20 H2.5.30~H2.7.6	山口 孝二 飯田 二郎	古墳時代後期 懸空住居址 時期不明 竪立柱建物址
H2.11.3~H2.12.12	松林 宏典	古墳時代 平安~鎌倉時代 溝、土坑
H2.10.9~H2.11.1	谷 正俊	縄文時代~中世 道路
H2.4.2~H2.4.28 H2.7.6~H3.1.30	山口、阿部 松林、丹次	弥生時代後期 後路、土部部屋遺構 古墳時代前期 後路、土部部屋遺構 平安時代後半 竪立柱建物址、礎石
H2.7.19~H2.7.21	東 壽代秀	弥生時代前期 溝、ビット
H2.8.2~H2.11.2	丸山、東 松林	弥生時代中~後期 住居址、竪立柱建物址 古墳時代前期 きつね塚古墳遺構
H2.10.1~H2.12.7	山本 雅和 藤田 安	縄文時代前期 東野アキオヤ火山灰層 縄文時代後期 木刻化石 古墳時代後期 懸空住居址
H2.11.12~H2.12.25	安田 暉	平安時代 竪立柱建物址、土坑、溝
H2.5.7~H2.11.9 H2.11.28~H2.12.21	上野 博史 井坂 裕	縄文時代~室町時代 土坑、溝、ビット
H3.3.12~H3.3.28	森田 毅	弥生時代中期 ビット、溝
H2.10.18~H2.11.29	加田 志正	鎌倉~室町時代 土坑、溝 江戸時代 土坑、ビット
H2.4.16~H3.1.31	宮本 安明 高山 直人	縄文時代後期 土坑 奈良~平安時代 土坑 室町時代 溝、土坑
H2.5.9~H2.8.30	宮田 滋 藤田 謙 松林 宏典	縄文時代後期 土坑墓、土器墓 弥生時代後期 懸空住居址、土坑、ビット 平安時代 ビット、足跡
H2.11.27~H2.12.13	東 壽代秀	古墳時代 土坑、溝 鎌倉時代 土坑、溝
H2.6.5~H2.7.20	村治、山本 谷、池田 藤田	古墳時代 竪空住居址、ビット、土坑 奈良時代 竪立柱建物址、ビット、井戸址
H2.9.20~H2.10.24	安田 滋 松林 宏典	中世~近世 土坑、溝、後路
H2.4.3~H2.4.14 H2.4.5~H2.5.31	安田 滋 佐伯 一郎 松林 宏典	縄文時代中期 配石遺構、土坑、溝 鎌倉時代 土坑 室町時代 ビット、地溝遺構
H2.4.23~H2.7.6	加田 志正 藤田 謙	中世 土坑、柱穴、火葬墓
H3.1.8~H3.2.27	池田 毅	中世~近世 水田跡群
H2.11.19~H3.1.16	内藤 俊哉	鎌倉~室町時代 木田埴 縄文時代 石器
H2.12.4~H3.1.16	西岡 巧次	中世~近世初葉 竪立柱建物址、木棺墓、土坑、柱穴
H2.6.16~H2.8.3	橋詰 清孝	中世 竪立柱建物址 近世 土坑
H2.5.10~H2.11.15	西岡 巧次 阿部 敏生	古墳時代後期 懸空住居址 平安時代末期 竪立柱建物址
H2.4.24~H3.1.16	前田 浩司 内藤 俊哉	縄文時代後期 土坑 弥生時代前期 後路、井堀 鎌倉時代 溝、土坑
H2.4.3~H2.4.26 H2.4.10~H2.4.18 H2.6.4~H2.6.18 H2.8.6~H2.10.11 H3.2.5~H3.3.5	上野、内藤 口野、内藤 谷 池田 敏生 宮本 博高	弥生時代~中世 掘地状地跡 古墳時代~鎌倉時代 ビット、溝、土坑 平安時代~鎌倉時代 竪立柱建物址、礎石
H2.7.30~H2.8.7 H2.12.17~H3.1.14	谷 正俊 松林 宏典	弥生時代末期 溝 古墳時代~奈良時代 道路

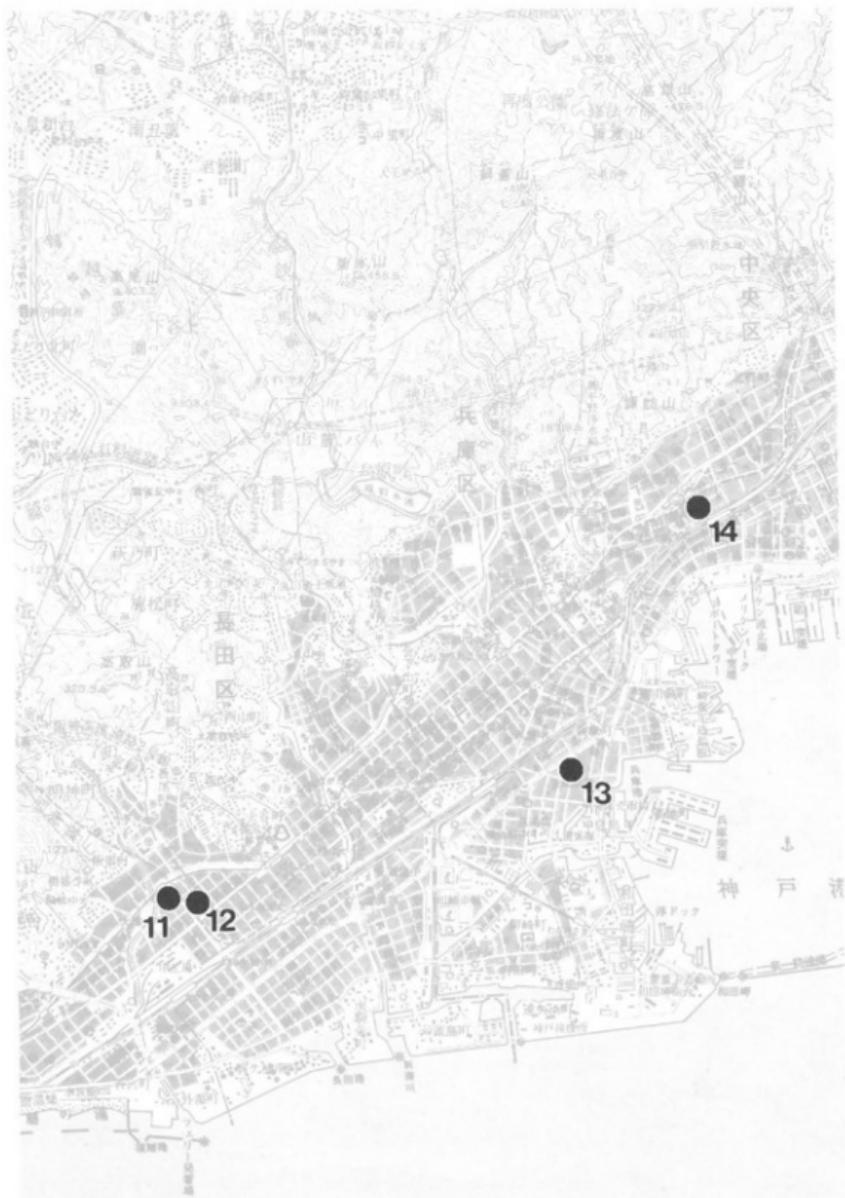
平成2年度 神戸市埋蔵文化財調査地位位置図

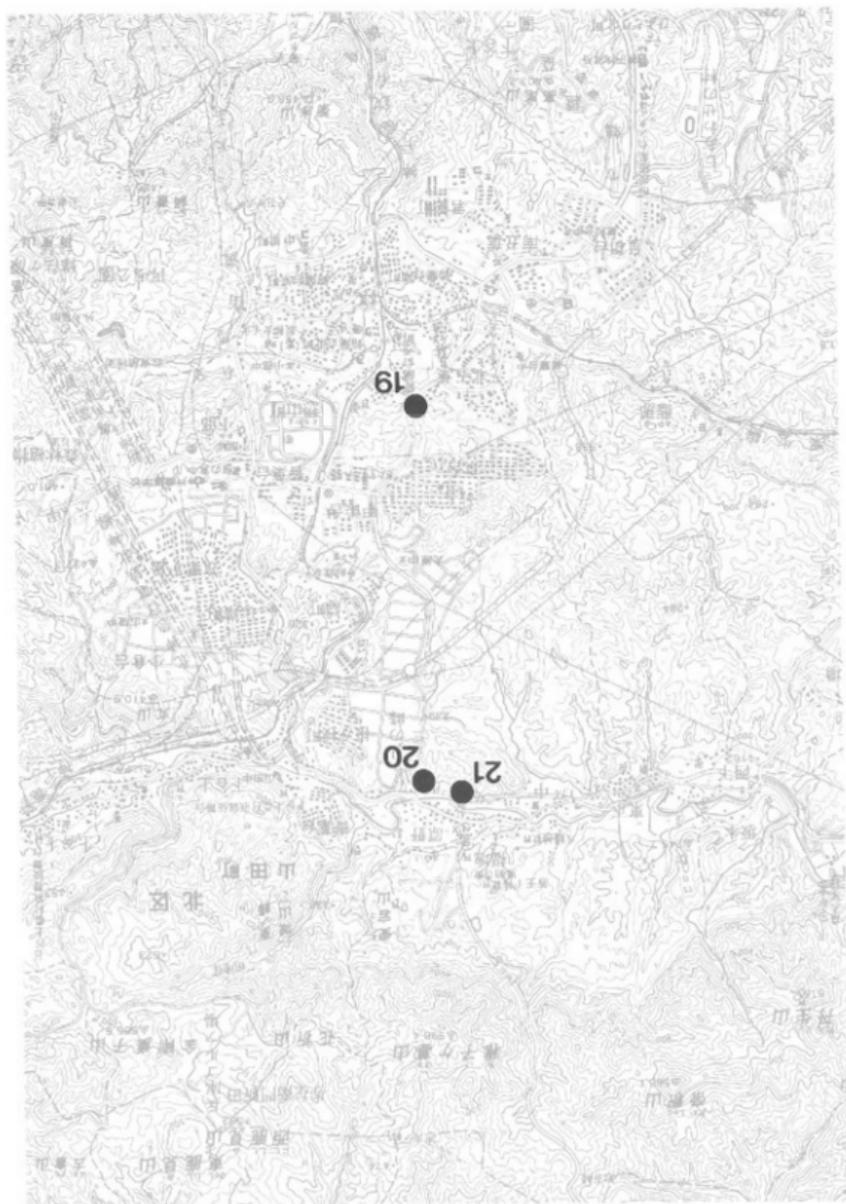
(各遺跡の番号は一覧表と一致)











Ⅱ. 平成2年度の発掘調査

1. 神出遺跡^{かんて}

1. はじめに 神出地区は、平安時代から鎌倉時代にかけての神出古窯址群が存在する。最近では、窯址のみならず、粘土採掘坑、掘立柱建物址、木棺墓など、生産に直結した生活を窺い知る資料が、発掘されている。
- 今回の調査地は、中ノ池の東、刈屋谷池の北西側に位置する。

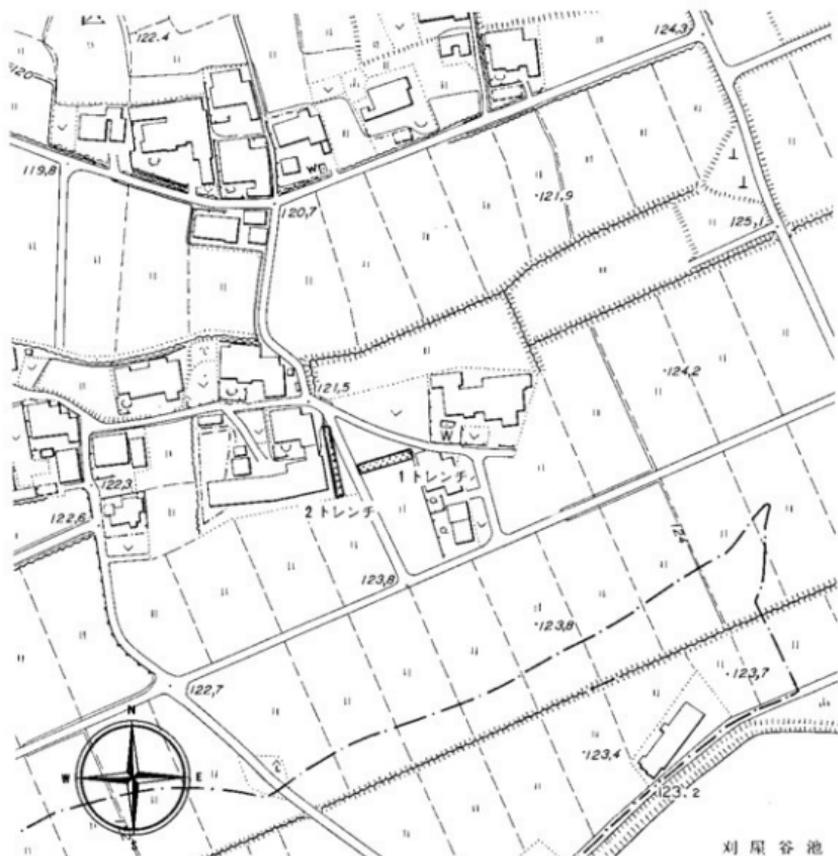


fig. 1 調査地位置図 S = 1 : 2500

2. 調査の概要 東西方向のトレンチである。基本層序は、上から、耕土、黄褐色粘質土（床土）、褐灰色粘質土（遺物包含層）、明黄褐色粘土（地山）である。
- 1 トレンチ トレンチ東端から8mと、19mの2ヵ所で、落ち込みを確認した。水田形成・造成時に削平されたものと思われる。

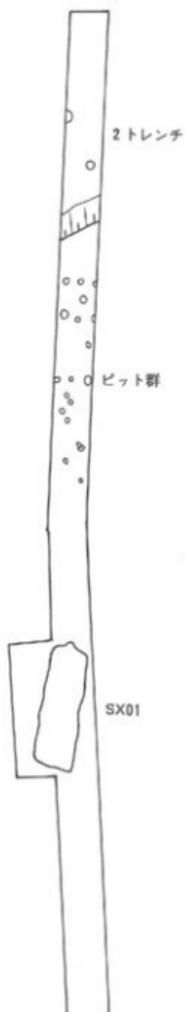
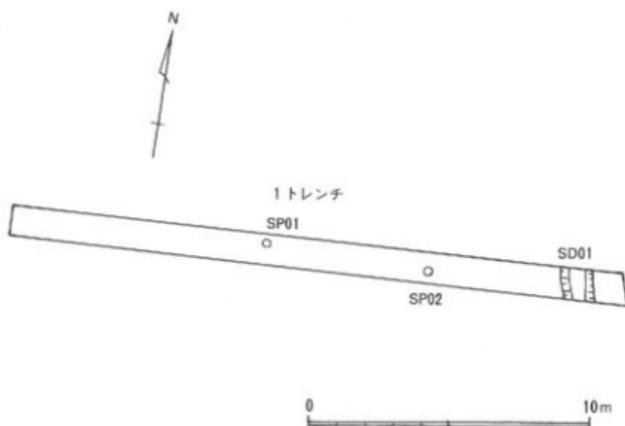


fig. 3 遺構配置図



fig. 2 調査地遠景



- SP01 直径32~36cm、深さ23cmの柱痕である。
- SP02 直径42cm、深さ14cmで、皿状にくぼむ。
- SD01 幅50cm以上、深さ30cmである。東肩は、暗渠と思われる新しい溝によって破壊されている。
- いずれの遺構からも遺物は出土していない。
- 2トレンチ 南北方向のトレンチで、北側へ緩やかに傾斜している。基本層序は、1トレンチと同様である。
- SX01 トレンチ南半で検出した焼成土坑である。長さ約4.6m、幅約1.6mで、北側に突出部が付設されている。深さは10cm前後と浅いが、焼土や炭が充填していた。遺物は、須恵器片が若干出土している。
- ビット群 北半で検出した。掘立柱建物址を構成すると思われるが、トレンチ調査のため、その規模、性格等は不明である。
3. まとめ 1トレンチでは、明確な遺構はわずかであったが、2トレンチにおいて、焼成土坑とビット群を検出した。

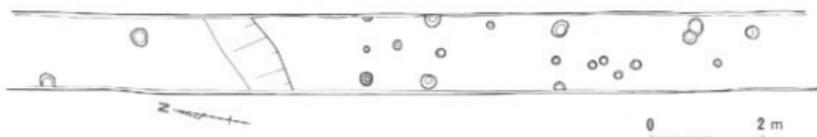


fig. 4 2トレンチビット群平面図

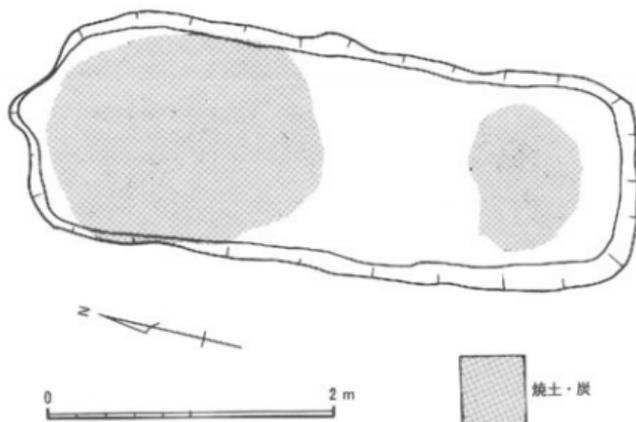


fig. 5 2トレンチSX01平面図

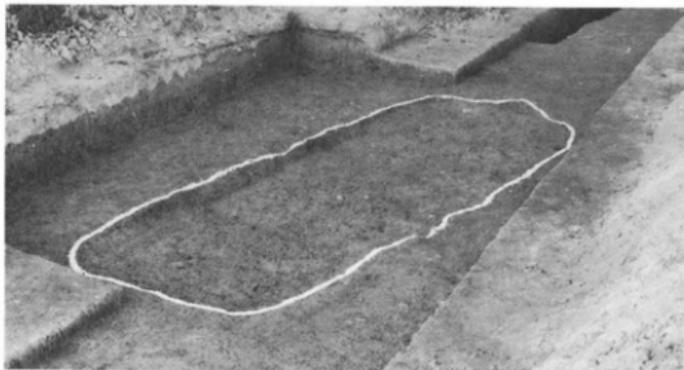
fig. 6
2トレンチ
ビット群
(西から)



fig. 7
2トレンチ
SX01検出状
況 (東から)



fig. 8
2トレンチ
SX01完掘状
況 (東から)



なべたにいけ 2. 鍋谷池遺跡

1. はじめに

鍋谷池遺跡は、西神墓園建設に伴い、昭和61年より継続的に発掘調査が行われ、試掘調査を含め今回で4次を数える。これまでに、弥生時代中期の竪穴住居址や、甕棺などが検出されたほか、弥生時代の土坑、地山整形遺構や、平安時代の土坑が検出されている。また、細く枝状に伸びる丘陵先端には、分布調査によって確認された古墳があり、鍋谷池古墳群として知られている。今回は、平成元年度調査地点の南西に続く尾根筋で、黒田地区の集落に最も近い丘陵先端部にあたる。この地点は、細い瘦せ尾根が続く丘陵にあって比較的広く、平坦な尾根脊梁部となっている。今回の調査では、昭和61年度および平成元年度の試掘調査の成果により、この尾根脊梁部を中心に約1,600㎡の調査区を設定した。

遺跡は、明石川の右岸段丘、雄岡山から南方に伸びる丘陵上に位置する。この丘陵上には、内野池・古野池・七曲り・常本の各古墳群があり、段丘上には、常本、黒田遺跡等の弥生時代～平安時代の集落址がある。またこの丘陵を隔てた北側には、神出遺跡が存在している。



fig. 9 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

鍋谷池2号墳

(1)位置と現状

鍋谷池2号墳は、尾根最高点(101.71m)より南東に伸びる尾根脊梁部に位置している。墳頂部の標高は、101.23mで丘陵最高所よりやや南東に下った所にあたるが、眼下に黒田の集落を一望でき、遠くに明石海峡、淡路島を望むことができる眺望に優れた位置にある。

調査前の測量においては、古墳状の隆起は、全く確認できなかった。平成元年度の試掘調査では、古墳の盛土らしきものが検出されていないことや、調査区の西斜面がかなり崩れ、土砂の流出が激しかったことから古墳の墳丘は、かなり流出しているものと思われた。

ただ、尾根脊梁部を東西にカットしたような痕跡が見られ、遺構の存在が窺われた。

(2)墳丘と周溝

周溝心々距離より知り得た墳丘の規模は、直径14.5mの円墳である。墳丘の盛土は、後世の削平や、流出によって全く失われ平坦面となっている。そのため、当古墳に関係すると思われる須恵器片が広範囲に散乱していた。表土あるいは流出土を除去すると、地山面で周溝、埋葬施設が検出された。

墳丘を画する周溝は、全周せず、最高所側の北半および、南側を画する溝が存在する。周溝の規模は、最も遺存度の良いところで幅2.5m、深さ0.35mである。最高所側である北側の尾根頂部の周溝は、幅5~6m(深さ0.35~0.5m)と広がっている。この部分では、二段に掘り込まれているが、本来の周溝幅は、2.5mであろう。これは、古墳を築造するにあたって、背後(北側)の尾根筋をカットし、その土を古墳の盛土として利用したものと思われる。

また、周溝より知り得た墳丘の範囲には、灰、木炭層がわずかに認められることや、炭化した樹根が存在することから、築造前に旧地表面を焼いた可能性が高い。

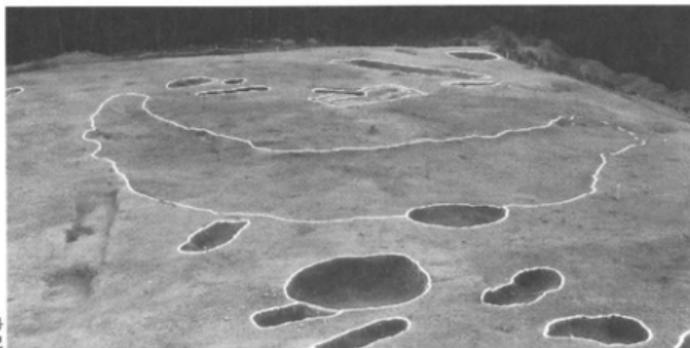


fig. 10 鍋谷池2号墳完掘状況

(3) 埋葬施設

埋葬施設は墳丘のほぼ中央に位置する。尾根筋に直交して、長さ4m、幅1.8mの墓坑を穿ち、その中に長さ3.1m、幅0.85mの組み合わせ木棺が納められていたと考えられるが、南西隅は攪乱によって破壊されている。棺底は、ほぼ水平である。棺内より須恵器坏蓋1点、鉄刀1点、鉄鏃2点、刀子1点、鉈1点、用途不明鉄製品2点が出土し、棺外から坏蓋1点が出土している。

(4) 焼土坑

埋葬施設の東方に検出された1.2m×1.5mの楕円形の土坑である。周溝が全周していれば、ちょうど墳丘裾の基底部に位置する。土坑は、播鉢状に崩れ込まれ、壁面には、激しく火を受けたと思われる痕跡が残されている。埋土中より須恵器の細片を数点検出した。

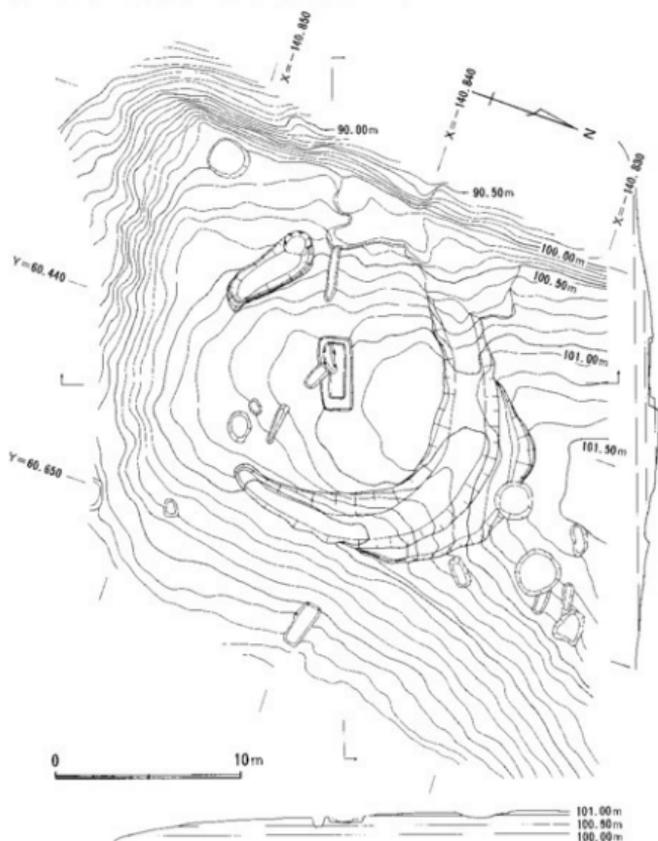


fig. 11 鍋谷池2号墳
墳丘測量図

(5)遺物出土状況

埋葬施設

遺物は、大きく分けて埋葬施設と周溝内より出土している。

副葬品には、棺内および、棺外に埋納されたものがある。棺内の中央の南側板に沿って刀子が切先を東に刃を北に向けて置かれ、これと重なり合うように用途不明鉄製品が検出された。この東側から平根式の鉄鏃が1点出土している。これらの遺物は、いずれも棺底から出土している。

棺内出土の遺物には、棺底より浮いた状態で出土しているものもある。棺の西側の北側板に沿うように出土した鉄刀は、切先を東に向け、刃は、南に向けられている。切先は棺底に触れているが、柄はその比高差が0.18 mと大きく浮きあがった状態で出土している。また、中央で出土した長頸鏃、鈍、須恵器環蓋も棺底より若干浮いた状態で出土しており、棺上に置かれていた可能性がある。

この他、東小口部墓坑において須恵器環蓋1点が出土している。これは墓坑プランを検出した時点で出土したもので、棺底からは0.2mあり、木棺を納め、ある程度埋めた段階で納められたものと思われる。

また、墓坑埋土より須恵器細片5点が出土している。これらの遺物は、周溝出土のものと接合することが明らかとなった。

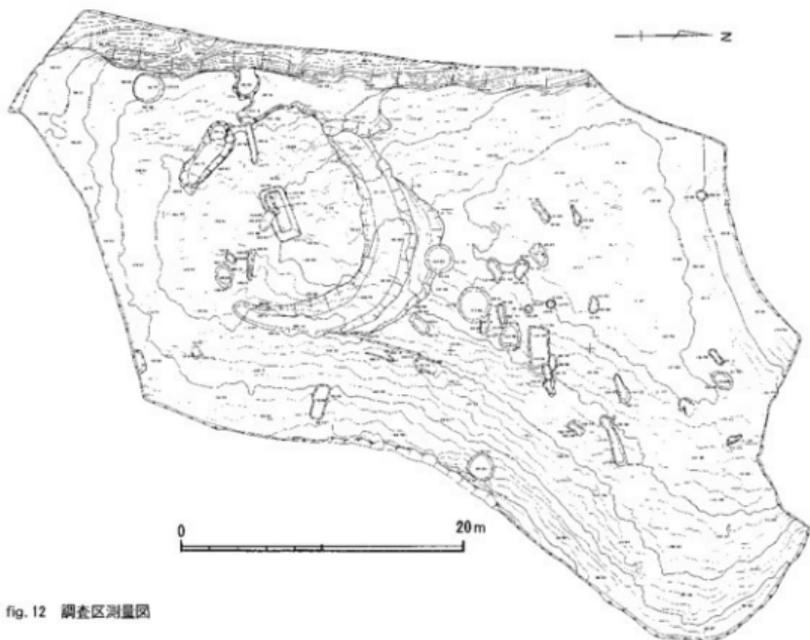


fig. 12 調査区測量図

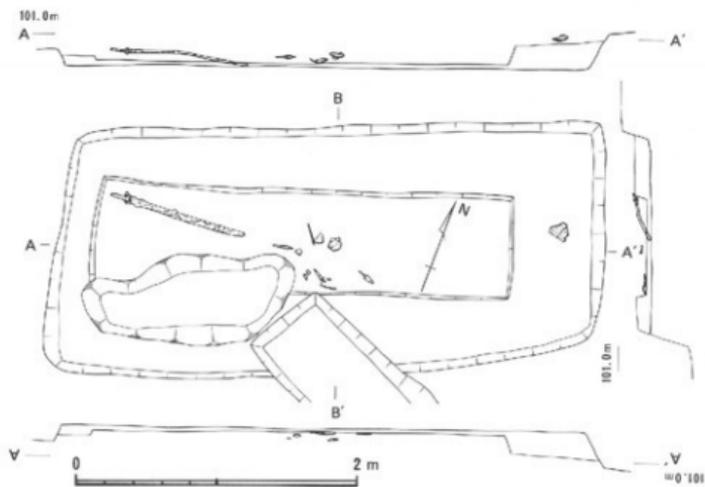


fig. 13 鍋谷池2号墳埋葬施設平面・断面図

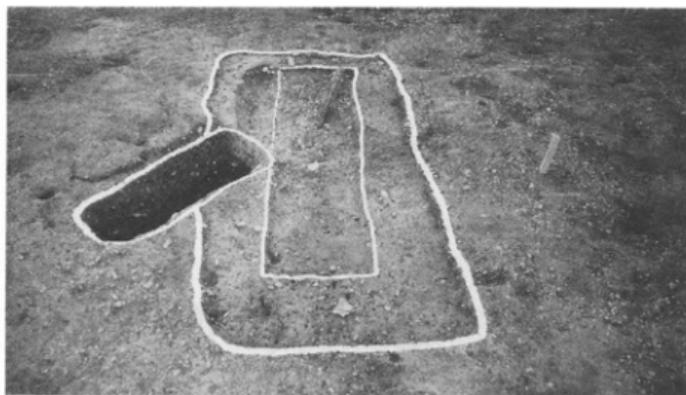


fig. 14 鍋谷池2号墳埋葬施設

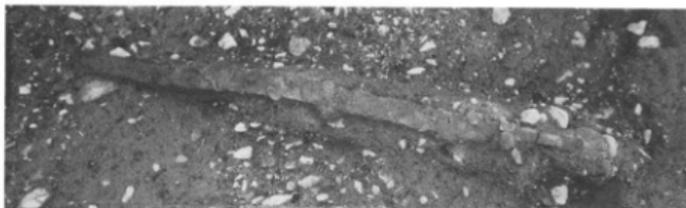


fig. 15 埋葬施設内鉄刀出土状況

周溝

最も多くの遺物を検出したのは、周溝内からである。周溝内でも東半部に集中して出土している。また、出土位置・状況によって北東群と東群の2群に分けることができる。

北東群は、おおむね周溝底から出土したが、やや浮いた位置から出土しているものもある。堆積状況から墳丘側から流れ落ちたものと考えられる。出土したものは、いずれも細片となっている。これらを復元すると短頸壺・直口壺・提瓶・大甕各1点、台付長頸壺2点があるが、杯蓋も1セット存在していたものと思われる。この内、復元することができなかった蓋杯片と提瓶および大甕は、埋葬施設の掘形埋土より出土した数点の細片と接合することが明らかとなった。このことから、これらの遺物は、墳丘が完成した後から、棺を埋葬する間に、墓上における祭祀に使用され、墳丘裾、周溝の近くに一括投棄されたものと考えられる。

東群は、周溝のプランを検出した時にそのほとんどが出土しており、堆積状況から周溝がやや埋まりかけたところに、墳丘側より流れ込んだものと思われる。この一群の器種構成は、杯身2点、杯蓋・高杯・提瓶が各1点ずつある。

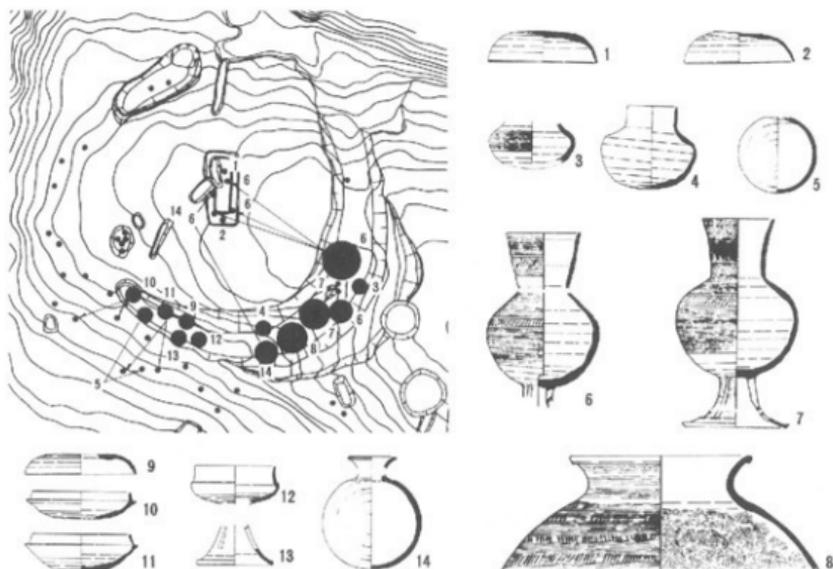


fig. 16 鍋谷池2号墳遺物出土地および接合関係

土坑群

古墳の他に、29基の土坑を検出した。SK01～04は、直径2.0～2.5mの円形の土坑である。断面形は、桶鉢状である。SK01, 02, 03から近世の陶磁器片がわずかに出土した。いずれの土坑も、掘削後すぐに埋め戻されたような埋土の堆積状況であった。

SK05・06・07は、幅0.7～0.9m、長さ1.2～1.7mの長方形の土坑で、ほぼ、垂直に掘り込まれ、底は平坦に仕上げられている。SK05・06の周辺からは、11世紀後半のものと考えられる埴が出土しており、土坑墓の可能性はある。

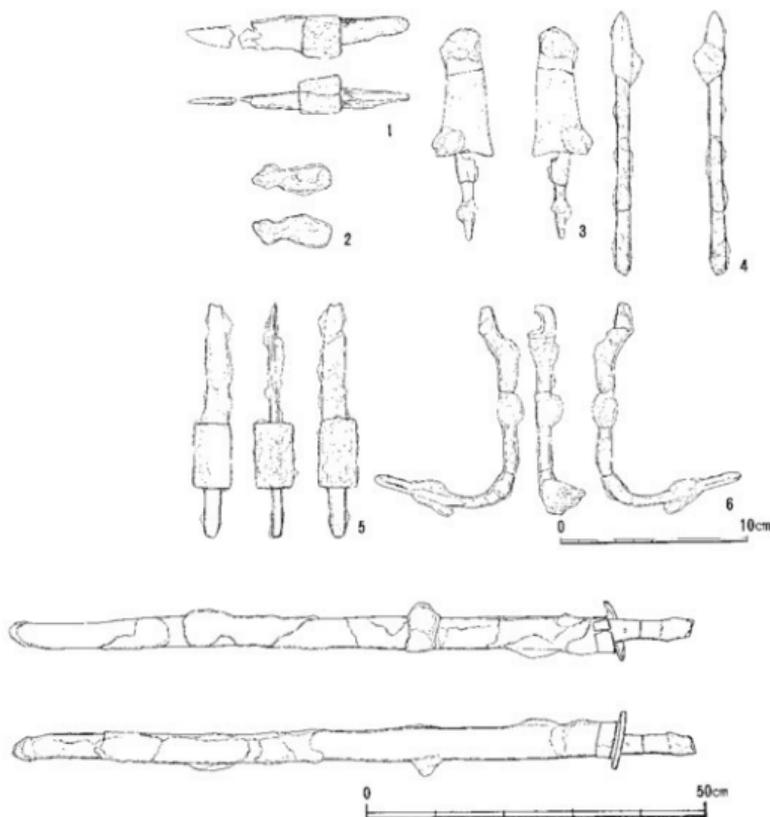


fig. 17 鍋谷池2号墳埋葬施設出土鉄製品

S K08は、幅1.2 m、長さ2.5 mの長方形の土坑で、埋土中に焼土と木炭が混在していたが、土坑自体は、火を受けていない。出土遺物はなく時期は不明である。この他、不整形な土坑を19基検出したが、出土遺物もなく、時期、性格共に不明である。

3. まとめ

今回、検出された古墳は、鍋谷池古墳群内に位置している。同古墳群は分布調査によって確認されたもので、その実態は明らかではなかった。

今回の調査で同古墳群の状況の一端を明らかにすることができた。検出された古墳の築造時期は、6世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。

また、当遺跡の南東に位置する黒田遺跡では、6世紀中頃から後半と、11世紀後半代の集落跡であることが確認されている。この古墳の被葬者は、黒田遺跡と深く関係した人物であったことが窺える。また、11世紀後半代に墓地として利用されたものと思われる。

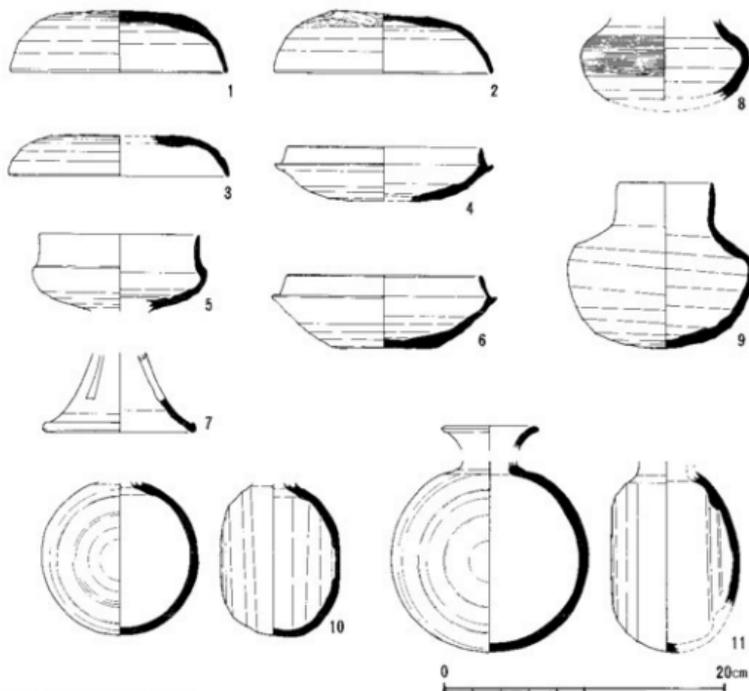


fig. 18 鍋谷池2号墳出土土器 1：棺外出土 2：棺内出土 3～11：周溝出土

3. 栄遺跡

1. はじめに 栄遺跡は、これまで数次の調査によって弥生時代から中世の遺構が検出されている。今年度の調査は、排水路、道路予定地、切土部分において実施した。調査中に工事計画の変更があり、4～6トレンチについては一部の調査を実施した。栄遺跡は、明石川の上流域右岸にあり、明石川が形成した河岸段丘上に位置する。標高は約26mである。調査地周辺では、弥生時代の栄墳墓群、古墳時代後期の押部谷群集墳、平安～中世の一大窯業地帯である神出古窯址群等の遺跡が確認されている。
2. 調査の概要 基本層序は、現耕作土、旧耕作土、暗灰色粘質土、淡黄灰色粘質土、砂礫層である。遺物包含層はほとんど存在せず、砂礫検出面が遺構面となる。掘立柱建物址1棟、柱穴、土坑等が検出された。
- SB101 1間×3間以上の規模の、磁北にはほぼ平行する掘立柱建物址である。遺物は出土せず、時期は不明である。

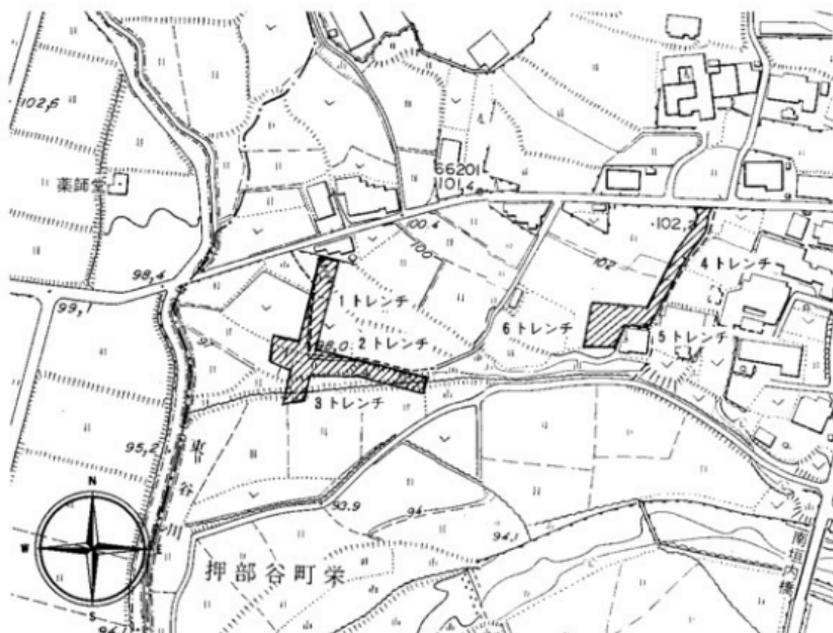


Fig. 19 調査地位位置図 S=1:2500

- 2 トレンチ 東半部と西半部に調査区を設定した。
- 東半部 調査区の大半が自然流路の影響を受けており、円礫層の堆積層からは、遺物の出土はなかった。流路の影響を受けなかった箇所には、遺構が残存している。土坑、ピット等が検出されているが、遺物は出土しなかった。
- 西半部 調査区西半部は、近世の圃場拡張時に、河川の浸食によって形成された斜面に盛土を施している。圃場を保護する目的の杭列（土留遺構）や、溝が4条検出されている。
- 土留遺構 圃場拡張前の傾斜変換点で検出された遺構である。直径5cm程度の杭が7本倒れた状態で検出され、その上に植物遺体を水平方向に並べられた状態で検出された。杭の検出状況から、土留めの役割を果たしていたものが、土圧によって倒壊したものと考えられる。
- 大 溝 2 トレンチ東側で検出された。東北～西南へ流下する幅240cm、深さ80cmの溝である。溝底の一部に、30～50cm大の自然石が検出された。遺物は検出されていないため、時期は確定できない。
- 3 トレンチ 現圃場に伴う暗渠以外は検出されていない。
- 4 トレンチ 1950年代まで宅地であった所で、近代の井戸が検出された他は、遺構および、遺物の検出はなかった。

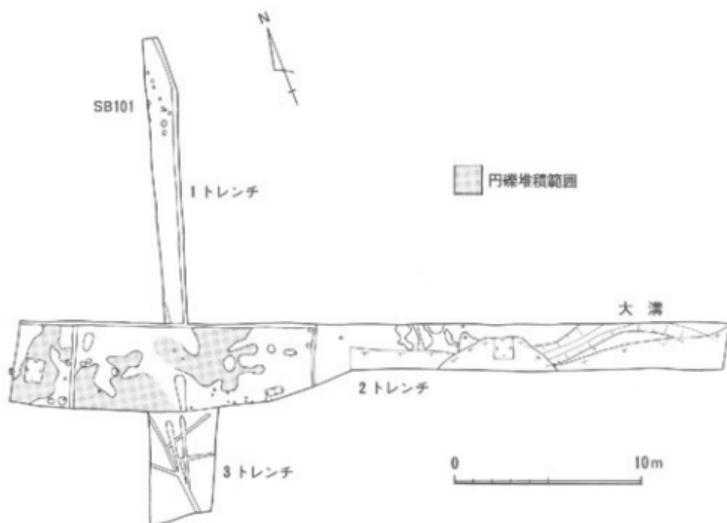


fig. 20 1～3トレンチ平面図



fig. 21 2トレンチ西側全景

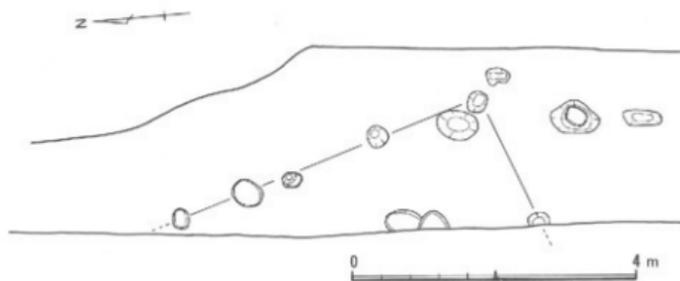


fig. 22 1トレンチSB101平面図

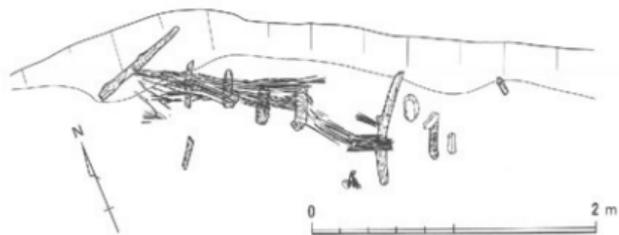


fig. 23 2トレンチ土留遺構

- 5 トレンチ 古墳時代後期の住居址、土坑等が検出された。
- S X 501 調査区西端で検出された遺構で、検出径360cm以上、深さ50cmの土坑である。現耕作土直下でプランが検出されていることと、近代の陶器が出土していることから、当該時期の遺構である。10cm程度の円礫で埋められており、遺構の性格は不明である。
- S B 501 古墳時代後期の堅穴住居址である。プランは1辺約6m程度の方形であると考えられるが、南東コーナー部で別の住居址と切り合っており、西側は、S X 501によって影響を受けているため、詳細は不明である。

炉の部分を除いて、幅20cmの周壁溝を巡らしている。住居址の東辺からは炉が検出されている。

遺物は、炉内より土師器甕が、住居址東辺に須恵器坏身3個体、土師器甕数個体が出土した。須恵器坏身は、すべて伏せられた状況で検出された。

- S B 502 S B 501の南東コーナー部で切合う住居址である。切合い関係からみて、時期はS B 501より新しいが、工事計画変更により、全面調査が実施できなかったため、プラン、時期等の詳細は不明であるが、方形の住居址である可能性が高い。

- 6 トレンチ 近世から近代の井戸、土坑が検出された。工事計画の変更に伴い、プラン検出途中で調査を中止している。

3. まとめ

1 トレンチから4 トレンチは、大半が自然流路の影響を受けており、遺構の残存状況は悪い。遺物の出土も少なく様相は不明であるが、この地区の圃場開墾時期が平安時代以降であることを確認した。5 トレンチでは、古墳時代後期の堅穴住居址が2棟検出され、古墳時代の集落が当トレンチ周辺に広がることを確認した。

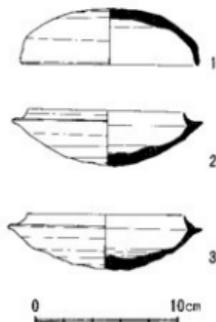


fig. 24 SB501出土遺物



fig. 25 5 トレンチSB501平面図

ようだ 4. 養田遺跡

1. はじめに

養田遺跡は高塚山（標高149.7m）から明石川に向かって延びてきた丘陵先端の洪積台地上、標高55～60mに立地する。昭和45年度圃場整備事業の工事中に発見されたもので、昭和50・51年度の調査により弥生時代～平安時代の複合遺跡であることが確認されている。この調査では、弥生時代後期の円形竪穴住居址1棟、古墳時代後期の方形竪穴住居址1棟・掘立柱建物址2棟、平安時代の土器溜め遺構などの遺構が検出された。昭和61年にはパイプライン敷設に伴う試掘調査・発掘調査が実施され、弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代後半～鎌倉時代後半の遺構・遺物が検出されている。昭和63年の西神22号線自歩道設置に伴う調査では、縄文時代晩期の土器が出土している。

今回の調査は、西神22号線自歩道設置に伴うもので、工事により影響を受ける部分について発掘調査を実施した。



fig. 26 調査地位置図 S = 1 : 3000

2. 調査の概要 試掘調査の結果に従い、旧耕土までバックホーにより掘削を行い、以下は人力により掘削を行った。

基本層序

基本層序は以下の通りである。現耕土、床土、旧耕土、淡灰色粘質砂、褐灰色粘質砂、茶灰色粘質砂、淡青灰色粘質砂、淡青灰色シルト質砂ないし淡青灰色粗砂、淡青灰色砂礫となっている。旧耕土以下の各層に遺物が

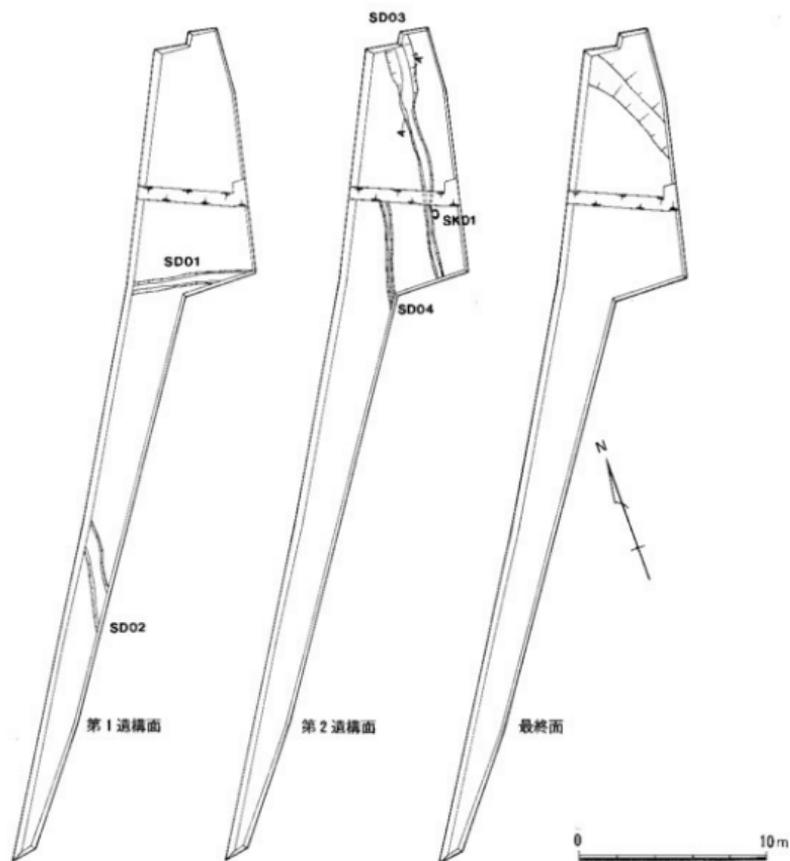


fig. 27 調査地平面図

包含されている。旧耕土と淡灰色粘質砂層には中世の、褐灰色粘質砂層には古墳時代及び中世の、淡青灰色粘質砂層と淡青灰色シルト層には古墳時代の遺物をそれぞれ包含している。遺構は茶灰色粘質砂層上面（第1遺構面）と淡青灰色シルト質砂層ないし淡青灰色粗砂層上面（第2遺構面）で検出している。

第1遺構面

第1遺構面では溝2条を検出している。SD01は幅60cm、深さ20cmを測るほぼ東西方向の溝である。SD02は幅0.8m～1.0m、深さ20cmを測る南北方向の溝である。溝から出土した遺物から12～13世紀のものと考えられる。遺構の性格は明確ではないが、水田に伴うものとも考えられよう。

第2遺構面

第2遺構面では土坑1基と溝2条を検出している。

SK01は径45cmの円形の土坑である。中に須恵器坏身・坏蓋が蓋をした状態で出土した。中にはなにも入っておらず、わずかに隙間から入り込んだとみられるシルトが底に薄く溜まっていただけであった。時期は6世紀前半に属するとみられる。

SD03は幅0.4m～1.2m、深さ5～30cmを測る南北方向の溝である。南から北に向かって傾斜しており、北に向かって幅広となっている。この溝の北端付近で須恵器の壺1・壺2・横瓶1・坏身1（いずれもほぼ完成品）・破碎された壺の破片がかたまっていた出土した。出土状態からみて日常生活に用いられた状態を示しているとは考えにくく、なんらかのまつりに用いられたものではなからうか。時期は6世紀後半に属すると考えられる。

SD04は幅40～50cmの南北方向の溝である。中から須恵器の有蓋高坏が出土した。全体にやや傾き、蓋がずれ、蓋の破片が2方向に散った状態で



fig. 28
SD03遺物出土
状況（西から）

出土している。杯の中には蓋がずれていたため土が充満しており、他にも見出すことはできなかった。遺構の性格は不明であるが、これも出土状態からみてなんらかのまつりに用いられたものではないかと考えられる。時期は6世紀前半に属するとみられる。

いずれの遺構も埋土と遺構面の土色・土質が近似していたため、検出が困難であった。そのため遺構のプランが確認されたのはかなり遺構面を掘削した段階であった。従って、実際の遺構面のレベルはさらに高かったものと考えられる。

さらに、SD03北半付近の下層である淡青灰色粗砂層中にも遺物が含まれておりこれを除去すると東にむかって落ちる自然地形が検出された。

3. まとめ

今回の調査では、12～13世紀と古墳時代後期の遺構が検出された。なかでも古墳時代後期の遺構は、性格は不明であるが、特異な出土状況を示すものであり今後の検討が必要であろう。昭和50・51年の調査でも古墳時代後期の住居址などが見つかっており、広範囲に遺構・遺物が存在するようで、この時代の大規模な集落の存在が想定されよう。

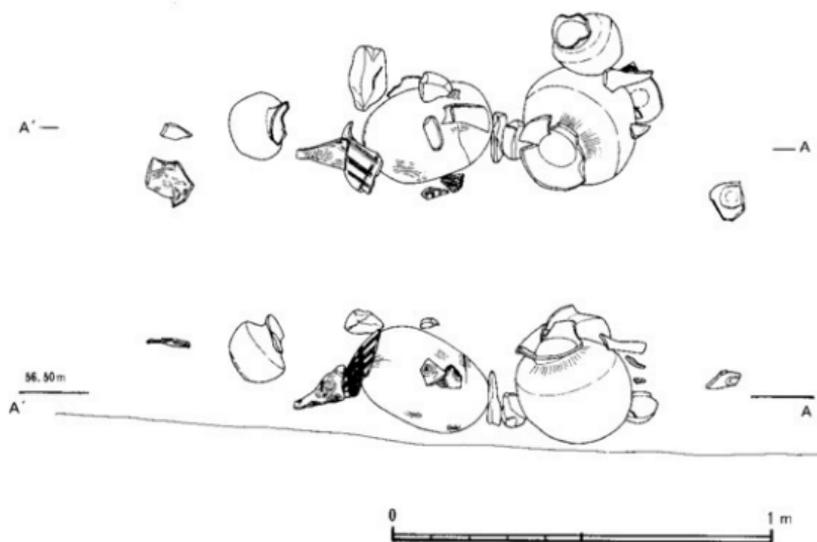


fig. 29 SD03遺物出土状況

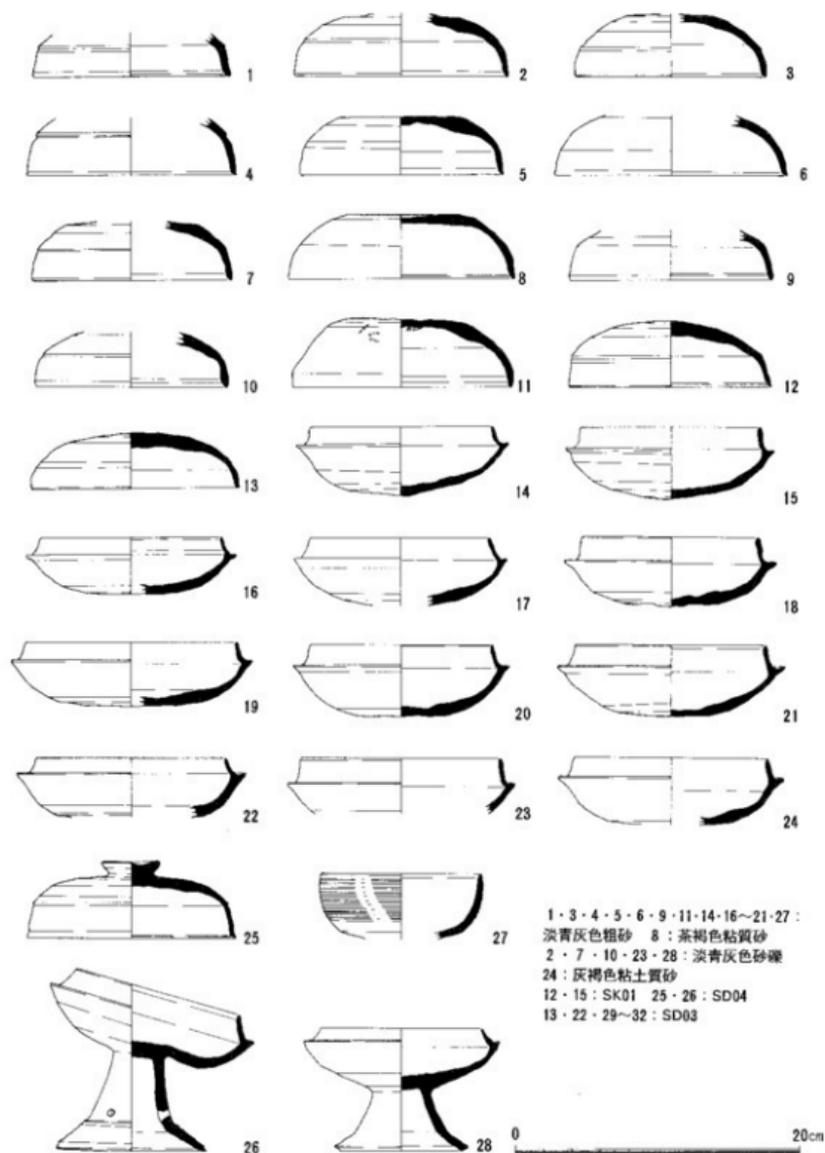
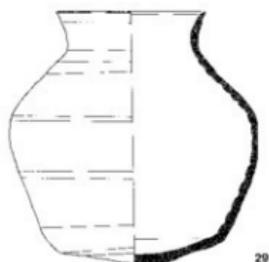
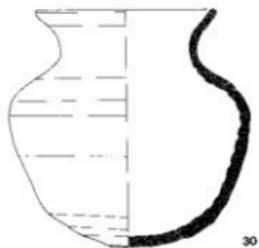


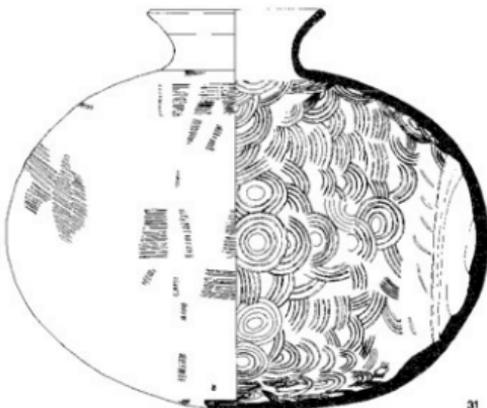
fig. 30 黄田遗址出土器物 (1)



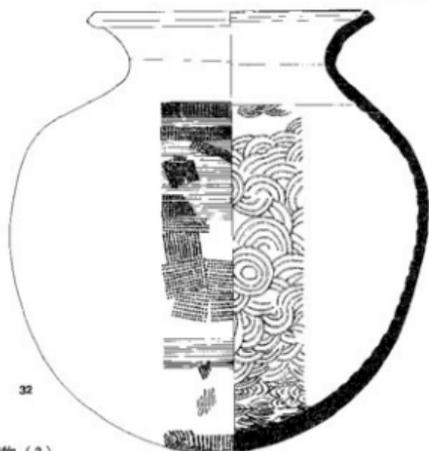
29



30



31



32

fig. 31 粟田遺跡出土遺物 (2)

0 20cm

5. 大畑遺跡

1. はじめに 大畑遺跡は、昭和40年代に行われた圃場整備に伴う工事で、今回の調査地の西に接する排水溝を掘削した際に、幅10m前後の流路状の遺構が断面で確認されたのが発見の契機となった。その掘削された土中には、縄文時代～弥生時代後期の土器が含まれていたが、当時は調査体制が確立しておらず、詳細を明らかにすることができなかった。

昭和63年度、平成元年度には圃場整備事業（第1次調査）と西神22号線自歩道設置事業（第2次調査）に伴う発掘調査が今回の調査地の南で行われ、中世の遺構と弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が多数出土した。

また、先に述べた流路状の遺構らしきものが発見された地点で自歩道設置工事を施工するため、平成元年度に遺構の残存状態を確認する試掘調査を行ったところ、上層が若干の削平を受けているのみで大部分が遺存していることが判明した。そのため、平成2年度では遺構の存在する範囲について調査を実施した（第3次調査）。



fig. 32 調査地位置図 S = 1 : 3000

2. 調査の概要 今回の調査地点は、平成元年度の調査地点とは約100 mしか隔たっておらず同じ遺跡の範囲内と考えられ、また昨年度と同じ事業による調査であるため、トレンチ番号を昨年度の続きの4トレンチとした。

4トレンチ

調査地の現況

今回の調査地は西神22号線の法面部分にあたっている。道路面から約1 m下がったところが遺構検出面となり、検出面から約2 mほど下がって排水路が北東から南西にはしる。排水路の西側は約1 mほど上がったところに圃場が広がる。

検出遺構

流路

遺構については、先述の流路が確認できた。幅約13m、深さ2 m以上の規模である。堆積土からは、縄文時代後期～中世の土器が出土した。



fig. 33
調査前の状況

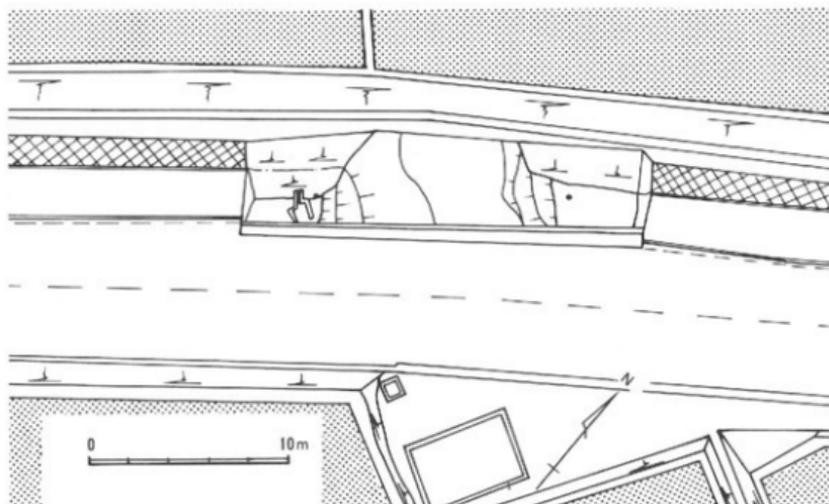


fig. 34 調査地平面図

基本層序

今回の調査地は、西神22号線の道路建設時に上層が削平を受けており、鎌倉時代以後の堆積層は確認されなかった。

また、堆積土の掘削開始前に西端断面の土層を略測し、遺物取り上げ時の層名とした。しかし東端に土層観察用のセクションを設定したため、遺物の取り上げの層が断面図には表現されないものがある。この状況を勘案して流路の基本層序を概念的に述べることにする。

I層：灰褐色シルト（中世の土器を含む）

II層：暗灰色シルト～極細砂（鎌倉時代前半の土器を含む）

これらの層はほぼ水平に堆積し、非常に緩やかな水の流れであったことを示す。同層からは鎌倉時代前半の完形に近い土器が多量に出土した。

III層：灰色～黒色系細砂・極細砂（礫を多く含む層がある。）

流路の大半が埋没した段階で、幅の狭い流れが何条か存在する。堆積土からは、古墳時代～平安時代の土器が出土している。

IV層：黒色・暗褐色系細砂～シルト（礫を多く含む層がある）

両岸からの流れ込みの堆積土で、特に南側から流れ込んだ土には多くの弥生時代の土器が含まれていた。

V層：暗灰色系粗砂～砂礫（植物遺体を部分的に含む）

水の流速が早い状態で堆積した層で、粗砂～砂礫が堆積している。土器の出土量は多くはないが、完形に近い弥生時代後期の土器が数個体出土している。

VI層：灰黒色～黒褐色砂礫混じりシルト（植物遺体を含む）

南側から流れ込んだ土層であり、縄文時代後期の土器を包含する。

VII層：赤褐色～灰色砂礫（無遺物層）

I層からVII層下面までの深さは約2.8mである。



fig. 35
流路内堆積土
の状況



fig. 36 流路断面図

層名

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰色礫 (1~5cm大の角礫を含む) (復乱層) 2. 黄褐色砂礫 (工事場面上?) 3. 褐色腐植砂 (近世堆上?) 4. 黄灰色腐植砂礫 (1~3cm大の悪円礫を含む) 5. 褐色を帯びた灰色シルト (中世) 6. 褐色を帯びた暗灰色シルト (鎌倉時代の土層を含む) 7. 暗褐色腐植砂礫 (1~3cm大の悪円礫を含む) 8. 暗灰色腐植砂 9. 暗褐色腐植砂 10. 淡褐色腐植砂 11. 暗褐色腐植砂礫-粗砂 (1~2cmの悪円礫を含む) 12. 灰褐色腐植砂礫 (弥生時代の土層を含む) 13. 暗褐色シルト (植物遺体を多く含む) 14. 黄褐色腐植砂礫 (1~3cm大の悪円礫を多く含む、弥生時代の土層を含む) 15. 灰褐色腐植砂礫 (1~3cm大の悪円礫を含む、弥生時代の上層を含む) 16. 灰色腐植粗砂 (1~2cm大の悪円礫を含む) 17. 灰褐色腐植砂 18. 暗褐色シルト (植物遺体を含む、フック状に灰色粗砂を含む) 19. 灰褐色腐植砂礫 (1~5cm大の悪円礫を含む) 19c. 灰褐色腐植砂礫 (19層より黄色味を帯びる) 20. 淡灰色腐植砂礫 (1~2cm大の悪円礫を多く含む) | <ol style="list-style-type: none"> 21. 淡灰色腐植砂 22. 灰色砂礫 (1~5cm大の悪円礫を多く含む) 23. 暗灰色腐植砂礫屑じりの細砂 (1~3cm大の悪円礫を含む) 23c. 暗灰色腐植砂礫屑じりの細砂 (23層よりやや砂っぽい) 24. 淡褐色腐植砂 (植物遺体を多く含む) 25. 暗灰色腐植砂 26. やや粗味を帯びた暗灰色砂礫 27. 暗褐色腐植砂 28. 淡褐色腐植砂 29. 灰色粗砂 30. 暗褐色腐植砂 (植物遺体の粗片を含む) 31. 暗褐色腐植砂礫-粗砂 32. 腐植を帯びた暗褐色腐植砂礫 (1~2cm大の悪円礫を若干含む) 33. 灰褐色腐植砂礫 (縄文土層を含む) 34. 淡褐色腐植砂礫 35. 淡褐色シルト (植物遺体、縄文土層を含む) 36. 淡褐色腐植砂礫 (無土層を含む) <p>A. 黄白色シルト (地山)
 B. 黄白色シルト-粗砂 (1~2cm大の悪円礫を若干含む地山)
 C. 黄褐色腐植砂礫 (地山)
 D. 暗褐色腐植砂礫 (地山)</p> |
|--|---|

出土遺物

出土遺物の整理事業が終了していないので、遺物については、現在の段階で確認できた点を述べる。

Ⅱ層から出土した鎌倉時代前半の土器については、須恵器の埴、小皿、播鉢、甕、土師器の坏、小皿、鍋等が出土している。完形品もあり、口縁部が1/4以上の実測可能な個体は20~30個体程度ある。また、当時の川岸と思われるところに壊れた土器を一括して投棄している状態も確認された。

N層から出土した弥生時代の土器は、後期が主体であり、若干中期のものも含まれるようである。しかし、流れ込んで堆積した遺物であり、破片の大きなものは少ない。

V層から出土した弥生時代後期の土器については、完形の長頸壺や、半分以上残存している鉢、壺等が出土した。

Ⅵ層の縄文時代後期の土器については、深鉢、浅鉢の精製品、粗製品があり、他の時期の土器が混入しない状態で出土している。

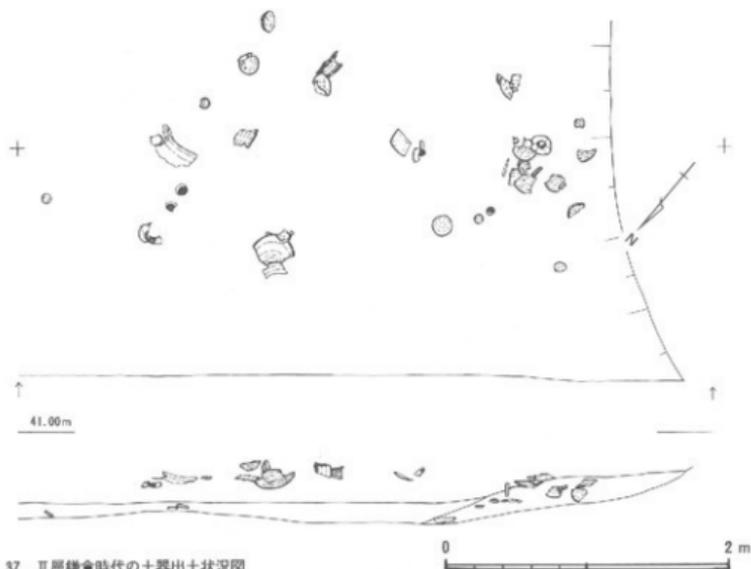


fig. 37 Ⅱ層縄文時代の土器出土状況図

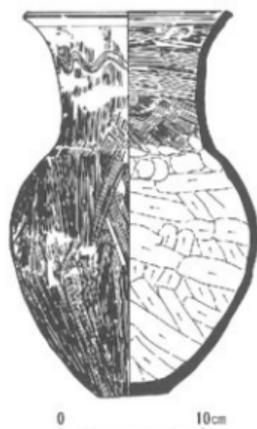


fig. 38 Ⅴ層出土遺物



fig. 39 Ⅴ層弥生土器出土状況（北西から）

3. まとめ 流 跡

今回の調査では、幅約13m、深さ約2.8m以上という大きな流路が検出された。この流路は当初、人工的に掘られたものという意見もあったが、幅が余りにも広く、護岸の施設等が確認できないことなどから小さな埋没した谷であると考えるのが妥当であろう。周辺の地形を詳細に観察すると、調査地真西の山側に幅約15～20m前後の細長い谷地形が認められ、溜池として使用されていたことから、その谷の一部分が今回の調査地点に相当すると考えられる。

堆積土からは、最下層に近い部分では縄文時代後期、最上層では中世の土器が出土しており、谷の埋没の時間経過を示すものといえよう。また基本層序の項で述べたように、土層の堆積状況からみて、縄文時代～弥生時代後期にかけては水の流速が早い状態の中で壱円礫が多く堆積している。弥生時代後期以後、谷の埋没が進み、古墳時代～平安時代には細い流れとなり、鎌倉時代前半には非常に緩やかな水の流れ（湿地状の地形）であったことが判明した。

花粉分析

また、各時期の周辺の植生環境は、(株)パレオ・ラボが行った今次調査地点の花粉分析の結果によると、Ⅰ層（縄文時代後期）では、アカガシ亜属、シノキ類等の照葉樹林を構成する樹木花粉が多く、Ⅳ～Ⅴ層（弥生時代）では、照葉樹林種が減少し、ニヨウマツやイチイ、イヌガヤ、ヒノキ等の中間温帯針葉樹の花粉が増加している。これは全国的な傾向のようであるが、その理由として、気候の悪化と洪水の多発の影響が考えられるという。Ⅳ～Ⅴ層は礫を非常に多く含み、その供給源である後背地の丘陵は洪水等の影響を受けやすい不安定な状況であったことは想定できる。

Ⅲ層（古墳時代～平安時代）では、再び照葉樹林種が増加する。これについての要因は不明である。

Ⅰ～Ⅱ層（鎌倉時代～中世）では照葉樹林種が減少してゆき、ニヨウマツやコナラ亜属等の人間が植生環境を改変した後に生える樹木の花粉が増加している。また、ソバの花粉量が多いことから、この時期に栽培が行われていた可能性も指摘されている。

今回の調査では、遺跡の性格を明らかにすることは確認できなかったが、周辺の縄文時代後期から鎌倉時代にかけての植生環境を窺い知ることができた。また、調査面積に比較して多量の遺物が出土したことから、ごく近辺に集落遺跡の存在が予想される。特に縄文時代後期、弥生時代後期、鎌倉時代前半の遺跡が南北に広がる段丘上にあると考えられる。

6. 玉津田中遺跡（平野地区）

1. はじめに 玉津田中遺跡（平野地区）は平野地区県営圃場整備事業に伴い、昭和63年度の分布調査で、埋蔵文化財の存在が明らかになった遺跡である。発掘調査は平成元年度から実施しており、これまでの調査で、弥生時代後期の竪穴住居址や流路、古墳時代中期の竪穴住居址や流路等が検出されている。

また、当遺跡は明石川の中流域左岸の河岸段丘及び沖積地に位置している。標高は、河岸段丘上で約26m、段丘下の沖積地で約24mである。

調査地に最も近接する遺跡としては、福中城址（室町時代）がある。

2. 調査の概要 圃場整備に伴う、排水路設置部分の調査を行った（1～6トレンチ）。

1トレンチ

全長53m、幅2.5mの調査区である。北東から南西に伸びる段丘の傾斜変換点にあたる。調査区南半で、平安～鎌倉時代と弥生時代後期の遺物包含層を検出したが、明確な遺構は検出されなかった。遺物は、ササカイトの大型剝片、11～12世紀の須恵器、土師器等が出土した。



fig.40 調査地位置図 S=1:5000

- 2トレンチ 現水路をはさんで1トレンチに南接する調査区で、全長20m、幅2.5mのトレンチである。調査区の南半部が工事前仮設道路であったため、北半部と南半部に分割して調査を実施した。
- 北半部 工事影響深度まで掘削した結果、1トレンチと同様、平安～鎌倉時代にかけての遺物包含層が確認されたが、遺構は検出されなかった。
- 南半部 遺構面が2面確認され、溝状遺構2条、ビット数基、用途不明土坑2基などを検出した。
- SD202 第1遺構面で検出した溝で、幅0.6m、深さ0.08mの北西～南東方向に流れる。平安時代末の須恵器の碗や土師器片が出土している。
- SP201 一辺0.47mを測る方形のビットである。埋土内には、礎盤として使用されていた可能性のあるものも含めて、拳大から人頭大までの礫が含まれていた。
- 3トレンチ 全長67.5m、幅2.5mの東西方向に伸びるトレンチである。調査区の東半は、平安時代後半の遺構面と弥生時代後期の遺構面が確認された。西半は、砂礫層の上面が遺構面であり、遺構の存在は希薄である。

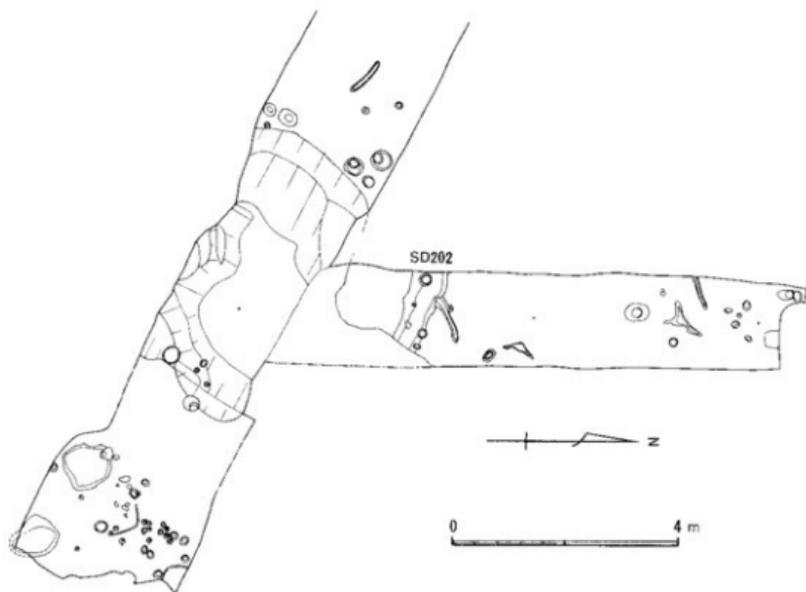


fig.41 2トレンチ南半部および3トレンチ東端部平面図

- S K 301 長さ0.8m、幅0.72m、深さ0.11mの楕円形の土坑である。埋土より、平安時代後半の須恵器片、土師器片が出土している。
- S K 302 長さ0.89m、幅0.78m、深さ0.12mで、平面形は不定形の土坑である。平安時代末の土師器の坏や須恵器片が出土している。
- S D 307 幅3m、深さ0.8mの、南に流下する弥生時代後期の流路である。
- S D 309 幅1.8m、深さ0.5mの、南西方向に流下する弥生時代後期の流路である。流路下層より銅鉄の未製品が出土した。刃先部と基部に、湯流しの部分が切り離されずに残っている。
- S X 301 幅2.9m、深さ0.25mで、流路である可能性が高いが、性格は不明である。埋土上層では10世紀代後半の遺物が検出されている。底面では直径0.1m程度の杭穴が多数と、直径0.3mから0.5m程度の土坑が検出された。杭穴が最深部には少ないことから、護岸のための杭である可能性が高い。
- 4 トレンチ 全長約155m、幅約3mのトレンチで、3トレンチの南方約75mに位置する。調査の結果、掘立柱建物址2棟、大畦1条、畦8条、溝状遺構3条、ピット数基、用途不明土坑3基などを検出した。
- 掘立柱建物址 掘立柱建物址と考えられる柱穴群が調査区の東端で検出され、規模を確認するために調査区を北・南両方向に拡張して調査を実施した。その結果、2棟の掘立柱建物址が検出された。これらの建物は、旧耕土面に建てられており、建物廃絶後に再び圃場となっている。当時期の建物址は3トレンチでも検出されており、他の遺構の広がりから、当時期の集落が、少なくとも3トレンチから4トレンチにかけて広がっていることが推定される。

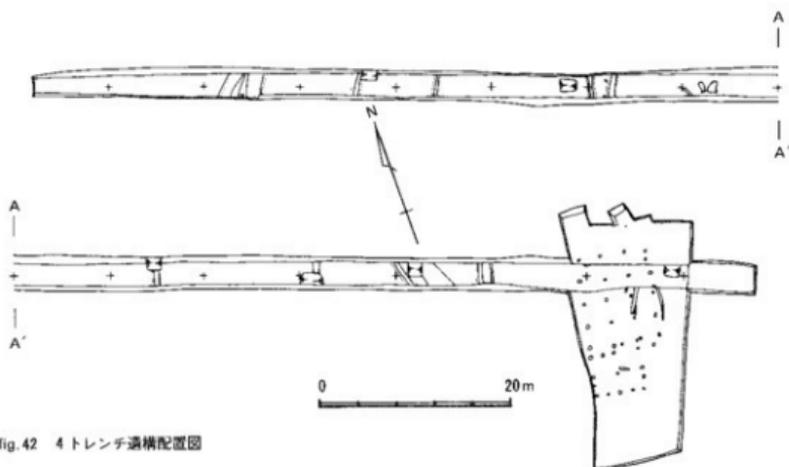


fig. 42 4トレンチ遺構配置図

SB401 棟方向を南北方向にとり、南側に半間の張り出しをもつ3間×4間の掘立柱建物址である。北東隅のピット（SP420）内より11世紀後半の須恵器碗が柱を抜き取った後に埋納されており、この時期以前にこの掘立柱建物が廃棄されたと考えられる。

SB402 南側の拡張区では、SB401の南側でもう1棟掘立柱建物址を確認した。規模は1間×2間で、棟方向を東西方向にとり、北側を除く3方に半間の柱を持つ。拡張部については、規模を確認したのみで、柱穴の掘削は行っていないので明確な時期については不明である。SB401と近接した時期であると考えられるが、両者は隣接しており（SB401南端の柱穴とSB402北端の柱穴間の距離は0.5m）、同時併存は考えにくい。ただし、両者が1棟の建物である可能性も否定できない。



fig. 43
4トレンチ
SB401・402全景
(北から)

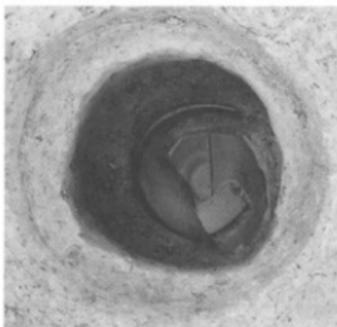


fig. 44 SP420須恵器碗出土状況(南から)



fig. 45 同左(南から)

畦 主軸を磁北より約20°東に振った方向の畦7条と、磁北より約13°西に振った方向の畦1条を検出した。前者については、位置的な関係から、条里に関連するものと考えられる。後者については主軸方向の違いなどから、東側に隣接するSB403と共に、やや時期を異にするものと考えられる。

大 畦 4トレンチの西端付近で、主軸方向を磁北より約51°東に振った上面幅約2.9mの大畦を検出した。西側は、後世に削平されており、本来の規模については不明である。この大畦は、弥生時代後期の土器を多量に含む客土によって形成され、堅く締まっている。畦の中央部に幅50cm、深さ15cmの溝が設けられている。畦上に水路を設ける例は、北区長尾町の上津遺跡でも確認されており、水田に水を導く機能を持つものと考えられる。弥生時代後期の土器を含む客土は、当トレンチでは他に検出されておらず、当該時代の遺構も検出されていないため詳細な時期は不明である。

5トレンチ 4トレンチの南方約80mに位置する全長約255m、幅3mの調査区である。1～8区にかけては、礫層の上面が弥生時代後期の遺構面であり、当該時期以外の遺構面は存在しない。9区以西は、弥生～平安時代の遺構面が2～3面確認された。

平安時代の遺構は、掘立柱建物址、畦、溝、土坑で、弥生時代の遺構は水田、溝、土坑、土器集積遺構等である。

SX508 7・8区において、弥生時代後期の土器が多量に集積された遺構を検出した。遺構の性格を確認するために、トレンチの南側を28㎡の範囲で拡張した結果、北東～南西方向に広がる事が確認された。さらに遺構の広がりを確認するためにトレンチを設定した結果、平面形は不明であるが、南西



fig. 46 5トレンチSX508
土器出土状況

方向に17m、南北方向に9mの範囲に広がる事が確認できた。出土した土器は、28ℓのコンテナに約60箱で、弥生時代後期後半から庄内期のものである。

土器層を除去すると、柱穴が検出された。大部分の遺構からは遺物が出土したが、上層の遺物との明確な時期差は確認できない。柱穴は、建物としてまとまるものはなく、遺構の性格は不明である。上層の土器層と遺構の関連は、今後の接合作業の過程で判明すると考えられる。

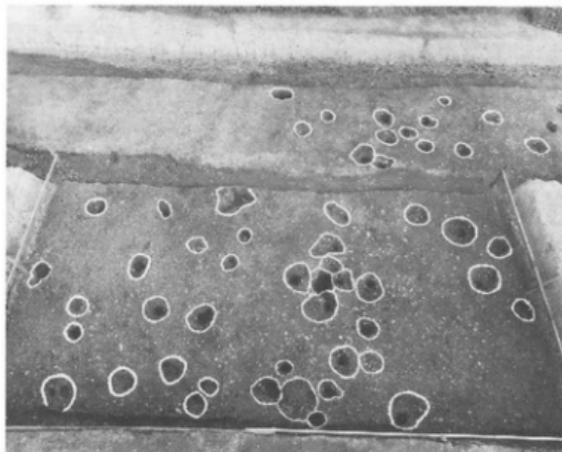


fig. 47 SX508完掘状況(南から)

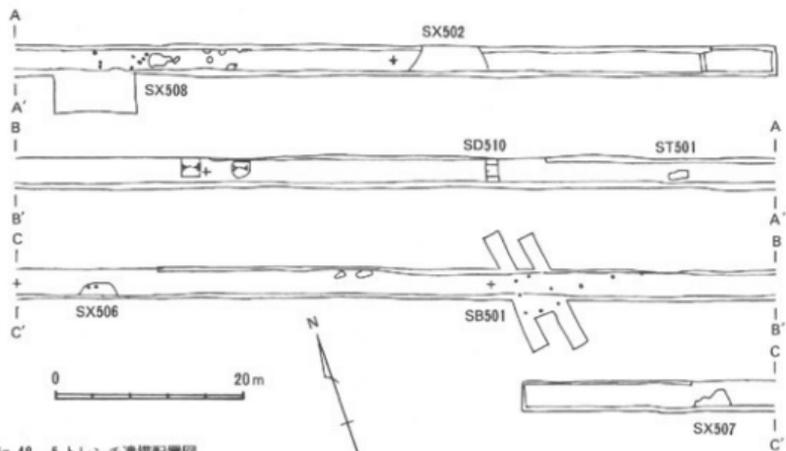


fig. 48 5トレンチ遺構配置図

ST501 長さ2.5m、幅0.75mの掘形の内側に、長さ1.9m、幅0.4mの木棺の痕跡が認められた。残存状況は悪く、掘形底部より5cm程度のみ遺存している。出土遺物はなく時期を確定できないが、検出面から推定すると、弥生時代の遺構である可能性が高い。ST501に伴う周溝、マウンド等の遺構は検出されていない。

SD510 幅4m、深さ0.5mの、南へ流下する流路である。埋土は7層に分層できるが、弥生時代後期後半から庄内期の遺物を包含している。土器の遺存状況は良好である。

水田址 20区～21区において水田址が検出された。確認された5面の水田面の大きさは、トレンチ調査のため不明であるが、2.2～3.9m間隔で畦が検出された。畦の方向は、約N25°Wである。水田面直上には、洪水による砂層の堆積が認められ、足跡、水口が良好に遺存していた。遺物の出土は少量で、時期を確定できないが、層位から判断すると、奈良時代以前の水田址であり、弥生時代まで遡る可能性もある。また、水田址に伴う遺構として、水田4から水田3へ水を配水するための落ち込みが検出された。水田4に配水された水は畦にそって設けられた溝に流れるようになっている。

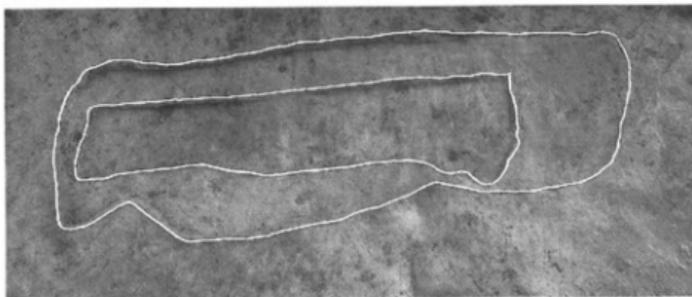


fig. 49
5 トレンチ
ST501 全景
(北から)

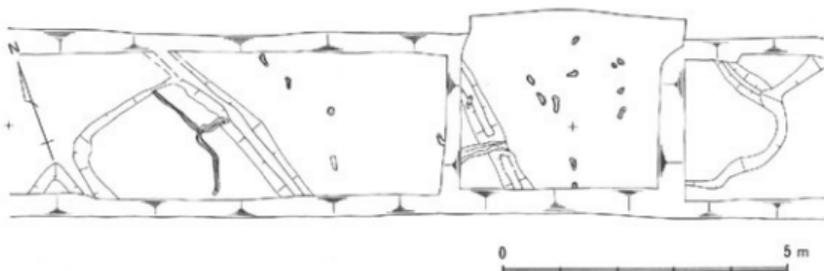


fig. 50 水田遺構平面図

- 溝 弥生時代後期の溝は12条検出された。遺物が出土したものは少ない。
- 土坑 調査区全域で検出されたが、遺物が出土したものは少なく、用途を確定できない。
- 6トレンチ 北端が5トレンチの東端から、南に直交する南北方向に伸びるトレンチで、長さ約83m、幅約5mを測る。調査区の北半（1～5区）では弥生時代後期の遺構面、南半（6～8区）にかけては弥生時代後期から庄内期および、布留期の遺構面が確認された。特に、弥生時代後期から庄内期の流路からは、多量の植物遺体、建築部材、木製品、土器等が出土した。
- 北半 5トレンチ1～8区と同様に、礫層の上面が弥生時代後期の遺構面であり、当時期以外の遺構面は存在しない。調査区北端から南側にかけて、緩やかに礫層が傾斜し、5区付近で流路（SD601）の肩となる。検出された遺構の大半は柱穴であるが、建物としてまとまるものは確認できなかった。
- 南半 布留期の遺構は、流路（SD601上層）、弥生時代後期から庄内期の遺構は流路（SD601下層、SD602、SD603）と土坑等が検出された。
- SD601 幅27m、深さ1.5mの南西方向へ流下する溝である。SD601の埋土は大きく2時期に分けられ、上層は古墳時代前期（布留期）、下層は弥生時代後期後半から庄内期である。



fig. 51 6トレンチSD601南側遺物出土状況（北から）



fig. 52 6トレンチSD601完掘状況（北から）

- 最上層** SD601の両肩部及び溝底には、足跡が数多く残されていたが、歩行状態がわかるものはない。浅く窪んだ状況から、沼状の湿地であったと考えられる。
- 上層** 上層の堆積層は、植物遺体堆積層以上で、当該期の遺物は、小型丸底壺、壺、滑石製臼玉等がある。植物遺体堆積層からは、多量の種子類、枝葉が検出された。すべての樹種の同定は完了していないが、モモ、ウリ等の種子が確認されている。
- 下層** 多量の建築部材、木製品、植物遺体、土器が検出された。
- 建築部材** 直径約8 cm程度、長さ2～3 m程度の枝を払った木材が、10数本出土した。端部から約5 cmのところを浅く窪めたもの、全周窪めたもの、枝を5 cm程度残し、垂木を掛ける機能を持つもの等がある。形状、法量から建築部材と考えられる。その他、加工木は総数約170点、自然木は約480点を確認している。樹種の分析は完了していない。
- 木製品** 鋤木製品、浮き、織機、木包丁、男根状木製品、剣形木製品等、約40点が出土した。
- 織機製品** 船底状突起を削り残した段階のもので、柄穴は穿孔していない。刃部が長い、えぶり又は広楕と呼ばれる形式のものである。
- 浮き** 平面は多角形で、円形に仕上げていない。両端は工具による加工痕が残り、鈍い円錐形に仕上げている。円柱部の中間に溝を設けて、縄を縛る機能を持たしている。
- 糸巻** 糸巻の一部であると考えられる木製品で、中央部の穿孔部分で欠損して



fig. 53
6トレンチ
SD601木製品
出土状況
(北から)

いる。斜め方向に3ヵ所の細い穿孔を施してある。奈良時代の遺物例から2本を十字に組み合わせて使用することは推定できるが、他の構成部品との関連は類例がなく、不明である。

織機

両端に窪みを持つ板状の木製品が数点出土している。

木包丁

神戸市内の遺跡では2例目で、兵庫県教育委員会によって調査が実施された玉津田中遺跡につぐ出土である。穿孔部は、溝状に窪めたあと、裏側から穿孔している。

土器

弥生時代後期から庄内期にかけての土器が出土した。

土器群1

SD601の北側の肩部(5区)で検出された。24ℓコンテナに6箱分の遺物が出土した。弥生時代後期から庄内期にかけての一括遺物である。調査区内で幅6.5m、長さ7.5mの範囲で広がり、さらに調査区の東側へ続いている。土器の遺存状況は良好で、出土状況から当地で投棄されたと考えられる。

土器群2

土器群1から南へ10mの地点で検出された。28ℓコンテナに8箱分の遺物が出土した。土器群1との明確な時期差は認められない。出土状況は土器群1と同様である。編み物の痕跡を残す壺が1点出土している。

蛸壺

土器群2からは蛸壺が10点出土した。端部に1ヵ所穿孔するもの、端部と底部に穿孔するものがある。

SD602

調査区の東側を拡張した結果、溝であることが判明した遺構である。幅1.5m以上、深さ0.8mで、南西方向へ流下する溝である。埋土から弥生時代後期から布留期の遺物が出土している。



fig. 54
6トレンチ
SD601土器群2
全景(東から)

SD603 調査区の南端で検出された流路で、拡張区の調査結果から、幅2.05m、深さ0.4mを測り、SD602とほぼ同一の場所、方向を流れる事が確認された。弥生時代後期後半の土器が出土している。溝底には、流路に平行して、杭列が検出された。埋土より、鳥形木製品、銅鏃、ミニチュア土器等が出土した。

杭列 溝底の北西側に直径4cm程度の杭列（7本）が検出された。流路に平行して打ち込まれており、砂層が下に押し込まれた状況が確認できる。

鳥形木製品 長さ28cm、幅4.5cm、厚さ1.2cmで、頭部及び胴部を真上から見た様子を表現している。尾部にはぞがあり、他の部品を組み合わせていた可能性がある。鳥の側面を模した鳥形木製品の類例は数多く存在するが、俯視した状況の例は少なく、長野県石川条里遺跡、愛知県朝日遺跡、兵庫県小犬丸遺跡等で類例が知られるのみである。

銅鏃 鳥形木製品の20cm東側で検出された。全長5.0cm、幅1.8cmである。

糸 鳥形木製品直下に糸状の繊維が検出された。種類は不明である。

SK601 長さ90cm、深さ30cmの土坑である。遺物は検出されなかった。

3. まとめ

今回の調査で検出された主要な遺構は、弥生時代後期の流路、土器集積遺構、古墳時代前期の流路、平安時代後半の掘立柱建物址、畦等である。

弥生時代後期後半の遺構は、今回の調査で検出した遺構の大半を占め、当時期の人々の生活の場がこの地区にあったことが推定される。特に、極めて多くの土器が、比較的短期間に投棄されたと推定される土器集積遺構や、流路から出土した一括の土器群や木製品は、編年上の良好な資料を提示すると共に、当時期の生活拠点が付近に存在する事を示している。土器

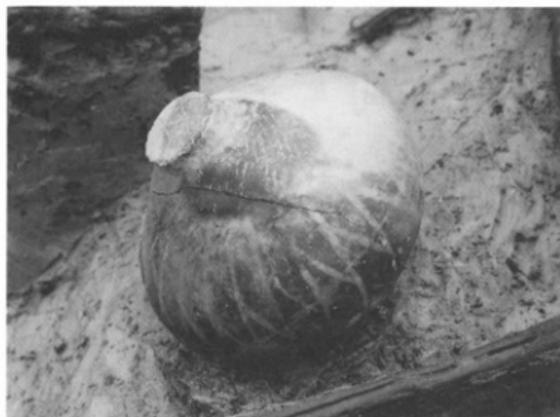


fig.55 6トレンチSD601
編目付土器出土状況（南から）

群は流路の肩の部分で検出され、底部や口縁部を打ち欠いた壺が出土していることから、水に関係する祭祀に使用された遺物である可能性がある。今回の調査では弥生時代後期の住居址や水田は検出できなかったが、今回の調査区の付近に集落が存在する事は明らかであり、今後の調査によって生活の場、生産の場の範囲が明らかになると考えられる。

古墳時代前期の流路の埋土からは、遺存状況の良好な植物遺体層が検出され、多数の種子や枝葉とともに、小型丸底壺・臼玉等が検出された。当時期の環境復元のための良好な資料となるものである。

平安時代後半の掘立柱建物址は、これまで平野地区の調査では確認されておらず、今回初めて当時の集落の存在が確認された。

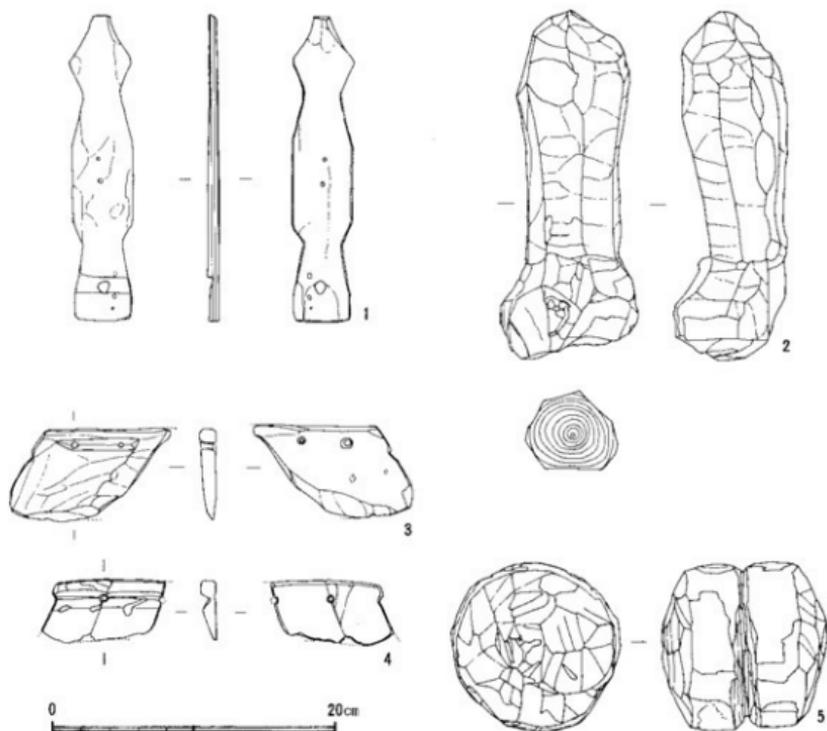


fig. 56 SD601・603出土木製品 1:SD603 2~5:SD601

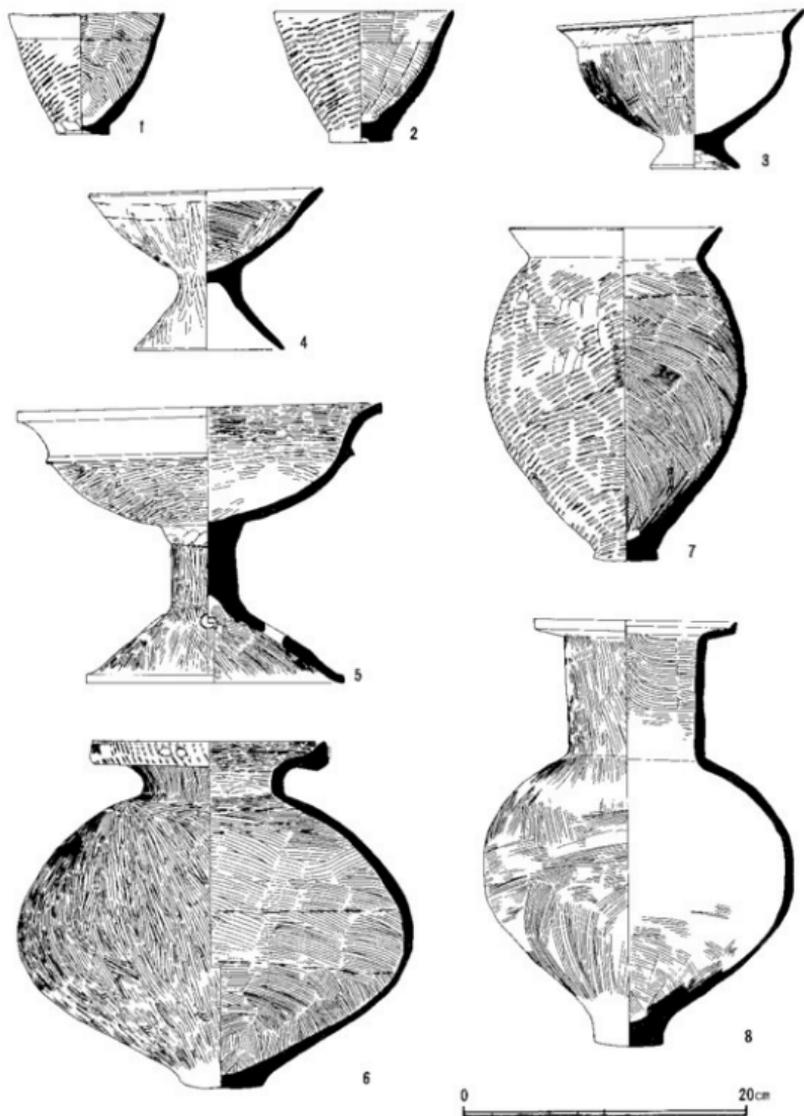


fig. 57 SD601土器群 2 出土遺物

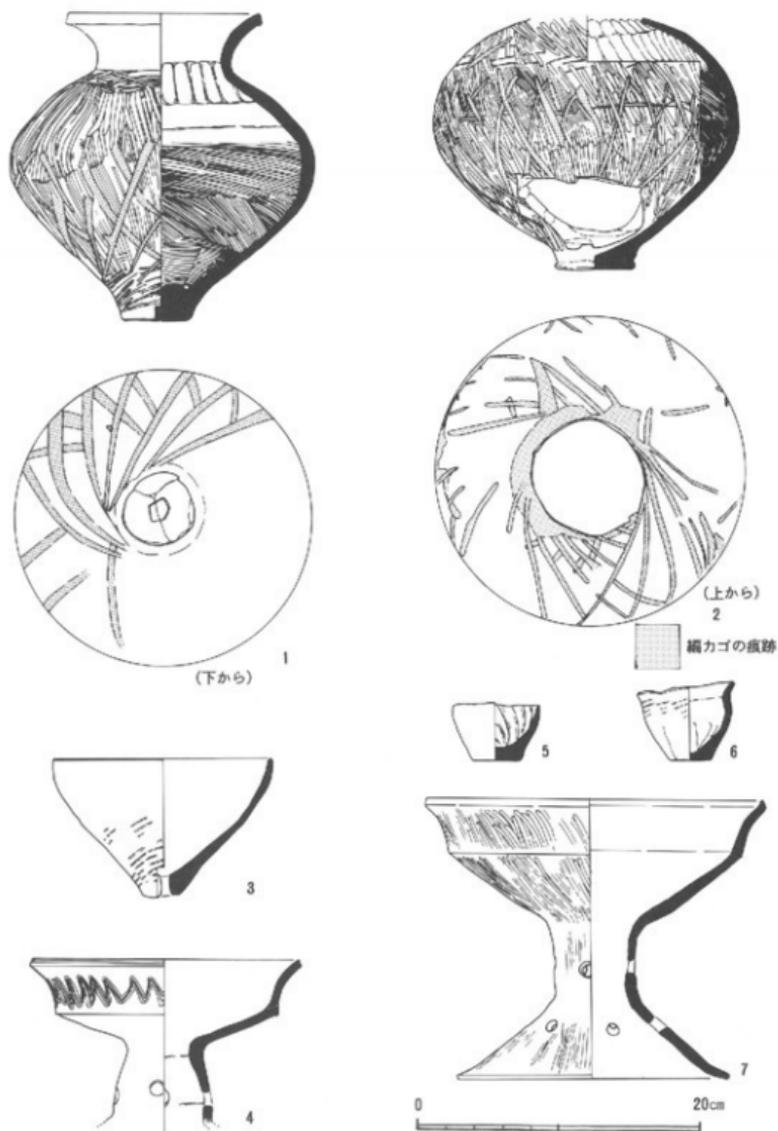


fig. 58 SD601・SX508出土遺物 1：SD601 土器群 2 2：SD601 3～7：SX508

7. ^{しんぽう}新方遺跡 (平松^{ひらまつ}地点)

1. はじめに 調査地は新方遺跡の範囲に含まれる。新方遺跡は現在まで数次にわたり調査が行われており、弥生時代～鎌倉時代の大規模な遺跡であることが判明している。今回の調査は倉庫建設に伴うもので、予定地東側の水路整備によって遺構が破壊される部分について調査を行った。
2. 調査の概要 調査地は、南東に流れる伊川の氾濫原に位置する。現況は水田であり、基本層序は、耕土(第1層)・黄褐色細砂(第2層)・灰色細砂混シルト(第3層)・暗灰色シルト(第4層)・暗茶褐色シルト(第5層)・黄灰色シルト(第6層)となっている。第4層・第5層に遺物が含まれており、第6層上面が遺構面である。
- 調査は、第3層までを重機で掘削し、第4層以下を人力で掘削した。



fig. 59 調査地位置図 S = 1 : 2500

- 検出遺構 調査トレンチ東側は、現存する水路による攪乱を受けており、遺構はトレンチ西側で柱穴2ヵ所・溝3条が残存していた。
- 柱穴 2ヵ所とも、径約30cm、深さ15~20cmで、径10~15cmの柱が存在したと思われる。
- 溝 SD01は幅15~20cm、深さ7cmの溝である。SD02は幅20~25cm、深さ10~15cmで、SD03は最大幅120cm、深さ10cmの溝である。



fig. 60 調査区位置図

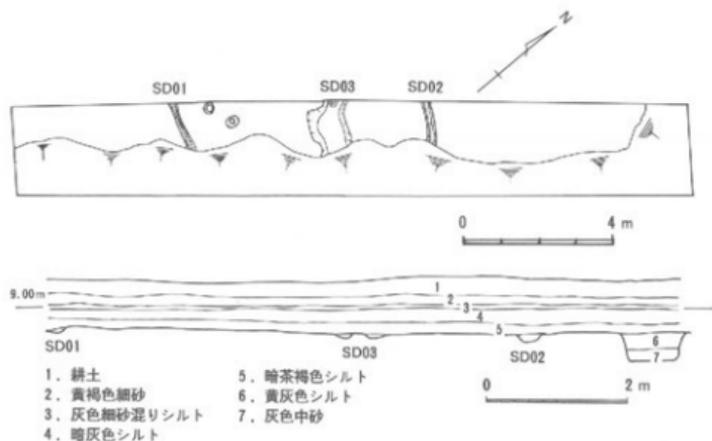


fig. 61 調査区平面・断面図



fig. 62
遺構検出状況
(南から)



fig. 63 トレンチ断面西壁



fig. 64 トレンチ全景（南から）

出土遺物

4はSD03より出土した甕である。1、6は同じく包含層中より出土した甕の口縁部である。2、3は大型の壺の口縁部で、5も壺の口縁部である。7、8は器形不明の底部である。いずれも時期は、弥生時代前期初頭（I様式）である。

3. まとめ

今回は限られた範囲の調査であったため遺跡の性格を明らかにすることはできなかったが、弥生時代前期初頭（I様式）の土器が出土したことにより新方遺跡の起源が当時期まで遡りうることが明らかになった。

また調査地は新方遺跡の中心と考えられる地区からやや離れた所に立地しており、遺構・遺物の存在が希薄であると考えられていたが、今回の調査で遺構・遺物とも良好に残っていることが明らかとなり、当遺跡の規模・範囲を考える上での一資料を提供することになった。

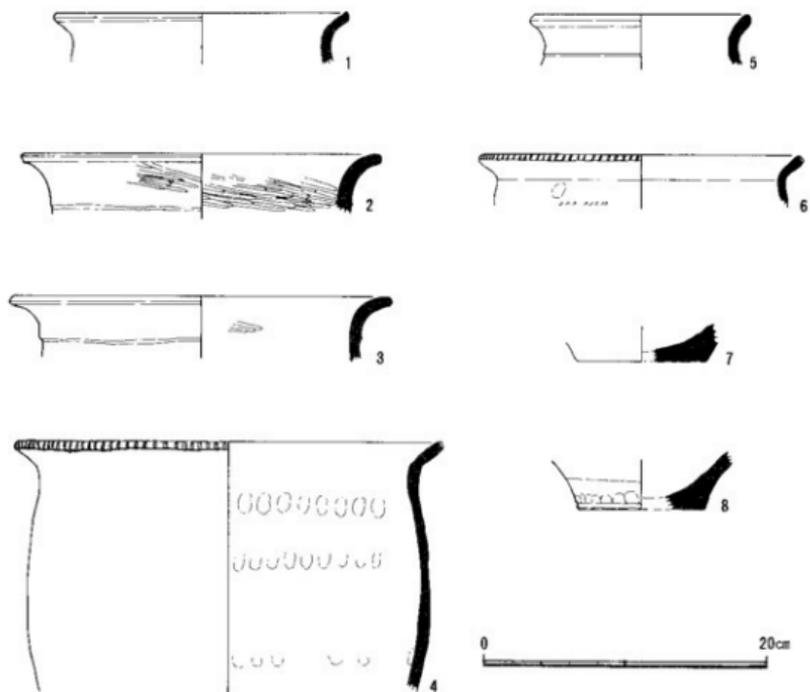


fig. 65 新方遺跡出土土器

8. 狩口台遺跡

1. はじめに 狩口台遺跡は、山田川と狩口川に挟まれた標高40m前後の段丘上に立地する。また、現海岸線から200～300mに位置するため、眼下には明石海峡、淡路島、晴れて眺望の良い日には西に家島群島、東に生駒山系を望むことができる。

遺跡の調査は、市営住宅の解体に伴い昭和54年度に試掘調査を行ったのをはじめ、今日まで計10,000㎡に及んでいる。

今回の調査は、きつね塚古墳の外濠の範囲確定と、その周囲に広がる弥生時代遺構の確認である。



fig. 66 調査地位置図 S=1:5000

2. 調査の概要 調査の範囲はきつね塚古墳の周囲を対象として行った。その結果、現表
狩口台遺跡 土下20~60cmで遺構検出面に達した。弥生時代の生活面は既に削平されて
おり、地山面が遺構検出面であった。市営住宅建設時の基礎・埋設管等による
攪乱も著しく、遺構の保存状態は良好ではなかった。

検出した遺構は竪穴住居址4棟、掘立柱建物址16棟である。

竪穴住居址 竪穴住居址はS B01~04の4棟で、平面形が円形と推定されるもの2棟、
方形と推定されるもの2棟である。

S B01 遺構検出面でわずかに土色が異なり、土器の細片をまじえる部分が存在
したが、竪穴になるような窪みはすでに失われていた。その土色の変化は
部分的にはあるが大きく弧を描いていた。その内側には数多くの柱穴が
存在する。また、その柱穴群の内側には暗灰色シルト（灰を多量に含む）
で充填された土坑が3基存在する。この土坑は先の円弧をなす土色の異なる
部分の中心点にあたり、柱穴群は同心円上に並ぶ。



fig. 67 調査区平面図

したがって、この堅穴住居址は円形で、3度あるいはそれ以上の建て替えが行われたものと推定される。最大規模は推定径11~12mである。

S B 02

S B 01に接して存在する。検出状況はS B 01と同様であるが、中心となる部分に大きな攪乱孔が存在し、すでに中央土坑は失われていた。同心円上に並ぶ柱穴群は数多く存在するが、幾度の建て替えの結果によるものは不明である。またその規模は土色の異なる部分から推定すると、最大で径10~10.5mの円形である。

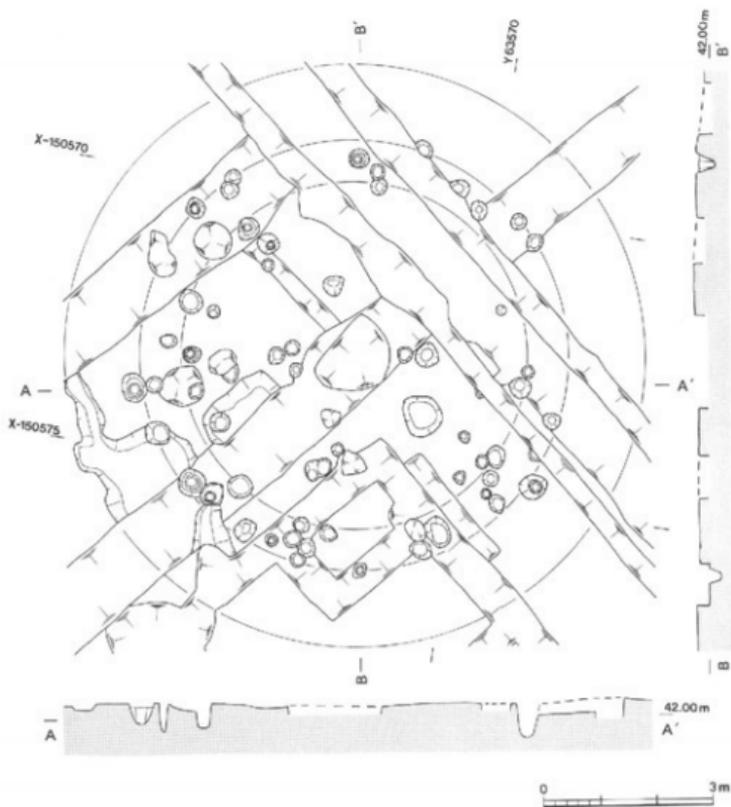


fig. 68 SB01平面・断面図

SB03

きつね塚古墳周濠確認のための第2トレンチにかかるように一辺が出土したため全形を検出するべく拡張したが、攪乱やきつね塚古墳の外濠によってすでに失われている部分が多く、二辺と床面がわずかに残されていたにすぎなかった。その残された二辺から、一辺4.5m前後の方形の竪穴住居址と推定される。また、その内の一辺の外側には、幅約1mをおいて平行に段が存在する。これを屋内高床部とすると、その規模は一辺6m程度になるが確定はできない。わずかに残る床面に柱穴が存在するが、その位置から当竪穴住居址に伴うものかどうかは不明である。

SB04

当竪穴住居址についても削平が著しく、周壁の立ち上がりは残存せず、周壁溝の一部と柱穴を検出したにすぎない。周壁溝は0.2m程度をおいて2条が平行にはしり、幅0.6m程度をおいて、高さ0.15m前後の段になる。

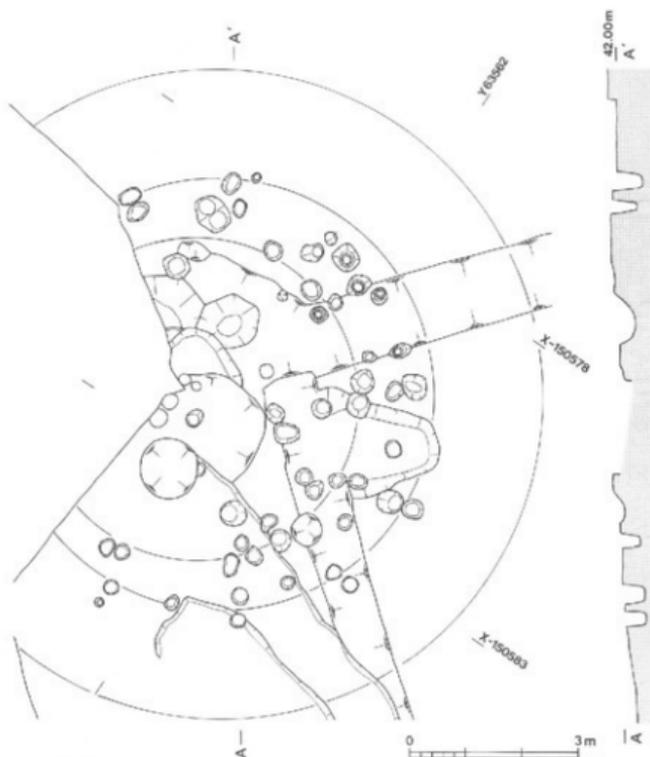


fig. 69 SB02平面・断面図

その段の下に2本ずつ2mの間隔をおいて柱穴が存在する。したがって、屋内高床部をもつ一辺6m前後の方形堅穴住居址が、ほぼ同一場所で建て替えられたものと考えられる。

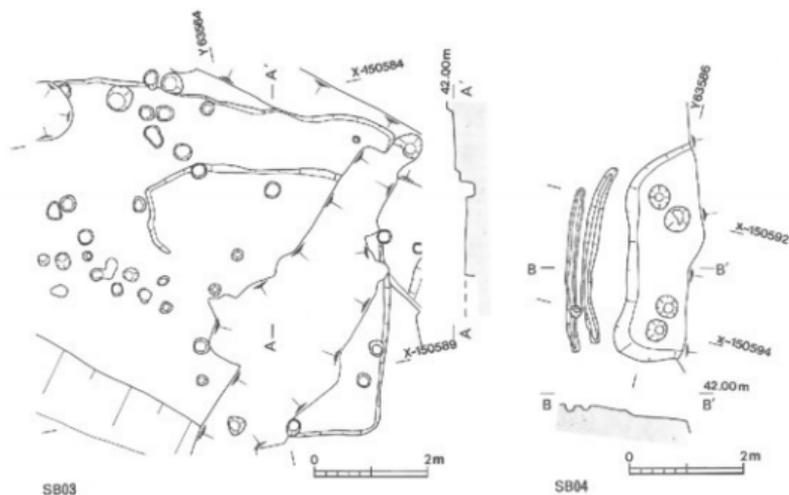


fig.70 SB03・04平面・断面図

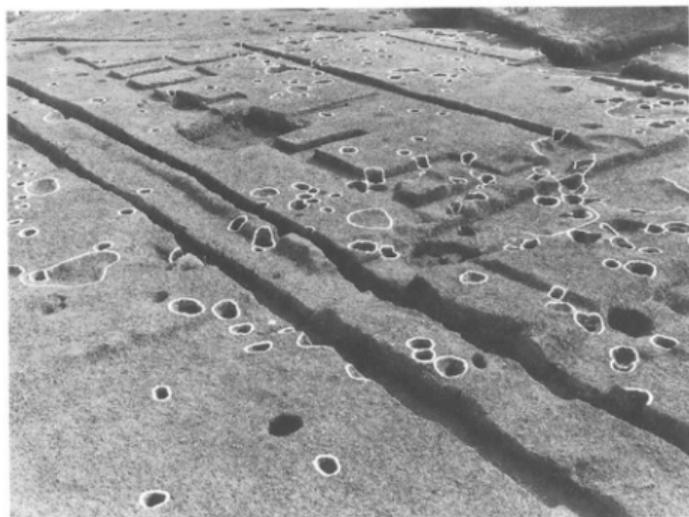


fig.71
調査区東側
遺構全景
(北から)

掘立柱建物址

調査対象地域内で数多くの柱穴を検出したが、現地で掘立柱建物址として確認し得たのは数棟で、大部分は図面上において復元したものである。その結果16棟（SB05～20）となった。以下、その規模を記しておく。

番号	規模(単位m)	番号	規模(単位m)
SB05	1間×4間(2.9×4.5)	SB06	1間×2間(2.5×3.0)
SB07	2間×3間(3.1×3.1)	SB08	1間×4間(2.5×3.7)
SB09	1間×4間(2.4×3.4)	SB10	1間×3間(3.8×4.6)
SB11	1間×2間(1.6×4.2)	SB12	1間×3間(2.0×3.9)
SB13	1間×2間(1.7×2.4)	SB14	1間×1間(1.3×1.7)
SB15	○間×4間(○×4.0)	SB16	○間×3間(○×4.0)
SB17	1間×4間(3.4×3.8)		
SB18	2間×2間以上(3.3×3.7以上)		
SB19	2間×2間以上(2.2×2.4以上)		
SB20	2間×4間(4.2×3.7)		

表1 掘立柱建物址規模一覧表

以上の掘立柱建物址のうち、1間×1間、1間×2間のSB11・13・14のような小型のものは高床で倉庫と考えられる。その他の13棟については土間床のいわゆる平地式住居であろう。なお、SB15・16については柱列についてのみの確認であるが、周辺の削平が著しく対辺が存在した可能性が十二分に考えられるため、掘立柱建物址として扱った。

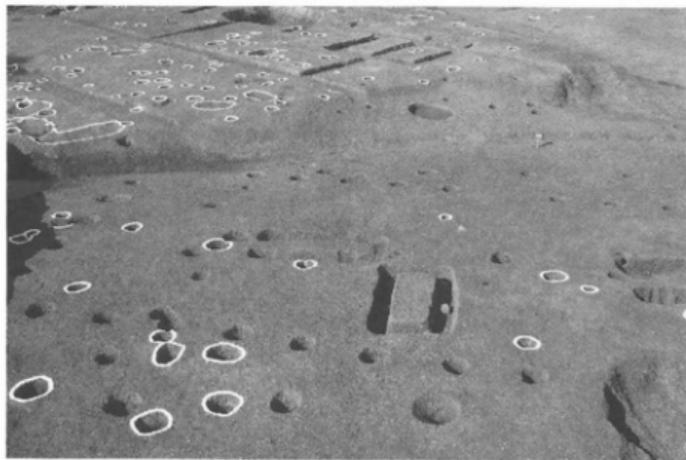


fig.72 調査区東側遺構全景(南から)

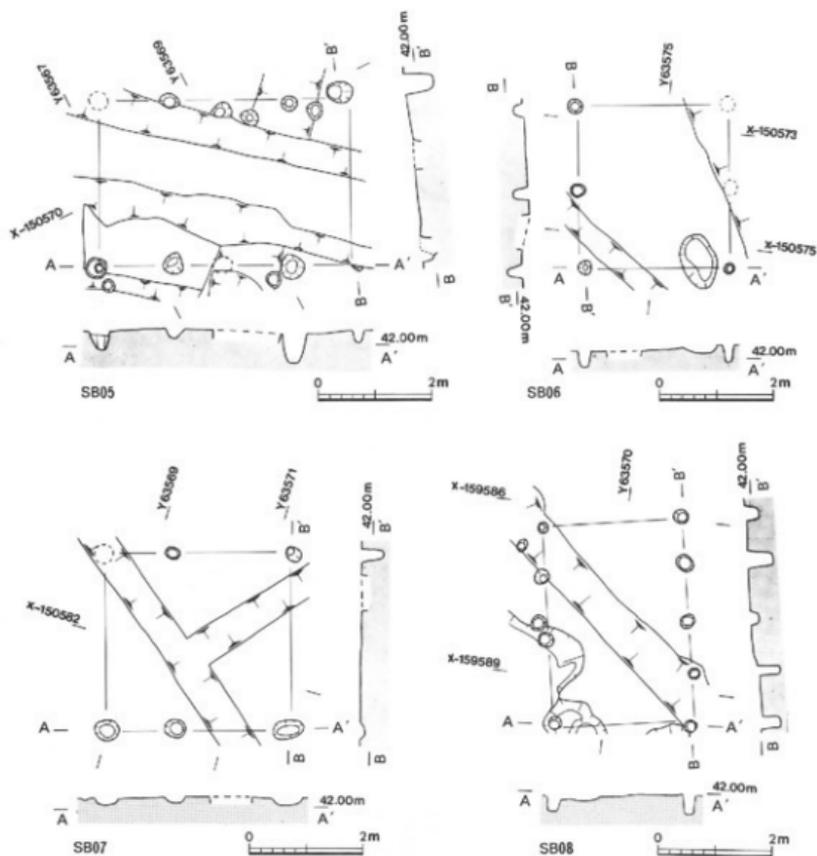
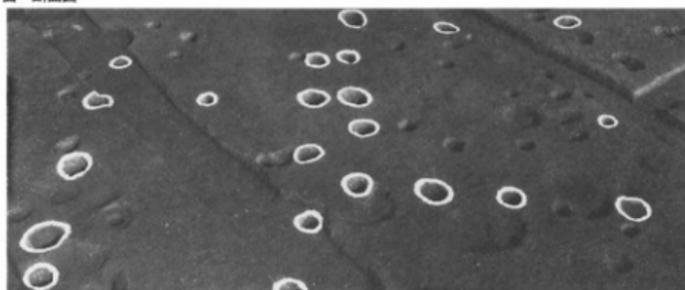


fig. 73 SB05~08平面・断面図

fig. 74
SB08・09全景
(南から)

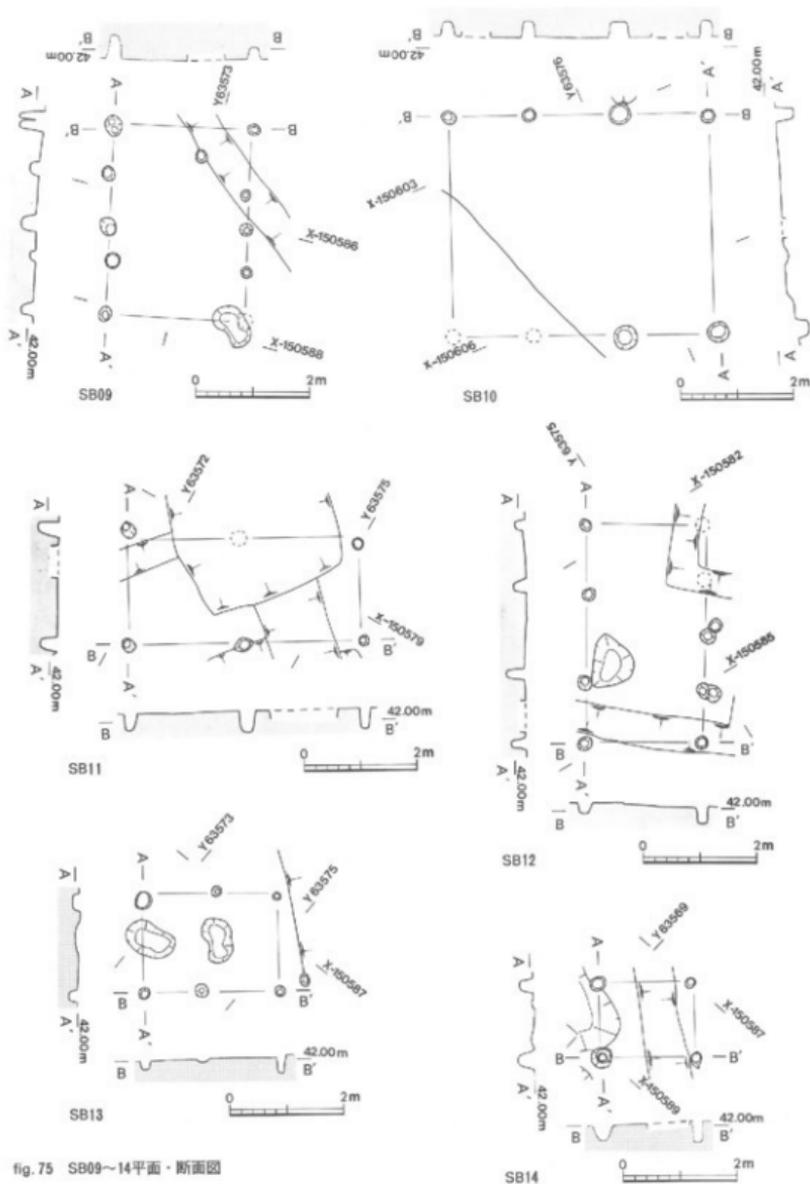


fig. 75 SB09~14平面・断面図

建物の所属時期

竪穴住居址・掘立柱建物址のいずれからも遺物の出土は僅少で時期を確定するのは困難である。しかし、SB01・02の円形竪穴住居址においてはその床面と考えられる土層から中期に所属する土器、しいていえば第Ⅲ様式に属する土器がわずかながら出土している。

SB03・04の方形竪穴住居址についても、遺物の出土は同様であるが、後期(第Ⅴ様式)に属するであろう。これは、当遺跡において今日までに

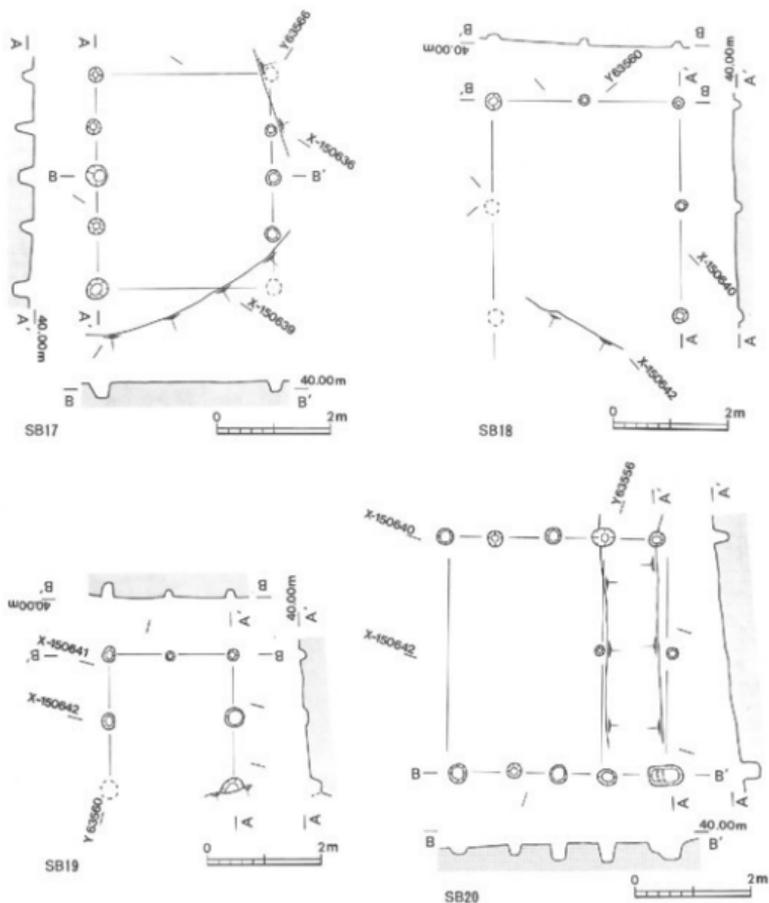


fig. 76 SB17~20平面・断面図

判明している竪穴住居址の形態と所属時期の関係—円形は中期、方形は後期—とも合致するものである。

掘立柱建物址については、SB05・09・12・14の柱穴内から中期に属す土器片が出土している。しかし、これらの土器は小片で、後期に建築されていた可能性も存在するため、時期の確定はしえない。

きつね塚古墳

当古墳の規模・時期等を確認する目的で昭和54・61・63年度の3度にわたって試掘調査を実施しているが、当初調査の結果を追認しているに留まる。今回の調査の目的は、古墳の保存のための範囲確認であるため先に行われた試掘調査のトレンチを再度掘削し、またトレンチの不足していた部分を補い、精度の高い図面におさめることであった。

トレンチは計7本であるが、その内今回新たに設定したトレンチは3本である。幸いにも、いずれのトレンチにおいても外濠と認められる溝を検出した。なお、横穴式石室開口部方向に残材が積まれていたため、表土掘削時に除去したところ、外濠と認められる土層変化があったため、併せて調査を行った。

各トレンチにおいて検出した『溝』は、幅2.1～3.2m、深さ0.2～0.4mである。第4トレンチにおいて、『溝』は途切れるが築造当時のもの—陸橋部—であるのか、後の削平による結果であるのか断定はできない。第7トレンチでは、『溝』に直行するように幅0.6m、深さ0.1mの溝がはしる。この溝の底面は、古墳側が高く、外へ低く傾斜している。



fig. 77
きつね塚古墳
西側外堀と石室
主軸線上の溝
(西から)

古墳開口部方向の調査部分では、過去の粘土採掘により大部分の遺構面は失われているが、『溝』は2ヵ所計7.5mを検出した。その規模は第1～7トレンチで検出したものと大差ない。

また、石室主軸の延長線上で幅0.7m、深さ0.5mの溝を検出しているこの溝は、内濠と推定される『溝』の底面よりわずかに低いところから、外方へレベルを下げながらのびている。内濠と推定される『溝』より内側すなわち石室内へものびていたかどうかは、今回の調査では確認し得ていない。また、かつての試掘時その部分は床面まで検出していないため不明である。

したがって、この溝が石室内の排水溝なのか、内濠・外濠の排水溝なのか確定はできない。しかし、この部分から第7トレンチにかけてのあたりが最も低く、しかも第7トレンチにおいて検出した溝も考えあわせれば、内濠・外濠の排水溝である可能性が高い。また、現状においてではあるがこの付近のみ湧水が認められる点も指摘しておきたい。

外濠と認められる各トレンチの『溝』をつなぎ合わせると、径52mの正円になり、またその円弧上に調査団（代表 真野修）によって調査・検出された『溝』も重なり、外濠と認めてよいだろう。



fig. 78 狩口台遺跡から淡路島を望む（北東から）

3. まとめ

これまでの調査で、当遺跡の弥生時代の遺構の大部分は知られていたが今回の調査では掘立柱建物址の棟数の多さが確認された。市内における弥生時代の掘立柱建物址の顕著な例は、当遺跡の北東方向約1.2kmの丘陵上に立地する舞子・東石ヶ谷遺跡において確認されているのみである。

遺跡の開始は第Ⅱ様式にあり、第Ⅲ・Ⅴ様式の遺構・遺物も確認されている。第Ⅳ様式の遺構・遺物については未確認である（調査団の調査範囲も含め）。先の舞子・東石ヶ谷遺跡においては、その時期の遺構・遺物が知られており、掘立柱建物址との関連においても、両遺跡の関係が目される。また、両遺跡の間にある大歳山遺跡は第Ⅰ様式に開始し、中期・後期の遺物も確認されているが、第Ⅳ様式の遺物は今日まで未確認で、この3遺跡は有機的に関連していたものと想定される。

きつね塚古墳の外濠は、3次にわたる試掘調査で想定されていたものと大差ない状況が判明したが、その直径が52mであること、全周するであろうこと、排水のためと推定される溝が存在すること等が明らかになった。

きつね塚古墳の存在する台地上には、この他に古墳の存在が知られていない。かつては存在したであろうものが、後世の削平によって消失したものと見る考え方が大勢を占めていたが、台地全域を調査しおえた今、全くその可能性はなくなった。したがって、きつね塚古墳は単独墳であることが明白になった。二重濠を有する単独墳の持つ意味は、今にわかには説明できないが、大歳山古墳群・多聞群集墳などとの関連も考え合わせ、今後明らかにしていかなければならない課題であろう。



fig. 79
きつね塚古墳
全景（北西から）

9. 垂水日向遺跡（第3次調査）

1. はじめに 垂水日向遺跡は福田川右岸の河口近くの沖積地に立地する遺跡で、西方約1kmには、兵庫県下最大の前方後円墳である五色塚古墳が位置している。これまで福田川流域では、遺跡の存在が知られていなかったが、昭和63年度の調査で初めて垂水日向遺跡の存在が明らかとなり、第1次調査地点では縄文時代中期～晩期、古墳時代前期～後期、平安時代後半～鎌倉時代前半の遺跡であることが判明している。

今回の調査は、道路拡幅工事に先立つもので、神戸市都市計画局の委託を受けて幅約6m、長さ36mについて調査を実施した。

2. 調査の概要 発掘調査の結果、遺構面が2面確認された。

第1遺構面

第1遺構面は明黄色シルト混じり極細砂を基盤層とする古墳時代前期初めと平安時代後期の遺構面である。調査区東半を南へ流れる近現代の水路により遺構面の大半は削平されていた。北西部に残存していた遺構面では堅穴住居址様の落ち込みを1基検出し、南西隅ではピット1基を確認した。



fig. 80 調査地位置図 S = 1 : 2500

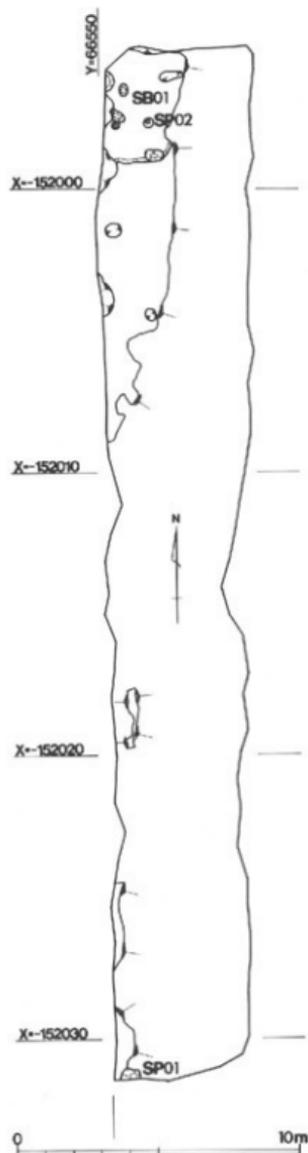


fig. 81 第1遺構面平面図

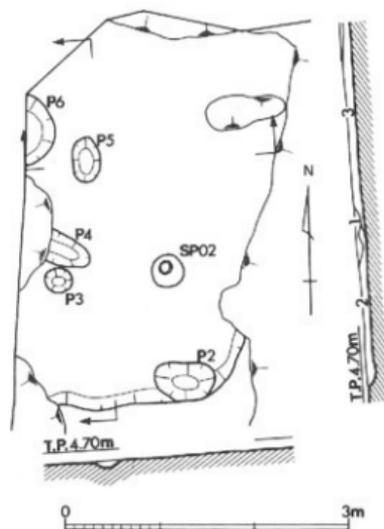


fig. 82 SB01平面・断面図

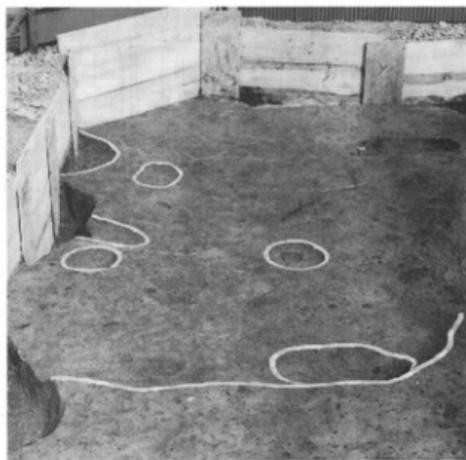


fig. 83 SB01全景 (南から)

S B 01 S B 01は、方形竪穴住居址の南側周壁の一部と浅いビットが5基確認できたが、支柱穴は確認できていない。周壁高は8cmで、周壁溝は存在しない。床面の遺存状態から南北長は4.6mまで確認できる。

出土遺物には、床面に密着しない若干の土師器がある。

S P 01 S P 01は直径45cm、深さ25cmの播鉢形のビットである。埋土からは土師器の小片が出土している。

S P 02 S P 02は直径34cm、深さ6cmの掘形に、直径13cmが柱痕が検出された。掘形内から平安時代後期と考えられる須恵器境の小片が出土している。

第2遺構面

人為的な遺構は全く確認できず、旧福田川の氾濫によってもたらされた厚さ約2mの砂礫の堆積が確認できた。この灰色砂礫は大型の流木を多く含むことから、かなりの水量によって運ばれたものと推定でき、灰色砂礫を除去した褐灰色シルトの底面は起伏が顕著である。

流木はいずれも底面から浮いた状態で確認しており、その分布は調査区の北半に集中する傾向が認められる。比較的大型の流木の主軸方向に着目すると、北半のものは南南西を指向し、南半のものは南南東を指向するようにみえることから、調査区内に緩やかな円弧を描く水流があったと考えられる。流木で最大級のもは、長さ11.2m、直径21cmや長さ9.2m、直径42cmである。

縄文時代中期から後期にかけての土器や石器はこれらの流木とともに運ばれてきたものである。大部分の縄文土器は破片であり、器形が判るものは少ない。



fig. 84
灰色砂礫内
出土の縄文土器

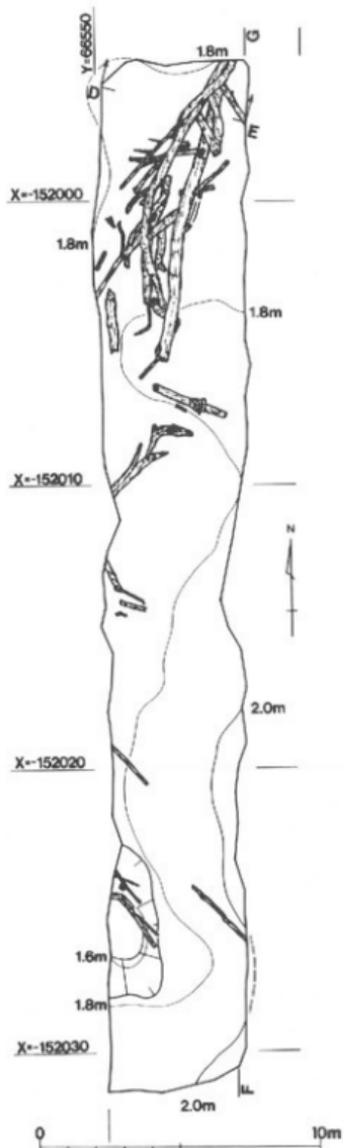


fig. 85 第2遺構面平面図



fig. 86 第2遺構面北半流木検出状況(北から)



fig. 87 第1～2遺構面土層断面(南から)

7区断面トレンチ 灰色砂礫の除去が完了した段階で、調査区の南半の東壁際で、鬼界アカホヤ火山灰純降下層が確認できた。そのため、さらに下層の状況を確認するために設定した2×3mのトレンチである。

T.P. 0.85mまで掘削し、12層に分けられる土層を確認したが、遺構面となる基盤層や土器等の埋蔵文化財は確認できていない。

なお、トレンチ南壁の7層に残存した木片について、放射性炭素年代測定 (^{14}C)の分析を実施し、6340±110y. B.P. (Gak-15403)のデータを得ており、従来から知られる鬼界アカホヤ火山灰の降下時期よりやや遡る年代数値を得ている。

3. まとめ

垂水日向遺跡第3次調査では、以下の3点の重要な成果が収められた。

- ①鬼界アカホヤ火山灰の純降下層の確認
- ②縄文時代中期から後期にかけての縄文土器の出土
- ③古墳時代前期初頭(庄内期)の集落の確認

火山灰

第1に、いまから約6300年前に降下したとされる鬼界アカホヤ火山灰純降下層の確認は、瀬戸内海沿岸においてこれまで検出例が少なく、多くを語ることはできない。垂水日向遺跡では、第3次調査区内で確認できた土層の年代が推定できるだけでなく、第1次調査地点における自然科学的分析の成果を効果的に補完する資料となったことはいままでもない。さらに、自然環境の復元にも大きく寄与するものと思われる。



fig. 88 7区断面トレンチ土層断面 (北西から)

縄文土器

第2に、中期後半から後期前葉にかけてのまとまった縄文土器の資料を得ることができた。第1次調査地点でも同一層序である灰色砂礫層から中期～晩期の縄文土器が散発的に出土しており、両地点の資料をあわせると、かなりまとまった資料となる。さらに、これらの縄文土器は磨滅の程度に差があるものの、さほど距離の離れていない場所（段丘面?）に遺跡の存在を想定させてくれる点でも極めて重要といえる。

庄内期の集落

第3の古墳時代初頭（庄内期）の集落の立地は、第1次調査地点の水溜め遺構の検出でも予想されるものであったが、今回の竪穴住居址の確認はこれを確実にする資料となった。第2次調査地点では、当該期ならびに古墳時代後期初めの集落が確認されており、第4次調査地点でも6世紀後半の土坑が確認された。古墳時代の集落がかなり広範囲にわたって営まれたものと推定できる。

以上のように、第3次調査の成果は、今後の垂水日向遺跡の評価をめぐる多くの問題を提示しているのである。

なお、この調査については平成3年度に報告書を刊行している。

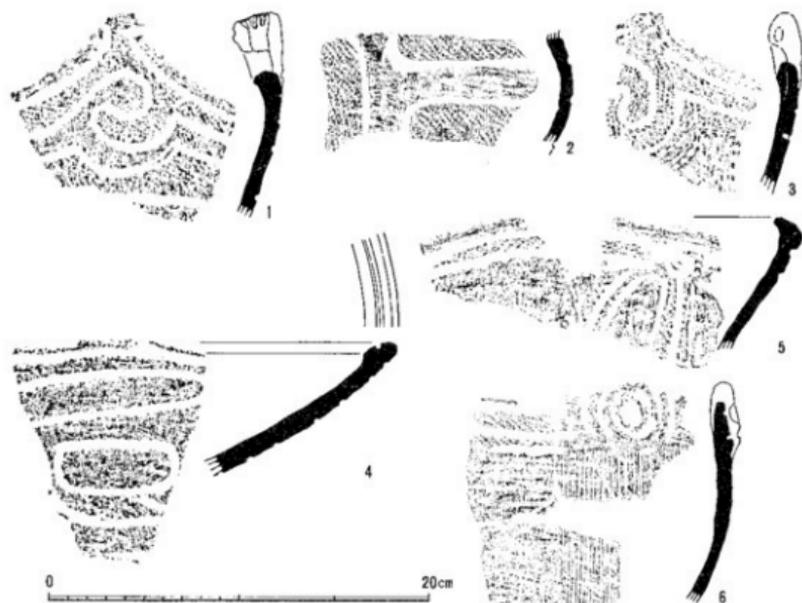


fig. 89 垂水日向遺跡（第3次調査）縄文時代後期の土器

10. 垂水日向遺跡（第4次調査）

1. はじめに 試掘調査

神戸市垂水区陸ノ町1丁目1, 2番地の試掘調査を昭和63年10月13日と平成元年11月20日に実施した結果、中世の遺物包含層と遺構面が検出され、さらに下層から、遺構面の可能性のある土壌化した層が確認された。

また、この隣地である陸ノ町1丁目30番地においてもほぼ同時期に店舗兼個人住宅の建て替え工事が計画されたため、埋蔵文化財発掘調査は2つの敷地を同時に、垂水日向遺跡第4次調査として行うことにした。

調査範囲は、遺物包含層及び遺構面が建物の基礎等の工事によって影響を受ける235㎡とし、下層に関してはエレベータービット、杭基礎の入る60㎡のみを調査することとした。



fig.90 調査地位置図 S=1:2500

2. 調査の概要

基本層序

調査は建物基礎の工事によって影響をうける深度までとしたため、大部分は、中世・古墳時代の遺構面までであった。この遺構面のベースとなるのは、黄白灰色シルト質粘土（第7層）で、この上面のレベルは調査区北西隅が最も高く標高5.8 mで、南東に向かってわずかに下がっており、最低点は5.5 mである。この層以下は、西半深掘部とこの部分の断ち割り調査のみであり、調査区全体の層序は判らない。調査地の基本層序は以下のとおりである。

- 第1層 近・現代盛土層
- 第2～5層 近世～近代耕土・床土
- 第6層 中世耕土
- 第7層 黄白灰色シルト質粘土（上面が古墳時代・中世遺構面、一度の洪水による堆積）
- 第8層 黒褐色粘土（後背湿地）
- 第9～12層 乳白色系粘質シルト（土壌化した層を2枚はさむ）
- 第13～17層 黄白色系シルト（第16層から軽石、数枚の薄い植物遺体層をはさむ）
- 第18～36層 青灰色系粘土～細砂（湿地の堆積土、貝等の生息痕跡4面存在、第27層から軽石、26、27層アカホヤ火山灰多し）

平安時代の 遺構・遺物

S B 01

S B 01は、南北5間、東西1間が検出されたが、北側と西側は調査区外に延びる可能性のある掘立柱建物址である。建物の規模は南北10.8m、東S B 01西2.4mで、建物の南北方向はN 2° Eである。SB01-SP10はSB02-

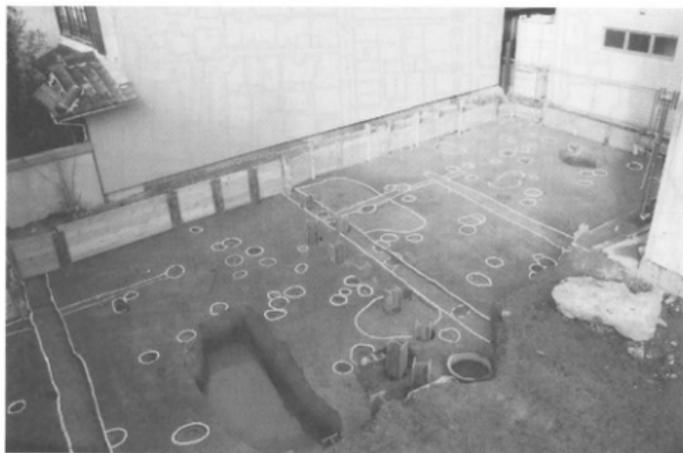


fig. 91
調査地西半全景
(南東から)

SP06に切られている。SB01の柱穴からは12世紀前半の遺物が割れままとまって出土した。特にSB01-SP01、-SP07の柱痕には多くの土器が埋められていた。

SB02

SB02は、南北2間、東西3間が検出されたが、北側と東西側は調査区外に延びる可能性のある掘立柱建物址である。検出された建物の規模は南北4.9m、東西7.1mで、建物の南北方向は真北である。柱穴のうちSB02-SP06はSB01-SP10とSD01を切っている。

また、SB02-SP08は、柱痕内に河原石が詰まっており、柱根を抜き取り補修したと考えられる。SB02の柱穴からは、12世紀後半～13世紀の遺物が出土している。

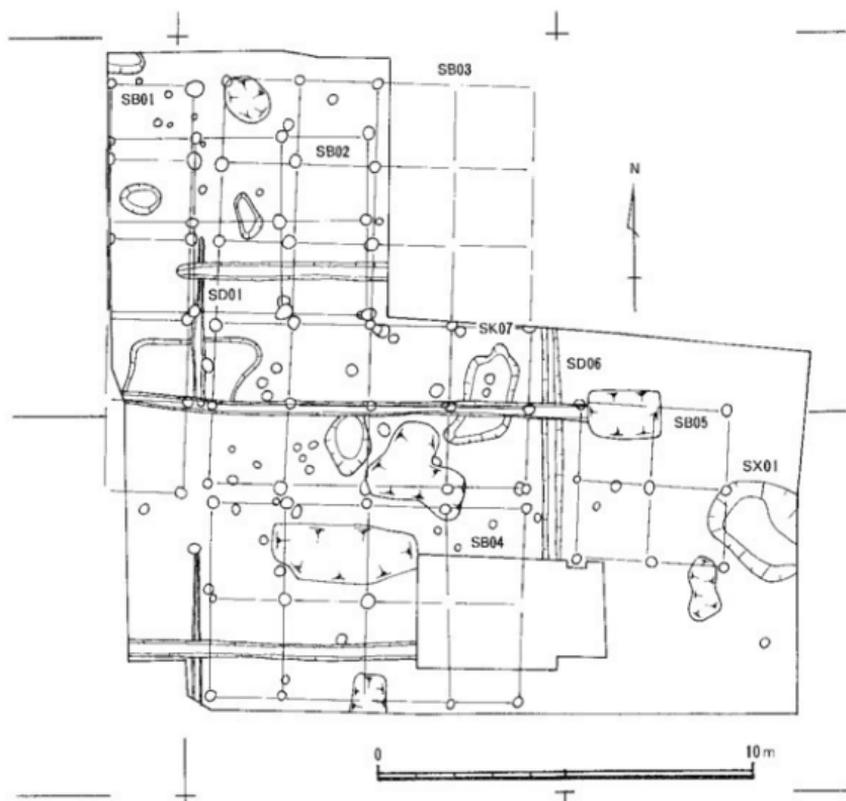


fig. 92 調査地平面図

- SB03** SB03は、南北5間、東西4間が検出されたが、北側については調査区外に広がる可能性がある掘立柱建物址である。検出された建物の規模は、南北10.8m、東西8.6mで、建物の南北方向はN2°Eである。
SB03の柱穴からは12世紀前半の遺物が出土している。
- SD01** SD01はSB03の西側で、SB01との間にある南北方向の溝である。幅は12~28cm、深さは3cmで、断面の形状は浅いU字形である。底のレベルは南が低い。埋土には炭が多く混入していた。
- SD06** SD06はSB03の東側で、SB05との間にある南北方向の溝である。幅は48cm、深さは15cmで、断面の形状は逆台形形で、底のレベルは南が低い。
以上2条の溝はSB03と方向を同じくし、SB03の東西一番外側の柱列と間隔を等しく保つので、SB03に伴う溝と考えられる。
- SK07** SK07は256×136cm、深さ5cmの不定形の土坑で、底はほぼ平らである。SB03の南東隅に位置し、SB03-SP23を避けて造られているので、SB03に伴う土坑と考えられる。
- SB04** SB04は、南北2間、東西4間が検出されたが、南側は調査区外に広がっている可能性がある掘立柱建物址である。検出された建物の規模は南北5.4m、東西8.3mである。建物の南北方向はN2°Eである。
またSB04-SP07の掘形底には須恵器の壺の半分だけが据えられており、

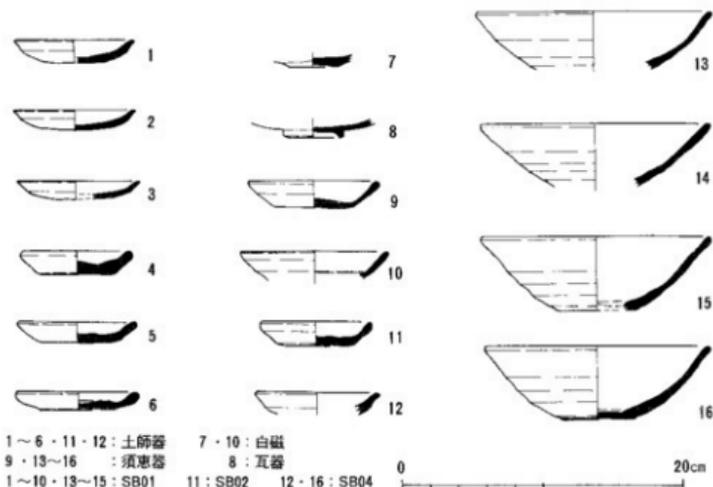


fig. 93 SB01・02・04出土遺物

建物を建てる際の地鎮に係わるものと考えられる。

出土遺物から12世紀初頭～前半の建物と考えられる。

S B 05

S B 05は、南北2間、東西2間が検出されたが、北側は調査区外に広がる可能性がある掘立柱建物址である。南側は後世の耕地造成による削平を受けている可能性がある。

検出された建物の規模は、南北4.3m、東西4.1mである。建物の南北方向はN2°Eである。

古墳時代の
遺構・遺物

S X 01

S X 01は、220×292cmの不定形の土坑である。深さ50cmで、底は楕円形をしている。南西側は調査区外に出ているため、溝状に延びていく可能性もある。遺物は土師器の短頸壺と須恵器の杯の小片が出土しているのみである。これらの遺物は6世紀後半に属するものと考えられる。

3. まとめ

S B 01・03・04

S B 01、03、04の廃絶時期は、出土遺物により12世紀前半のほぼ同時期である。このことから、3棟が同時に併存していたと考えられる。ところが、S B 01と03の間とS B 03と04の間はそれぞれ60～70cm、50cmと非常に接近しており、別棟だとすれば不自然である。この3棟は建て増して拡張された同一棟の可能性もある。そのことは、S B 01、03、04には、切り合い関係がないこと。S B 01と03、S B 03と04はそれぞれ棟方向が同じで、

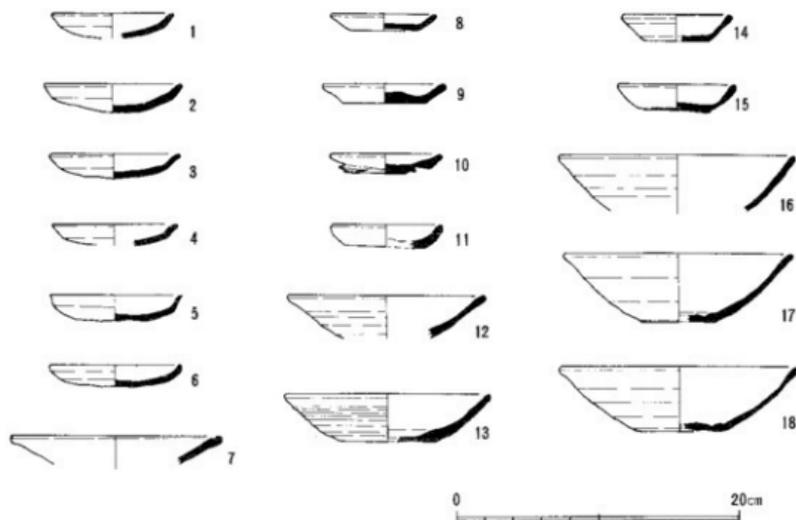


fig. 94 SB03出土遺物 1～13: 土師器 14～18 須恵器

それぞれの建物の間隔が一定であること。S B01と03の南北方向の柱間距離、S B03と04の東西方向の柱間距離がそれぞれ等しいこと。S B01と03の南辺、S B03と04の東西両側の辺が揃っていること。S B03と04との間に雨落ち溝がないこと。S B03東側の溝S D06はS B04の東まで続いていること。S B01とS B03の間にある溝S D01はS D06に比べ非常に浅く形状も違い、埋土には炭が多く含まれていたこと。以上のような理由から考え合わせても同一棟の可能性はある。

この3棟の建てられた時期であるが、S B03、04の柱穴の掘形から遺物が出土しており、その時期は11世紀末～12世紀初頭である。S B01の掘形からは小さな破片しか出ておらず確実なことはわからないが、12世紀初頭まで遡る時期のものはないようである。S B01、03、04の3棟は11世紀末～12世紀初頭頃に、東側のS B03とS B04が同時または相前後して建てられ、その後S B01が増築され、12世紀前半に同時に廃絶したと考えられる。

S B02

S B02はS B01の柱穴とS D01を切っていることから、S B01、03、04よりは後出で、その上限は12世紀中頃と思われ、その存続時期の下限は中世耕土層から出土した遺物のなかで、一番時期の下る13世紀中頃までと考えられる。このことはS B01、03、04の棟方向が真北からやや東に振っているのに対し、S B02は真北であることから、その時期差が窺える。

S B05

S B05からは時期の判る遺物が出土していないため、確実なことは判らないが、その棟方向がS B01、03、04と同じであることからそれらの建物と同時期と考えられる。またS B05はS B01、03、04と比べ、その柱穴の規模が小さいことから、S B01、03、04とは性格が違って、付属屋のようなものと考えられる。

以上のように今回検出した掘立柱建物址はS B01、03、04を同一棟と考えると、南北16.5m以上、東西11.5m以上の大きなものとなり、別棟としても当時の地方の村落の建物群としては大きな部類に入るものである。また、同時に付属屋を持ち、出土遺物の中にも出土例の少ない中国製陶器の盤や有力層の遊具である碁石または双六の駒と考えられる物などが出土したことから、村落内でも有力な階層の人の建物と思われる。また、その廃絶時期は12世紀前半ごろと考えられ、平安時代の東大寺領荘園「垂水庄」の経営から東大寺が撤退する時期とはほぼ合致することや、第1次調査地点で多く出土した土鍾・蛸壺などの漁労具や製塩土器などの生産具が全く出土していないことなどから、直接生業に携わる人々の屋敷ではなく、この荘園の経営に係わる建物の可能性も考えられる。

なお、この調査については、平成3年度に報告書を刊行している。

11. 戎町遺跡 (第6次調査)

1. はじめに

山陽電鉄の西台・須磨間は、地表式軌道で山側・浜側の地域の分割や交通の円滑な流れの支障となっている。この現状を改善するため都市整備の一貫として神戸市・山陽電鉄・神戸高速鉄道が協力して軌道敷の地下化を図り都市環境の整備を行うことが計画された。

計画域の山陽電鉄板宿駅周辺には遺跡の存在することが予想されたため、昭和63年度に試掘調査を行い遺跡の存在することが明らかとなった。

調査着手時の状況は、交通量の多い地区であり、また駅前の乗降客が多く、工事作業場の確保等の事情から調査対象地の西側部分や調査対象地の一部は既に掘削が行われ、基礎的な工事を完了していた。このため調査対象地に存在したであろう第1遺構面から第6遺構面の大部分は、損なわれていた。

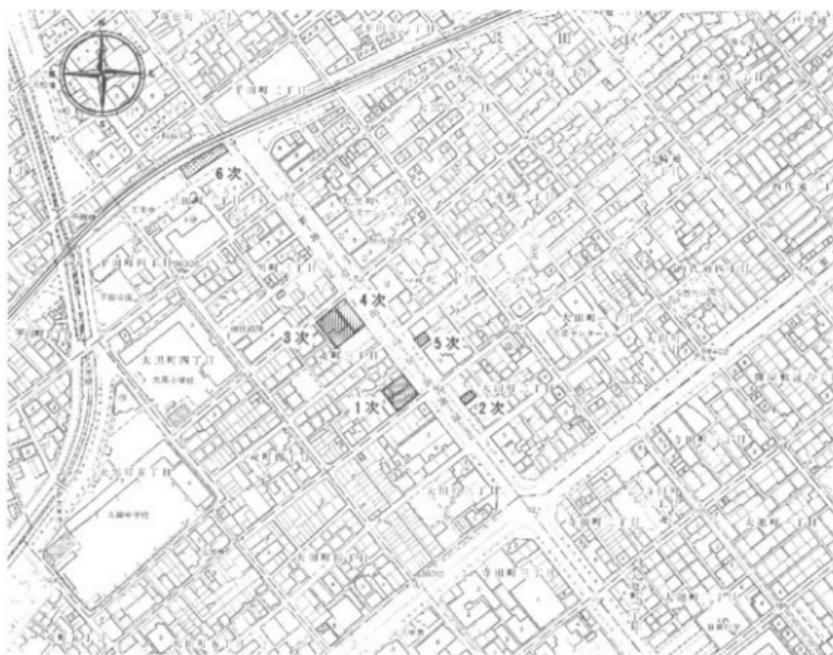


fig. 95 調査地位位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

調査方法

調査対象地の地表は既に駅前の街頭となっているため調査は覆工板の下で行うこととなった。しかしながら採光と換気の必要性から可能な限り覆工板を剥がし調査を行った。

調査対象地は東西約40m・南北約25mの矩形である。調査区の区画割は、覆工板支柱列によって北・中・南の3区画に分割し、さらにそれぞれを約10mごとに東より1区から4区に分け調査を行った。また区画割とはべつに基準点測量を行い、これにより調査地の実測を行った。調査は残土搬出の関係から北地区の一部分と南地区より始めた。残土はベルトコンベアーと小型バックホーを用いて場内運搬を行い、調査地の南東隅に仮置きして残土の状況に応じて大型バックホーにより場外に搬出を行った。



fig. 96
作業風景

遺構面の状況

遺構面は第1～8遺構面を検出した。各遺構面の時期は、第1・2遺構面は中世（14世紀前後）、第3・4遺構面は弥生時代後期、第5・6遺構面は弥生時代中期、第7遺構面は弥生時代前期～中期、第8遺構面は縄文時代晩期である。第1～第6遺構面が存在するのは北辺部（以下北法面と呼称する）と東辺（以下東南法面と呼称）の一部であり、調査対象地の約20%に満たない面積であった。

基本層序

基本層序として捉え得る部分は、前述したように北法面の第1遺構面から残存する箇所しか無く非常に限定されていた。区画割でいえば北1区にあたる北法面で観察された層序について述べる。

層序は、淡灰色泥砂・黄色泥砂・灰褐色泥砂(中世)、褐色砂泥(弥生時代後期)、灰色砂泥(弥生時代中期)、青灰色泥砂(弥生時代前期)、黒色粘質砂泥(縄文時代晩期)となる。

上記のように中世には、遺構面が2枚存在し、弥生時代中期の上面には灰白色細砂があり、足跡が検出された。弥生時代前期の青灰色泥砂は下層になるほど砂の粒子は粗くなる。

この層序を基準として、自然科学分野の諸分析を行った。

第1遺構面

ビット7基、溝状遺構1条、落ち込み状遺構1基が検出された。調査遺構面は調査対象地の北辺に長さ約25m・幅約2~3mで残された法面の上面となる部分である。柱穴と思われるものが検出されたが、前記の状況のため建物等としてのまとまりを判断するに至らなかった。落ち込み状遺構は浅く、規模も不明でその性格は判断できなかった。

S P101は、直径0.45m、深さ0.3m、柱痕径0.2mである。掘形底面には長径0.3m、短径0.15mの河原石が平らな面を上にして据えられていた。河原石上には焼土塊と須恵器甕片が検出された。S P103は、直径0.55m、深さ0.35m、柱痕径0.2mである。掘形内より土師器碗が出土した。他のビットは柱穴と思われるものを含めて5基は、直径0.2~0.3m、深さ0.2~0.4mの規模である。

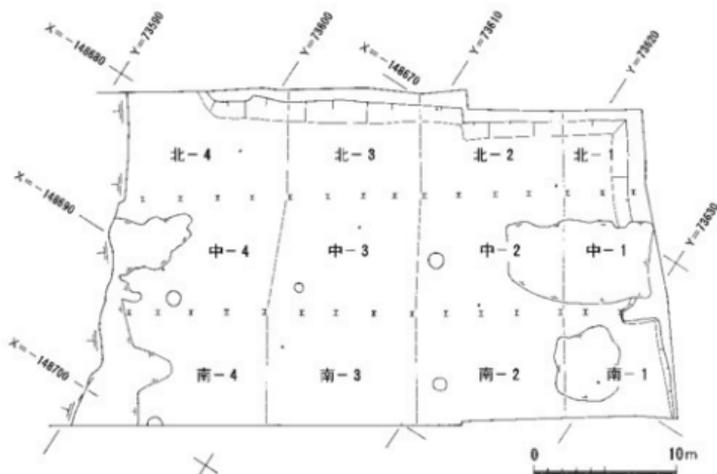


fig. 97 調査区地区図

北一I区でSD101が検出された。幅7m以上、深さ2.9mの規模の溝状遺構である。西肩は、第1遺構面の包含層（淡灰色泥砂）から切り込んでおり、今回の調査で最も新しい遺構である。

西肩は、西から東南方向に検出される。中一I区では大きな攪乱を受けているため流れの方向は明確ではないが、攪乱の底部のわずかに残されたSD101の堆積土から、北西から東南方向に流れる溝状遺構と考えられる。東肩は調査区外となる。

遺構の両肩には杭が打ち込まれている。また上流から流されたと思われる杭が遺構内から出土した。杭の総数は約40本である。SD101の最深部では、据えた井戸枠状木製品が割れた状態で出土した。また井戸枠状木製品の周囲には杭が数本打たれている。この井戸枠状木製品検出面には掘形は観察されなかった。

井戸枠状木製品は縦に4つの破片に割れており、破片の割れ口には割れ口をふさぐように板状木製品が打ち込まれている。現状でも湧水があるため、井戸としての機能も考えられるが、その断片が接合せず、にわかに判じ難い。

井戸枠状木製品は内外面に手斧痕が観察される。上部は折れたような状態で、下端部は切断面となり、一段厚くなっている。

SD101からの上記以外の出土遺物は、須恵器、土師器、陶器、磁器、漆器、木製品、自然木、種子類、貝類、骨などである。漆器は破片ではあ



fig. 98
SD101
井戸枠状
木製品出土状況
(南から)

るが、5個体出土している。市内では比較的まとまって出土したといえる。木製品では曲物、折敷、栓、円盤状木製品、板状木製品などである。種類ではマツボックリ、ドングリなどがある。これらの遺物の中でも注目すべきものは、元代末から明代初期の染付け碗である。市内では最初の例であろう。染付け碗の時期は、他の出土遺物とも比較しても問題ないと考えている。東南法面では遺構は検出されなかった。

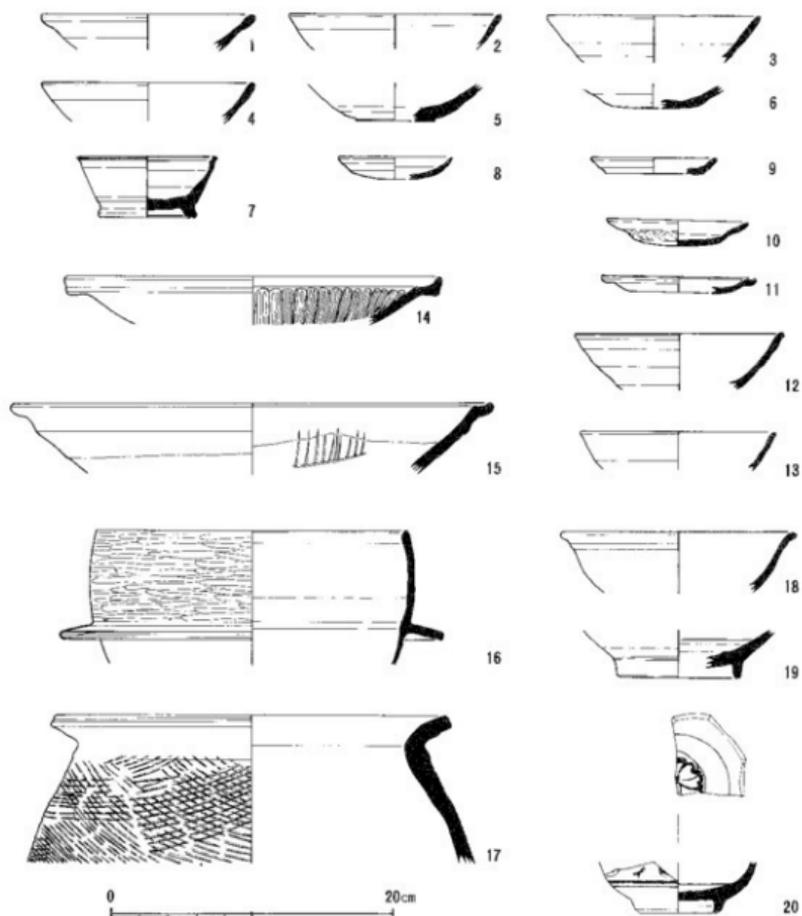


fig. 99 第1遺構面出土土器 1~9: 遺物包含層 10~13: 遺構面 14~20: SD101

第2遺構面

ビット10基が検出されたが、第1遺構面と同様にまとまりとしては捉えきれない。10基のうち4基には柱痕が検出された。ビットの規模は2種類あり、直径0.2m程、深さ0.2m程のものと直径0.3~0.4m、深さ0.3m程の規模をもつものである。

第2遺構面の遺物包含層は、第1遺構面のベース土であるが、少量の土師器、須恵器が出土した。また各ビットからの出土遺物もわずかであった。東南法面では第1遺構面と同様に遺構は検出されなかった。

第3遺構面

基本層序でもふれたが、褐色砂泥面の直上に灰白色泥砂が覆う。北法面も東南法面でも同様に観察された。灰白色泥砂を削除すると東南法面では足跡が検出された。北法面では明確な足跡は検出されなかった。また出土遺物は全くなかった。

第4遺構面

土坑1基と落ち込み状遺構2基が検出された。SK401は、部分的に高く残った北-4区で検出され、直径1.7m、深さ1.0mの土坑である。断面は、検出面では巾着袋状の形態をなす。土坑内より甕形土器、高杯、火を受けた石、桃の種子が出土した。

SK401は、北法面（北-3区）で検出された深さ0.1mの不整形な落ち込み状遺構である。河原石と甕形土器が出土した。

SK402も、北法面（北-2区）で検出された深さ0.16mの落ち込み状遺構である。西側の肩は不明瞭であった。完形の壺形土器が出土した。



fig. 100
SK401
土器出土状況

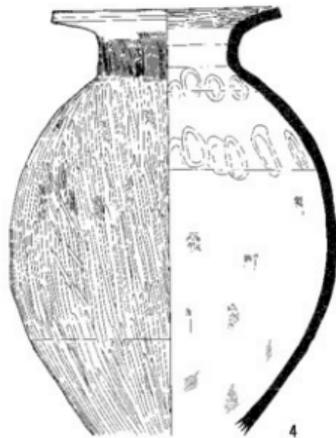
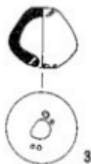
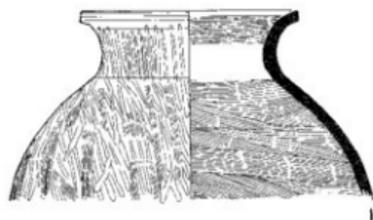


fig. 101
SK401出土土器

0 20cm

第5遺構面

ビット6基、溝状遺構1条、土坑2基、落ち込み状遺構6基が検出された。溝状遺構以外は北法面の下層部で検出されている。法面の幅は下層にいくに従って広がるが、ビット6基は建物址としてのまとまりをつかむには至らなかった。ビットは直径0.2~0.4mとばらつきがあるが、深さ0.2m前後で皿状を呈し浅いものである。

ビットを除いてSK502以外の遺構は、調査区外に広がり規模等を明確にすることはできなかった。

SK502は歪な円形の土坑である。長径1.4m、深さ0.2mの規模を持つ。特に出土遺物はなかった。

SX504は西から東に徐々に下がる落ち込み状遺構で、東側の肩は明確ではなく、SX505、SX506、SP507の検出されるあたりから徐々に上がってゆく。

SD501は東南隅(南-1区)で検出された、幅2.1m、深さ0.2mの断面が蒲鉾形を呈する溝状遺構で、弥生土器片と自然木が出土した。北から南へ流れる溝と思われるが、北側(中-1区)は攪乱を受け南側は調査区外となっている。

第6遺構面

ビット、溝状遺構、落ち込み状遺構が検出された。北法面では、SD604が検出された。西から東に流れる幅1.1m、深さ0.25mの溝状遺構で、西の一部はSD603に切られる。溝内からはほぼ完形の長頸壺が横倒しの状態で出土した。SX605は北-2区で検出された長径6.8m、深さ0.25mの落ち込み状遺構で、少量の弥生土器が出土した。他に北法面ではビットが検出されている。

SD602は、SD501のほぼ真下に検出された溝状遺構で、SD501下層とすべきものである。少量の弥生土器とサヌカイト製石錐が出土した。

SX601は、当初砂溜まり状の遺構として検出されたが、最終的には幅3.1m、深さ0.25mの溝状遺構となった。弥生時代中期の壺形土器・甕形土器・高坏・未製の土製紡錘車、板状木製品が出土した。

SX604は、SX601を切る粘質土の堆積した落ち込み状遺構である。長径2.5m、深さ0.4mで、出土遺物はなかった。

第7遺構面

ビット、土坑、溝状遺構、落ち込み状遺構が検出された。層序としては第1次調査で水田址検出面と合致する遺構面のため清掃段階から、水田址の検出がされる可能性に留意して作業を行ったが、水田址の検出はなかった。SD704は、北-4区から中-3区にかけて「Y」の字状の平面形で検出された溝状遺構である。幅3.5m、深さ0.2mで少量の弥生土器が出土した。また遺構の底面から5基のビットが検出された。

SD702 は、北一・二・三区で西方向に流れ、北一・二区で南に屈曲する溝状遺構で、幅3.8m、深さ0.8mの規模を持つ。弥生土器が少量出土した。

SD710 は、後述する SX704 の上面に検出された溝状遺構である。堆積土は黄色粗砂で、規模は、幅1.6m、深さ0.6mである。弥生時代前期と中期の土器が混じって出土した。

SX705は、SD710の北端でSD710を覆うように検出された落ち込み状遺構で、中期の土器が出土した。

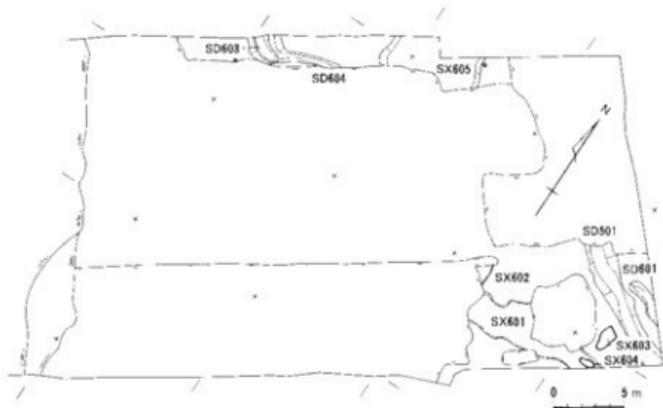


fig. 102
第6遺構面
平面図

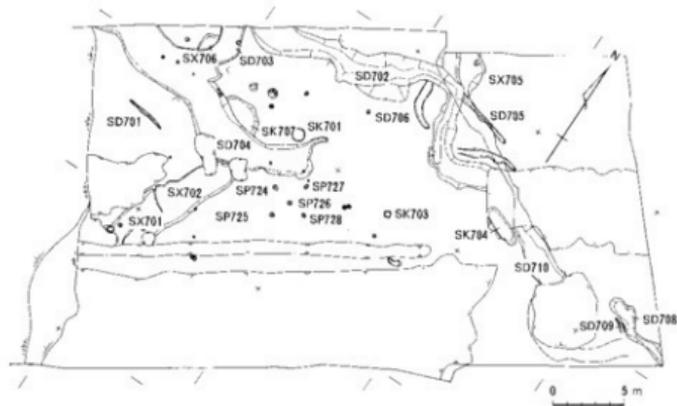


fig. 103
第7遺構面
平面図

S D707は、南一・2区で検出された、「S」字状に屈曲する溝状遺構である。幅1.1m、深さ0.7mで、溝内堆積土は白色粗砂である。弥生時代中期の土器が出土した。また東南隅で大型蛤刃石斧が出土した。加えてS D707の検出面付近では、偶蹄類の足跡や人の足跡が検出された。

中一4区では、溝状の落ち込み遺構S X701・S X702が検出された。それぞれの規模は、幅1.3m、深さ0.1m、幅2.6m、深さ0.1mで浅いものである。平面形からは溝状遺構とすべきだろうか。弥生時代前期の土器が出土した。

中一1～4区の調査着手時の状態はかなり削平されたようであった。遺構面上の残土を清掃した段階でほぼ第7遺構面が検出された。こうした状態で中一3区ではビットが10数基検出された。

これらのなかではほぼ正方形に並ぶ4基のビットがある。それぞれのビットは直径0.2m、深さ0.2～0.4mで、しっかりした掘形を持つ。また4基のビットのほぼ中央の直径0.2m、深さ0.2mのビットには炭が詰まっていた。これらの状態から速断はできないが、削平された堅穴住居址と考えられる。

S K703は、一辺0.44m、深さ0.2mの方形の土坑である。土坑内には扁平な河原石が5個入っていた。遺構の性格は不明である。

また南2～3区は、既に重機による掘削を受け、第7遺構面は存在しなかった。



fig. 104
SX704
土器出土状況

第8遺構面

流路と溝状遺構が検出された。SX704は北・中・南1・2区に検出された流路状の遺構である。西肩は西北から東南に検出され、東肩は調査区外となる。幅10m以上、深さ2.5m以上の規模である。出土遺物は、少量であったが、北端で完形の壺形土器が出土した。他に自然木が出土した。

調査区西側では幅約10m、深さ2.5mの自然流路が検出された。中一3区で二股に分岐する。二股に分岐した流路を流路1、本流を流路2とした。流路1の断面形は蒲葺形を呈し、幅2.2m、深さ0.6mである。流路2の特に中一3区の側面は、流れの勢いが激しさを示すように壁面が直立もしくは抉られていた。

出土遺物は、縄文時代晩期後半の突帯文土器を主体とするが、古い時期の遺物として滋賀里Ⅲ式に属する波状口縁をもつ浅鉢が出土している。

また、流路中一3区の底面に近いところでは、石棒が1点出土している。長さ45cm、両端はややつぼまる直径13cmの大型品である。石材は紅蔭片岩である。あわせて第8遺構面検出時には、中一2区の青灰色泥砂層より残存長20cmで、断面形が紡錘形の緑泥片岩製の石棒が出土している。

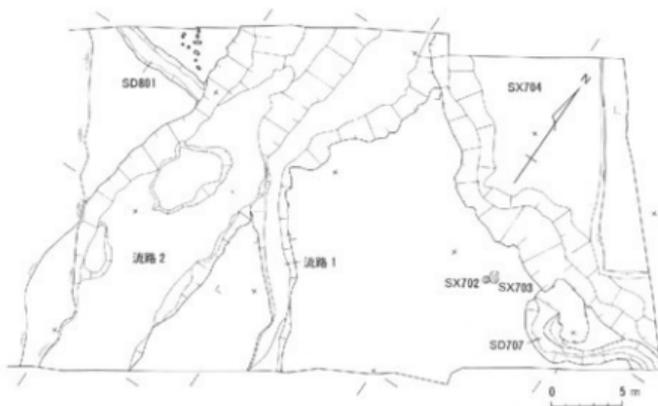


fig. 105
第8遺構面
平面図

自然科学分析

発掘調査に伴い、自然科学の諸分析を行った。

- ①地形環境分析 地理学的観点からボーリングデータ・地形図・調査地の層序断面などを用いて、遺跡の地形環境を分析する。
- ②火山灰分析 土壌中に遺存する火山灰を抽出、分析することにより遺跡の形成過程や堆積土壌の年代を決定する。
- ③放射性炭素分析 調査で出土した木材・炭・土壌に含まれる放射性炭素

の分析によりサンプルの絶対年代を決定する。

- ④プラントオパール分析 植物が残す機動細胞珪酸体(プラントオパール)を抽出、分析することにより、調査地の植生環境を復元する。特に第7遺構面での水田址の有無を分析する。
- ⑤花粉分析 植物が残す花粉化石を抽出、分析し調査地の植生環境を復元する。プラントオパール分析と相互補完的分析である。
- ⑥大型植物遺体分析(種子分析) 調査地より出土した植物遺体(特に種子等)を同定、分析することにより、調査地の植生環境を復元する。
- ⑦大型樹種分析 調査地より出土した木材を同定、分析することにより調査地の植生環境を復元する。

3. まとめ

これまで1次から5次に至る調査を行っているが、今回の調査では初めて中世の遺構面が検出された。また、この遺構から市内では初例と考えられる元代末期から明代初期の染付け碗が出土した。

さらに遺跡の範囲が、東西200m、南北300m以上の広がりをもつことが推定されるようである。

縄文時代晩期の遺構と遺物の検出は、付近にこの時期の集落が存在したことを示唆し、農耕文化を受容できる素地が既にこの地域にあったことを示している。

今回の調査やこれまでの調査の成果から、縄文時代晩期から弥生時代前中・後期にわたって集落が間断なく営まれていたことや前期の水田址の検出は、摂津西端部の拠点集落としての位置付けができる。



fig. 106
調査区全景
(南から)

12. 戎町遺跡（第7次調査）

1. はじめに 戎町遺跡は妙法寺川左岸の扇状地末端部に立地する遺跡である。これまで6回にわたる調査が実施されており、縄文時代晩期～中世にいたる複合遺跡であることが明らかになっている。
- 今回の調査地（第7次調査地点）は大田町2丁目37-2に位置し、昭和62年度に実施した第2次調査地点の北側に隣接する地点である。

2. 調査の概要 今回の調査においては3面の遺構面が確認され、弥生時代中期～鎌倉時代初頭にいたる遺構・遺物が検出された。

基本層序

上層より現代盛土、青茶色砂質土、青茶色粘砂土、青茶色粘質土、黒茶色粘砂土、濃茶色細砂混り砂質土、茶灰色細砂、青灰色細砂混りシルトの順で、青茶色砂質土は平安時代後期～鎌倉時代初頭、青茶色粘砂土は奈良時代後期～平安時代前期、黒茶色粘砂土は弥生時代中期の遺物をそれぞれ包含する層である。

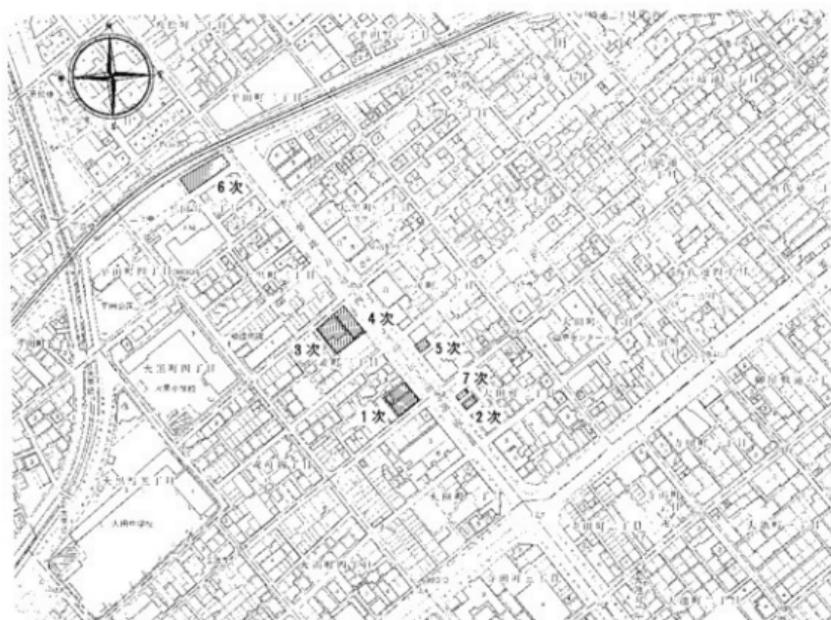


fig. 107 調査地位置図 S = 1 : 5000

第1遺構面 弥生時代中期の包含層である黒茶色粘砂土の上面で検出された遺構面である。

直上層の青茶色粘質土が水田耕土と考えられ、この遺構面では獣足痕やスキ取り痕と考えられる溝状遺構が検出された程度で、遺構からの遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

第2遺構面 弥生時代中期の包含層である黒茶色粘砂土を除去した濃茶色細砂混り砂質土の上面で検出された遺構面である。

遺構は小規模な溝状遺構5条（SD01～05）、不定形落ち込み状遺構3基（SX01～03）、ピット状遺構（SP01～11他）などで、その出土遺物から、そのほとんどが弥生時代中期のものと考えられる。

第3遺構面 第2遺構面のベース層である濃茶色細砂混り砂質土を除去した時点で検出された遺構面である。

第1・4次調査で確認された弥生時代前期後半の河道の最上層であると考えられるが、杭状木製品（長さ約1m、太さ約8cm）が1点検出された程度で、時期を確定できるような遺物は確認されなかった。

遺構としては河道の埋没段階における小規模な流路の西側肩部を検出したのみである。

第3遺構面下層 今回の調査は工事の影響の及ぶ深度（現地地表下-210cm、但し一部現地地表下-260cm）までの調査で、最大現地地表下-260cmまで掘削を行ったが、当調査区内においては、その土層の状況から、河道の埋没土と考えられ、

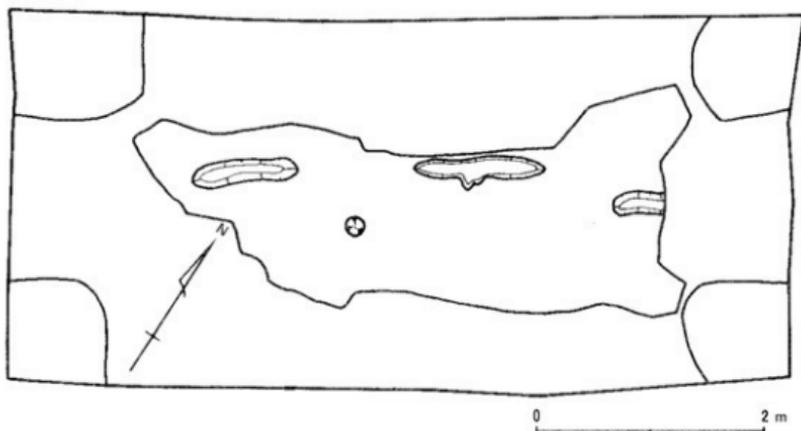


fig. 108 調査地平面図（第1遺構面）

3. まとめ

河道の底部を確認するには至らなかった。また、遺物は検出されなかった。

今回の調査においては、弥生時代中期の遺構を数多く検出したが、調査面積にかなりの制約があったため、各遺構の性格や集落の広がりを確認するにはいたらなかった。

しかしながら、遺構・遺物包含層中より弥生時代中期、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺物がそれぞれ出土したことは、戎町遺跡の様相を知る上での一助を担うものと考えられる。



fig. 109 調査地平面図 (第2・3溝横面)